

324

513

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



B
4



ボードン・ローバウン博士著
松本益吉譯

神

論

日本基督教興文協會



序

本書は前著『有神哲學』の修正増補なり。嘗て紐育大學の請に應じデームス講演を試みしことは、蓋し本書の修正を促がし、起因となれり。前書に於ては推論稍貧弱に、認識論的及び形而上學的の推論は、唯だ暗示を與へたるに過ぎざりき。余は本書に於て此の缺點を補はんことを欲す。本書の大部分は全く書き直したるものにして、新材料を増加すること殆んど五割に及べり。然れども余は本書を著すに當り、専ら前書の計畫に従ひ、緊要なる推論を試みるに止めたり。是れ讀者が其の真相を解し又た其の眞價を覺るに至らんがためなり。事實を集むること多く、引證を擧ぐることも豊富ならんも、議論の論理的原理にして明確ならず、相互一致せざる限りは、何らの論決をも下すこと能はざるをもつて、推論を試みることは現下更に緊要なることたり。現時思想家の問題とする所は、有神論的論理の性質と價值とにありとす。而して此の問題は雄辯により、或は隠證伴争を試みることによりて決せらるゝものにあらず。此の見地より見れば、本書は有神論理と稱するを妨げざるべし。

本體論的推論は適當に何物をも證明することなし、而して宇宙論的、意匠論的推論は本體論に憑據するものなりとは、カントの既に指摘したるところなり。

されば此の推論は數學的に證明し得べきものにあらず。完全なる實在者の存在を假定して立論するものなり。余は少しく異なる形式によりてカントと同一の説を主張したりき。然かも決して有神論の信仰を以て根據なきものとするにあらず、反つて殆んど有神論と同様なる公準は、吾人が全心理的生活の基礎たることを示さんとせり。信仰と意志との分子は、凡て吾人が推理の中に潜在するものなり。之れを證明し得ずと雖ども、吾人はなほ之れを信するを得。

之れを數學的に證明し得ずと雖ども、吾人はなほ之れを擇ぶことを得。思想界より信仰の分子を取り去ること能はず。心若し信仰を有せざれば何事をも語ることは、實に力なきものたるに至らん。此の事實を忘却するが故に、議論は終に文字上の争ひ論理上の闘ひとなり了る。吾人は肯定か否定か、將た更に一層混亂を極めたるものなるかを判定するの難きを覺ゆ。「證明」に對する背理の要求は、又た背理の「證明」を以て之れに應ずるに至れり。かくして推論は其の主として屬すべき生活行爲の範圍より轉じて、形式的論理の空妄なる荒野に移されたるものなり。而して有神論の推論の遭遇する困難は、かのエルサレムよりエリコに下る旅人と異なることなし。かゝる誤謬に反して、余は信仰の基礎を以て、實際的生活的のものとなし、論理は唯だ人及び國民が依つて以て生存する大なる信仰に關し、其の誤謬を防ぎ其の妥當なるを示す調節的作用を爲すに過ぎざるべきを示さんとす。此等の信仰は論理的、學究的の推論といはんよりも、寧ろ生活の定式及び表示といふ

べきものなり。されば有神論は吾人が全生活の根本的公準なりとは、吾人が結論するところなり。有神論は固より假定を設けずして之れを證明することを得ざるべし。然れども之れを拒否するときには自然に凡て吾人の利益を害するに至るべきなり。

此の主張は有神論と認識問題との關係を考察するに當り、特に力説せられたり。余は努めて吾人の認識及び哲學的利害得失は、吾人の道德及び宗教的利害得失と同じく、有神論と密接なる關係を有し之れと生死を共にするものなることを示せり。されば有神論は何物に依るも、精確に之れを證明すること能はずと雖ども、然かもそは凡ての物に含意せらるゝことを許さざるべからず。有神論に反する諸説は、普通知識の問題未だ構成せられず、唯だ知識は當然の事なりと思考せられたる。思想の本能的程度に行はるゝものなり。此の程度に於ては如何なる説と雖ども行はれ得るものなり。而して其の自滅的なるものに於てもなほ且つ然り。一たび其の説の自殺的含意摘發せられんか、論者は推理に依らざる常識の後援に頼りて、批評家の説を攻撃否定し、敢て自家の説を問はざるなり。而して當の敵は反つて自家の説たる事を知らざるものなり。論者は適者生存の法を以て、信仰を限定する原理なりと稱す。而して人類の雄大なる世界的確信を拒否す。彼は適者生存の法は思想と事物とを調和せしめざるべからずといふ。而して生存の信仰を拒否す。彼は心を以て内部の關係と外部の關係との齊整にありと定義す。而して直ちに何事をも識る事を得ずといふ。彼は不可知

的原因を以て、凡ての信仰の本源なりとなす。而して其の信仰の大部分は妥當ならずとして拋棄す。時としては信仰は凡て無益の長物なりと公言す。此の本能と思考との混合は、事實互に相敵視し相殺戮するものなれども、之れを以て科學、哲學の深玄なるものなりと誤解するもの多し。世人廣く認識は哲學の主要問題の一にして、凡ての學説は認識説によりて判定せられざるべからざるを覺ゆるに至りて、以上の如き謬説は、速に其の跡を絶つに至れり。人一たび此の事を覺り得んか、無神論と凡て必然説に屬する機制説とは、哲學上無識陳腐の説と認めらるゝに至るべし。

認識論は無神的思想の自殺的思想なるを示し、形而上學的批評は、無神論の形而上學が些の根據を有せざることを顯はせり。普通思想の蕪雜なる實證論と機制的必然の總念と相結ぶときは、無神的思想の發育を資くること少なからざるべし。普通の形式を具へたる實證論と、之れに基く機制論的自然説とは、既に其の跡を絶ちたりといふべし。今や哲學は凡て機制的、無人格的の立場より推論することの、空疎なることを了解せんとするに至れり。されば吾人が科學及び哲學の基礎として兩者の爲めに擇ぶべきものは、有神論の外何物をも有せざるなり。機制説の抽象と哲學的獨斷の無人格的範疇とは、生ける自覺を有する睿知を離るゝときは抹殺せらるゝものなり。それが或は存在し、或は意義を有するは、此の生ける自覺を有する睿知と結合するが故なり。

之れを概観すれば、有神的信仰は多望なりといふべきなり。前時代に吹きあれたる無神の烈風は

既に静れり。無神論の行はれたるは主として當時の淺薄なる哲學に基く誤解に由るものなり。然れども吾人は爾來我等の問題を分解し、我等の批評を進歩せしめられたれば、吾人は我等と我等の問題を理解すること遙に前時代に優る。科學と哲學とは賢明なる分業と、公平なる境域の區分とによりて今や共に住居してその友情を厚うするに至れり。一時盛に唱道せられたる宗教と科學との衝突論、今や全く其の影を失ふに至れり。當時の勝利といひ恐慌といふもの共に依るべき根柢あるなし。其狀の實に盲目者の争鬪に酷似す。天は晴れたり。されども根本的問題の存することなほ前日と異なることなし。認識論の進歩は、無神的思想の自殺的性質のものたることを明かにせり。適當なる分業法は、科學と哲學とをして各其の相當なる分野に安ぜしめ、有神論をして益思想及び生活の無上條件たらしむる觀あるに至れり。

目次

緒論

論 自 五一 頁

宗教は事實なり。宗教の起原。起原の諸説は明晰を缺けり。諸説は宗教的事實の説明にあらずして時間的發達の記述なり。宗教の歴史。宗教の合理的基礎。論理の方法。嚴密にして活力ある方法。信仰の實際的、目的論的基礎。論理學の作用。論理學は齋整的にして構成的にあらず。有神論と無神論とは等しく假定説にして其の眞偽は事實に適當なるや否やによりて試験せらるべきものなり。

第一章 世界の原由は唯一なり 自 五二 至 七四

カント有神的推論を批評す。推論の傳承的分類は拋棄せられ、交互作用の事實に起點を發見せり。交互作用の言語上の説明。獨立なる物の間に交互作用の存すといふは自家撞着なり。根本的實有は單一ならざるべからず。

第二章 世界の原由は睿智を有す

自一七五
至一七四

歸納的推論と思索的推論との二類。秩序に基く推論。有神論は秩序に関する唯一の説明なり。秩序に關する無神的説明の眞らしきことの根原。目的論に基く推論。有神的推論の研究に要する注意の諸點。無神論の反對。機制的説明は空妄なり。迷謬の根原。進化。進化論の不明瞭。現象的たる進化。「恰も……如し」の反對。自然界に於ける心の存在を反證する推論はまた人の心をも反證す。有限なる睿智に基く推論。認識論に基く推論。凡て知識に關する機制説は悉く自殺的なり。知識の根本的確實なるものは物にあらずして人格と經驗となり。知識は思想の法則と物の法則との同一なることを含意す。知り得べき世界は必ず思想の世界なり。形而上學的推論。唯心的有神論は思想の問題の唯一なる解釋法なり。

第三章 世界の原由は人格的なり

自一七五
至一九八

不可思議論的反對。無人格的睿智。無限なる睿智の中に含まれたりとする矛盾。矛盾といふは唯だ言語上の事のみ。心理學的反對。完全なる人格は唯だ絶對のみ之れを有す。反對論中の眞理。

第四章 世界の原由の形而上學的屬性

自一九九
至二二九

唯一。唯一は唯だ人格的平面に存す。不變性。唯一の不變者なる睿智の自己同一と自己平等。遍在。空間の形式下には不可能なり。永劫。世界原由と時間の關係。全知。豫知の可能。全能。神と眞理との關係。神の意志と神の存在。

第五章 神と世界

自二三〇
至二八五

汎神論。量的汎神論は成立することを得ず。有限者に關する二種概念。靈魂は創造せられたり。汎神的諸説は一として成立すること能はず。有限なる靈の實有。有神的概念。創造は一時か永遠か。世界と神との現在の關係。世界の支配者としての神。人と自然との關係。自然説と超自然説。内在、超越の神。

第六章 世界の原由は倫理的なり

自二八六
至三三四

形而上學的と道德的屬性との差別。經驗的推論。道德性に基く推論。歴史と社會の構成とに基く推論。論理と生活。樂天教と厭世教。樂天家も厭世家も共に抽象の弊に陥る。先天的の議論

は無益なり。許すべからざる擬人説。世界の法則は善なり。人の最悪なる禍患は自ら招きたるものなり。唯だ實際的の解決を能くし得べし。動物界に於ける害悪。倫理學と絶對者。絶對者は倫理的たり得るか。

第七章 有神論と生活

自三三五
至三六一

有神論に對する實際的推論を説明す。無神論と義務。無神論と道德上の判断。前後貫徹したる無神論は倫理的懷疑に對し自説を防衛すること能はず。倫理學は吾人が宇宙と人生とに關する一般の所説に依存す。無神論と道德上の理想。無神論と道德上のインスピレーション。近代無神論に於ける宗教性の位置。

結

論

自三六二
至三七一

有 神 論

ボールドレン、ピー、バウン著

松 本 益 吉 譯

緒 論



人類は宗教を信奉する本性を有す。此の本性の起原の如何なるにせよ、又た吾人が之れを喜ぶと喜ばざるとにかかはらず、人類は兎に角宗教を信奉する本性を有するものなり。人類の生命と諸種の傾向との目錄を製し而して此の中より宗教を取り除くことあらんか、此の目錄は實に不完全のものとなりたるべし。人類の宗教的傾向と活動とを忘却したる歴史は、蓋し人類の最も著しき發現の一つを忘却したるものと云はざるべからず。極めて無宗教的なる政治家と雖ども、よし宗教を根據なきもの或は病的のものなりと思惟するにもせよ、猶ほ之れを以て一の事實として取り扱はざるを得ず。或は又不信極まる歴史家と雖ども、宗教の世に及ぼせる巨大なる勢力については、之れを認識するの止むを得ざるものあるべし。財政經濟の見地よりするも、宗教の豫算は吾人が全經濟の大項

目の一に加へざるべからざるべし。その可否は兎に角宗教は人類の生息せる處には何處にも存在せざるなく、生活、思想、藝術、文學亦たこれが感化を蒙らざることなし。吾人の地球は地球外に存する勢力の影響によりて運動するが如く、吾人の人生も亦た幽玄にして見るべからざる世界に其の根底を有する觀念の感化によりて進行するものなり。吾人は見ること能はず聽くこと能はざる此の勢力の存在を認めざるを得ず。吾人はこの勢力に依存し、此の勢力に對して種々の義務を負ひ、且つ吾人の生活と行爲とを監視せらるゝものなり。此等の勢力に對する吾人の關係は、吾人の存在に於ける最も深く最も高きものにして、又最も森嚴なる要素たるなり。宗教は或は一の誤謬、妄想、迷信なるやも知れず、然かもそは歴史的の事實として否定すべからざるものなるを如何せん。如何なる惡魔祓も、恒久に此の惡靈を祓ひ得る力を有せざるなり。事實はかく争ふべからず。かくて自ら三個の疑問は生じ來る。即ち宗教の起原、宗教の歴史及び宗教の合理的根據若しくは保證に關するもの是れなり。

宗教の起原

宗教の起原に關する問題に對して與へられたる答其數少しとせず。是れを國家及び僧侶の案出せしところのものとして満足するものあり。然れども此の説は既に陳腐に屬するものにして、人之

れを顧みるものなきや久し。外部の權勢によりて、人情の本然にあらざる虛妄なる觀念を長く人の心に強ひんことは、到底不可能の事なれば、宗教の起原は之れを人心其れ自からの内に求めざるを得ざるなり。恐怖は此の起原なりとは古昔より論ぜられしところなり。曰く人は怯懦にして力無きものなれば、一には助を求めんと欲する念より、二には恐怖の心よりして、自然に神の存在を想像するに至るものなりと、此の説はルクレテウスの詳論せし所にして、後ヒュームによりて廣く唱道せられたるものなり。彼は宗教的觀念の起原を以て擬人視てふ人心の自然的傾向に基くものとなせり。乃ちいへらく人は凡ての物像をもて皆己の如き生命を有するものなりと臆測し、自己の周圍を見るべからざる無形の存在者によりて圍繞せらると思惟するに至ると、宗教の起原に關する他の一説はまたいふ。見るべからざる世界の觀念は、夢、失神、癡癡等より思ひ付かれたるものにして、一たび此の如き觀念起るときは、一般の人心はかゝる觀念により占領せらるゝに至る。而して、此の謬見より脱し得るものは、唯だ非凡の見識を抱ける少數の人あるのみ、宗教的思想の全き體系は實に此の如き不體裁なる起原より開發せられたるものなりと

此の種の見解は甚だ數多く枚擧に遑あらずと雖も、何等の利益をも人類に與へざるなり。第一以上の如く確實なりとせられたる事實も疑問の餘地存するものなり。人類學者は宗教の起原を以て精靈若しくは幽鬼の信仰に基くものなりとする説を、結局動かす可らざるものと考ふると久し。然れど

も更に廣く又た深く劣等人種の宗教的現象と其信仰とを研究するに隨ひ、此の確信は甚だしく動搖せらるゝを免れず。比較的高尙にして純潔なる概念も、未開の人民中に發見せらる。然かもその概念は屢彼等の地上的、感覺的謬説より遙に先ちて發生することあるものなり。普通の人類學は宗教的現象の研究に對し、極めて皮相的にして又た同情薄きものなり。此の種の研究は多く思辨的學説の感化なるか、或は宗教は妄想若しくは疾病なりとの確信の下に行はれたり。即ち前の場合にありては、自己の説を資くるが如き事實のみを選び、後の場合にありては、たゞ機械的に宗教若しくは宗教以下の妄誕無稽なる説話、若しくは人をして戰慄せしむるが如き物語をのみ彙集したり。ラング氏の言へる如く、「人類學は重に慾情、假裝舞踏、念呪及び祭司の詐欺等に眼を注ぎて、凡そ敬ふべきこと、おほよそ善稱あることは、比較的之れを輕視し、或は全然之れを看過せり。」かゝる方法は多く公正なる研究を妨げ、又た事實の真相を洞察すること能はざるものなり。此等は人類に對する更に鋭敏なる同情と歴史的事實に關する更に深遠なる感覺とを要するものなり。蠻人の夢若しくは空想の中には、文明國民の偉大なる宗教的發達の十分なる理由存すとす信仰は、たしかにイスラエルに見る信仰以上のものなり。

されば宗教の起原に關する歴史的問題が豫想の如く單純ならざる如く、又た單一簡潔なる方式を作ることも到底不可能の事なり。加ふるに宗教の本源に關する普通人類學上の諸説は、事實の問題を措いては概して全然曖昧なるものなり。そが記述は宗教現象其の物の説明なるか將た又た宗教現象の歴史的發現の順序を記述したるものに過ぎざるか明瞭ならず。然かも兩者は甚だしく相異せるものなり。

されば如上の諸説は皆宗教的起原の説明とするに足らず。そは感覺的哲學を宗教の方面にまで推し廣めたるものなり。感覺哲學は智力の合理的要素を五官の作用に歸せしめ、倫理的要素を非倫理的要素となすが如く、また宗教性をして宗教的ならざるものに歸せしめんと試みたり。然れども此等は十分に問題を論ずることなく、豫め之れを假定するものにして所謂ペンシヤフリンセ隱證伴争の弊に陥るものなり。例へば心の全性を A といふ性質を以て顯はさんか、A にあらざるものを此の中より開發せしめんことは、到底永久に不可能の事なるべし。又た心の性を以て A といふ一平面に限られたるものとなさば、そは又た始めの A を超越すること出來ざるべし。少しにても動かんとせば、A は A に超ゆるところなかるべからず。運動の眞實なる根據たる潛勢力を其の中に含蓄せざるべからざるなり。されば其の知るところ感覺的事物のみに限られたる存在者は、到底之れを超越すること能はざるべし。かゝる者にとりては萬物悉く其の見ゆるが儘にてあるの外なかるべし。其の眼には棒は棒として見ゆべし。是れを神靈の宿れるものと見做すが如きことなかるべし。日月も唯だ之れを光輝ある圓體と見るのみにして、拜すべき神とは思はざるなり。此の如き者をして感覺的の物象を

超越し、以て宗教的の對象を認めしめんには、Aの感覺若しくはBの動物的恐怖の外に、更に何らか、他の資質を之れに付せざるべからず。家畜の如きは感覺と動物的恐怖との兩者を有す。されども其の中に宗教の痕跡を認め得べしとするものは、極めて少數なる樂天的の進化論者あるのみ。よしや宗教の痕跡家畜の中に存すとすも、そは決して單純なる感覺が宗教的觀念となり得ることを證するものにあらずして、寧ろ動物の心性は吾人が従前考へしよりも、遙に優りたるものなるを明らかにするものなり。

吾人若し明晰なる理解力を有せんか、以上宗教の起原と本源とに關する諸説は、單に宗教的觀念の時間的發達の順序を説述したるに過ぎざることを了解し得べし。そは始めに人は宗教上未熟の觀念を有せしも、漸次日月を經るに隨ひ今日の發達したる概念に達したるものなることを述ぶるのみ。此の種の叙説に於て批評家の主張せんとするところのものは、その報道せられたる事實が、その報道の如くあらざるべからざること、流俗の思索、先入の假説を以て歴史の事實を改造するが如きことあるべからずとする是れなり。此事實は宗教と科學と社會的秩序とを問はず、均しく同一のものなり。人は始めは蕪雜粗笨なる考を抱くものなり。然かも長き經驗と多くの省慮と又た少なからざる誤謬過失とを重ねて、漸く今日の域に進みたるものなり。事實は何れの場合に於ても、同様な理論的の意味を有す。宗教に於ても將又た科學と政治とに於ても、最初の狀態が其の物固有の

ものにして後發達したるものも、なほ其の最初の狀態を超越する能はざるが如き、單純なるもの一として存せざるなり。此の種の觀念は、多く宗教の起原に關する人類學者の所説中に見るところにして、全く空想たるを免れざるなり。かゝる空想は宗教の本質を以て萬有靈活論となすこと。恰も鍊金術を以て化學の本質となし占星學を以て天文學の本質となすが如し。されども凡て此等の場合に於ける歴史上の具體的事實は、人類は勉めて進歩せんことを欲するものにして、生命の發展と經驗の増進と反省的思想の深遠明瞭とを重ねるに隨ひ、漸次下等不十分なる概念を變化せしめて、之れを高尚正當なるものとなすに至るといふ事實是れなり。かゝる宗教思想の發展に對しては、吾人何ら背理の事と思ふ理由を有せず、又た後に發達したる概念を降して、原始の荒唐無稽なる概念と其の本質を等しくするものとなさざる可らざる理由をも有せざるなり。こは言語上の同様といふ中に困惑せる盲目的感覺論の朴素なる誤解に過ぎざるなり。眞實なる發達の存するところに在つては前なる者の意義は、たゞ後に來る者によりてのみ顯はさるゝものなり。櫛の眞性と其の可能性とは、櫛の樹によりて始めて之れを知ることを得るなり。心の眞性は唯だその最も成熟したる表現によりて知らるゝものなり。吾人若し心の認識力を知らんと欲せば、吾人は思想の最高なる發現を研究せざるべからず。此の如く吾人若し心の宗教性を知らんと欲せば、吾人は人類の最高なる宗教的發現を考査せざるべからざるなり。こは一見明白なることなるに、然かも普通の人類學者は漫然之

れを看過したりき。彼らは^{フエニスム}咒物崇拜、^{トイテム}崇拜を以て宗教となし、全く大宗教家及び聖賢の教を顧みざるなり。これは科學の完全なる説明を後世の大家に求めずして、原始人民の未熟なる觀念に關する説話を集むることによりて得んとするが如く、極めて短見者流の事たるなり。人類學は事實の歸納に完全を欠ぐとの評を免れざることは、吾人既に之れを言へり。而して人類學は又たそれ自からの論理をも誤れりとの批評を免れざるべし。論理學は事物の最高至眞の發現を知らんと欲せば、その將來をも察せざるべからざることを教ふ。然るにかの思索家は批評的ならざる迷妄に左右せられ、事物の原始的狀態の中に、その眞實固有なる性質を發見せんと欲するものなり。

原始の宗教的觀念は夢、失神、其の他諸種の不思議なる現象によりて、形成せられたりしものならん。されども吾人は二種の事實に注意せざるべからず。第一如上の夢、失神等は、決して宗教的現象の總體にあらず、即ち人類の全宗教的生活にあらざることを注意せざるべからず。第二に吾人は先づ人性其の物の中に、宗教性の要素を入るゝにあらずんば、此等の夢、失神等より宗教的のものに到達するに能はざるべし。そはなほ人に合理性なくば、此の合理性の最初の表現たる幼者の空想をして、その最後の發現たる壯年の老熟したる思想にまで進ましむること能はざるに等し。進歩する存在者は決してそれが現在の狀態によりて、その實相を解すべきものにあらず、その將來如何に變化すべきかを考察せざるべからず。而して此等將來の發達を達すべき潜在力はその性質中に發見せら

れざるべからざるなり。

宗教の起原に關する他の一説は、宗教的觀念は反省的思想の結果なりとするにあり。此の説は吾人之れを實驗に徴して反證することを得。蓋し人は哲學者となりし以前既に宗教を信奉したる者にして、思索的思想は宗教的觀念を批評し、又た之れを明確にする用あるものなれども未だ曾て之れを創始したることあるなし。而して宗教上の信仰は屢理論の助力を俟たずして反つてその位置を堅固に保つものなり。此の故に宗教に於ける理論の位置は恰もヤコブの梯子を顛倒したるが如しといふもの多きが如し。

又た宗教の觀念は、天賦の本然に出で、内部より發生するものなりとするものあり。此の説は吾人が全經驗の刺激によりて、宗教的情操及び觀念を開發するは、人心の自からなる作用なりといふに同じ。然れども吾人の經驗によれば、宗教思想は千種萬狀にして其の差極めて甚だしく、たとひ宗教的直覺存すとすも、その内容は唯だ見るべからざる超自然的存在の存することを、おぼろに了解すといふに過ぎざるべし。加ふるに天賦といふ語は、意義頗る曖昧にして誤解を生じ易きものなるが故に、之れが使用を避くるに如くはなし。

此の外之れと相似たる説をなすものあり。曰く靈魂は宗教上の眞理を容るゝが爲めに、特種なる機關即ち官能を有するものなりと、而して此の官能の狀態如何に就いては神學上重要なる區別を生

ずるに至れり、時に之れを信仰と稱し、時に之れを感情と呼び、又た時に之れを「神意識」と名けたり。然れども官能といふもの提出せられたればとて、何物をも説明すること能はざるは、心理學の夙に道破したるところなり。何となれば官能は、常に單に之れによりて、説明せられんとする事實の抽象に外ならざればなり。言語を説明する官能は、言語官能なり。視覚を説明する官能は視覚官能なり。吾人は官能によりて言語若しくは視覚を得るにあらず、言語若しくは視覚の存在すればこそ、その官能の存在をも言明するものなれ。而して此の言明は、つまり吾人は語り若しくは視るが故に、語り若しくは視ることを能くするものたらざるべからずと言ふに外ならざるなり。恐らくは宗教の依りて以て發動する官能といふものを搜索するほど無益の業なかるべし、然かも此の問題が漸く陳腐に歸せんとするは賀すべき事なり。

論じてこゝに至れば、吾人は宗教の起原に關し、左の結論に達すべし。即ち如何なる外部の作用と雖ども、法則、天性若しくは目的を有せざる空虚なる心を開發すること能はざるべし。これ空を搏つが如きものなればなり。心理學も亦た如何なる場合に於ても外部より何物をも心中に推し入ること能はざることを教へたり。凡て外部の事物、諸種の感化は、單に靈魂自身の本性を表現する機會を作るに過ぎざるものなり。されば唯だ外部の經驗にのみ宗教的觀念の起原を求むることは到底望むべからざることにして、吾人は宗教を以て人類の本性に基くものとなし、その自然の要求と

人性固有の傾向とより來ると假定せざるべからず。然れどもまた宗教的衝動若しくは本能のみを以て足れりとなし、本能若しくは衝動はその目的點に進行して誤ることなしといひ得ざるものなり。智力と良心との指導を離れば、宗教は實に奇怪なる若しくは恐怖すべき状態に陥らざるを得ず。そは常に個人或は社會の到達したる智力及び道德的發展の段階を示すものにして、個人若しくは社會の状態によりて自から差別あるものなり、そは、人性全體の作用なり。

宗教的開發の刺激は簡易單純なるものにあらず。そは人性の多様なるが如く多様なるものなり。シユライエルマヘルはその刺激を依頼の念に見たるが如し。此の依頼心は人をして宗教的要求の念を喚起せしむる有力なる要素なること論なきことなり。自由安樂にして自恣充實なる地上の生活を想像するは難きことにあらず。昔時の作者、かゝる生活をなす人に就いて語りて曰く「彼輩は變化を爲さざる故に神を恐れず」と、ローツェルは「肥え太りて神の觀念を拋棄したる」人の事を述べたり。然れども依頼の感は多くの中の一要素なり。智力の要求、良心の要求及び警戒、情愛の渴望、審美性の衝動及び意志の理想等は、天啓の言、靈魂上に於ける神の直接なる感化と共に、悉く皆此の問題中に入るべきものなり。

宗教の歴史

吾人は既に宗教の起原を論じたり。同様の攻究は又た宗教の歴史にも適用し得べきものなり。されども吾人がこゝに此の問題に論及する所以のものは、宗教の眞理は、個人若しくは人類の歴史に於けるその發達の状態を研究するによりて始めて識別せらるゝものなりと妄想するものがあるが故なり。抑も或る觀念の心理的一時的の發生は決して其の哲學的價值及び確實と同一視すべきものにあらざることは多くの思想を煩はさずして明かならん。若し哲學的價值を唯だ一種の心理的起原及び歴史に限れるものとせざる以上、觀念の哲學的價值と眞理とを定めんが爲めに、その心理的起原を提出するは、全く不當の行爲といはざるべからず。此の事を明示したるもの嘗てあることなし、凡そ宗教の合理的價值は、唯だその内容を研究し、之れを維持するところの理由を考査するによりて決せらるべきものなり。

かく宗教の起原及び歴史と、その合理的價值及び確實との混同を避けし上は、何人も初代の宗教的思想と行爲との状態に關する、眞面目なる研究の闡明せる事實を排斥するものなかるべし。人は唯だ歴史を有りの儘に知らんことを望むものにして、通俗思想家がかくあらざるべからずと定めたる説を、聽かんと欲するものにあらず。前代の思想が荒唐無稽なりとて、後世の概念をも輕侮せん

とするは、無教育者と淺薄なる思想家との常に陥る言語上の同様といふ觀念に惑はさるゝに外ならざるなり。吾人若し下等なる觀念が自から進化して、高等なる觀念となるものにあらずして、生ける人間が經驗を廣くして思想を明かにするに従ひ、漸次その觀念を適合擴大するといふことが、客觀的事實なりと記憶するとき、迷霧は自から四散するものあらん。

或る意味に於てのみ宗教の歴史は、その眞理の問題と關係を有するものなり。吾人若し人類の全宗教的運動を研究し、唯だ其の原始的荒唐なる形式に注意するのみならず、又たその發達したる高尚なる状態をも考査せんか、吾人は宗教的要素の普遍的にして、到底人類より之れを除去すると能はざるの感を深くし、又た宗教開發の順當なる方向の那邊にあるかを察知するを得ん。かゝる歴史的事實は、事物本性の啓示にして偉大なる宇宙の發現と成果なりとの意義を有するものなり。かゝる事實は又た推論となるものなり。そは又た宗教は客觀的眞理なりとの説を贊助する有力なる假定となるものなり。宗教を以て純然たる空想となし敢て之れを顧みざるは懷疑的の暴行にして、終には道理そのものをも潰滅するに至るべきなり。

宗教の合理的基礎

然れども吾人が現に攻究せんとする所の問題は、宗教の本源に非ず又その起原と歴史ともあら

ず、寧ろ宗教の合理的基礎殊に宗教の中心たる有神的觀念の合理的基礎を究明せんとするにあり。故に吾人は宗教的觀念の起原及び發展の研究は暫く之れを措き寧ろ此等觀念の存するに付きては、合理的保證の存するや否やを論ぜんと欲す。吾人は此等の事を爲すにあたりて、多大の確信を増すものなり。何となれば認識の何れの説たりとも吾人の認識的、批判的識見は、その粗野未熟の時よりも、寧ろ老熟發達の形態の時に於て、更に信憑すべきものなることを教ふるが故なり。經驗が知識の本源なりとせんか、吾人の經驗が更に増し加はり且つ廣まり行くに従ひて、その指示するところも、亦た一層確實となるものなり。若し進化と自然淘汰の法によりて、吾人の官能と識見とが發達するものとせんか吾人が現在の官能は、前代のものよりも、更に信憑すべきものならざるべからず。大人の識見を棄て、小兒の智力に依るものなきが如く、真理の標準を得んが爲めに、誰も人類の童蒙時代に遡らんとするものあらざるべし。ペーコンの言へる如く現代の吾人こそ眞に最も古き人なれ。換言すれば吾人は最も長き經驗を有するものなり。吾人こそ思想其の他に於ても最適者のみを生存せしむといふ自然淘汰の流れに、最も長く曝露せられたるものなれ。されば如何なる場合にも吾人が現に有する官能を使用すべきものなるは明かなることなり。而して吾人は吾人の最原始の人類或は人類以下の祖先が、宗教の事に關して、如何に考へしかにかゝはることなく、斷然吾人の現在の官能と習得力とにより研究を始め、以てその合理的價值を定めんことを努むべきなり。

吾人の祖先は多くの事物に付て誤ること甚だしきものありき。されば彼らを宗教の權威憑據とすべき理由存せざるなり。人は物質的の事物に關しても、不斷の試練と淘汰とによりて、漸次に原始的の混雜と誤謬とより脱出したるものなれば、心靈的事物に於ても、亦た同様の順序を經來りしや疑ひなかるべし。

原始時代の科學的概念をもて、科學的真理の標準とせば誰か其の背理なるに驚かざるものあらむ。此の如く原始宗教の概念も、亦た宗教的真理の標準となすべきものに非ざるや明かなり。而して漸次世人が之れを了解するに至らんことは吾人の希望する所なり。兩者の場合に於て觀念の歴史を知らんことを望むは人の情なり。されどもその真理を定むるは、他の道に依らざるべからず。

是れを以て吾人は先づ人類の有神的意識を講題となし、之れを批評分解して、其の内容を明かにし、其の哲學的價值を定めんと欲す。吾人は宗教の哲學的演繹、若しくは宗教の思索的構造を企つるにもあらず。唯だ宗教的意識に必須なる事實と含意とを分解せんことを期するのみ。此の研究の結果は蓋し左の三點の外に出でざるべし。即ち有神的觀念は背理若しくは矛盾の見解ならん、然らざれば唯だ宗教的情操に關するのみにして、純粹の智力にとりては、何の意味もなきものならん、或は又た智性、道德性、審美性及び宗教性等凡て人性全體の要求にして、眞善美は均しくその根柢と淵源とを此の中に見出し得るものなるやも知るべからず、若し第一の場合の如くならんには、

有神論の信仰を放棄すべき筈なり。第二の場合に於ては、唯だ宗教性は有神論の信仰を包含すといふ外敢て説明を與ふべからざる事なれどもさりとして思索的道理の缺けたる故を以て、強ひて之れを棄つるに及ばざる事實なりといはんのみ。而して最後の場合に於ては有神論は吾人が全體の官能に關係するものにして、靈魂全體之れを保證するに似たり。以上三説の何れを取るべきかは吾人が逐次論明せんと欲するところなり。

人類の思想に於ける有神論の觀念の作用は極めて複雑なるものなり。第一有神論は諸種の現象を説明する假定説として提出せらるゝことを得べし。かゝる場合には有神論の觀念は毫も宗教的作用を有せずたゞ論理的形而上學的作用を有するのみ。即ち充足原理の下に之れを考察するのみにて、其の目的は現象特に外界の現象を十分に説明せんと欲するにあり。大概の有神論は、此の基礎の上に構成せられしものなり。外界の事物特に目的に對する適合按排宜きを得たりといふ事實に訴へ唯だ睿智ある原因のみ能く之れを説明することを得とせられたり。而して此等の事實を補ふに絶対、相對及び無限有限及び必然偶然及び能動受動等に關する種々の形而上學的考察を以てして事足りりとなす。此の如き有神論が吾人の宗教性を満足するに足らざることは明かなることなり。

第二、有神論は吾人の智的、情的、美的、道德的及び宗教的本性等人性の全部を含むもの、又た之れを満足せしむるものと主張するを得べし。此等の要素は自から敬神の念を發揮するものにし

て之れを開發するときは、殆んど必然的に有神論の信仰の主要なる實際的根據とは成り來るなり。故に人心は外部よりも、寧ろ内部の需要及び渴望に對して、神といふ觀念を順應せしめんことを勉めたり。即ち人心は眞善美の理想を集め、之れを一の完全なる實在、理想の理想、萬物の上に位して、無限に萬物を祝福する神なる觀念に總合せり。若し専ら世界及び生命を推原的に觀察し唯だ充足原理の法則に従ひて適當なる原因を發見せんことを期せしならば、之れによりて得るところの神の觀念は、現に吾人が有する所のものと大に異なるものにてありしならん。

されば神學者の中にすら、間々有神論の推論を以て價值なきものなりと説くものあり。曰く推論は吾人に一種の智的承認を生ぜしめ得べきも、活ける確信を發揮せしむること能はず。嚴正に論理的なるときは、其の結果は荒蕪たるものにして宗教上何ら價值なかるべし。唯だ其の推論が不知不識に活ける宗教意識に依るときは、其の不毛の地忽ち變じて宗教的果實を結ぶこと大なるものあらん。故に最初より公然此の道に出づるを以て得策となす。

此の説は實に半面の眞理を有するのみ。例へばかの意匠論の如き純然たる推原論を以て不十分なりとするは蓋し可ならん。然かも又た其の範圍内に於ては取るべき所あるやも未だ知るべからず。又た絶対者即ち純然たる脱礙的獨立者に關する形而上學的推論は、活ける宗教上の感情を生ずること能はざれども、然かも亦た一種の價值あることを拒むべからず。但し此等推論のみ、神に關する宗

教的概念を十分明瞭ならしむと思ふも亦た大なる誤謬なり。蓋し有神の信仰の實際の基礎は、智的、情的、審美的、倫理的諸性の多方面に亘りて複雑なるものなれば、凡て此等の要素を包括することを爲さず、妄りに其の一部分に偏倚するものは、此の信仰の歴史を解すること能はざるべし。

然れども此處に一の大疑問は起り來れり。即ち此等の要素は果して信仰の理由として正當なるものなるか、將た有神の推論は他の事柄に於ける心意の作用を支配する論理法に比して、寧ろ曖昧なる論理に本くものならざるかと。此の疑問は吾人をして先づ心理上の方法を概括して略説する必要を感じしむ。困難の多くは方法の誤れる觀念より來り、之れが爲めに無法なる期待を抱きやがて不成功と失望とに終るものなればなり。

論理的方法

自明なるもの若しくは數理的に證明せらるるものならざれば信ずることを得ずとは、智力從來の迷信なり。されば是に伴ふ事物研究の方法は次の如し。先づ到底疑ひ若しくは拒むことを得ざる不可抗の事實若しくは原理を發見し、之れを根據とし堅固なる論法を用ひて、其の中より保證し得るだけのものを演繹すべし。斯くして論理上の結局に達すれば止まんのみ。換言すれば疑を容るべきものは何物も認許すべからず。假定を設くべからず。嚴正なる論理に強ひらるるに非ざれば一步

も進むべからず。就中感情情操慾望をして信念を決する力とならしむべからず。吾人若し此の規則を遵守するときは、惑に陥ることなく、智識自ら進むことあらんと。

此の方法の概念に反對するものは曰く、疑ふことを得べきものを悉く疑ふよりは、寧ろ疑はざるを得ざる理由あるにあらざれば、何事をも疑ふべからず。疑ふべき理由の起るまでは、凡ての物を以てそが自ら報道するが儘なりと假定せざるべからず。社會に於て人を皆正直なりと假定し、唯だ特別なる理由ある場合に初めて之れを疑ふことを爲すは、人を悉く虚言者と見做し、唯だ止むを得ざる時初めて之れを信ずるよりも、更に優りたる生活を送るものなり。事理を研究するに於ても亦た同様なり。宇宙及び人類の本性に對し疑問を抱くよりも、寧ろその眞實なるを假定する方反つて吾人の進歩を速かならしむるものなりと。

以上は二種の方法なり。前者は眞實なりとの確證を得るまで、凡ての事物を僞なりと假定し、後者は虚僞なりと證明せらるるまでは、凡ての事物を其れ自からの報道のまゝ若しくはその見ゆるが儘に信ぜんと欲するものなり。思ふに効果を收むるの多きは後者の方法に依るものなるべく、思索的の批評及び密室内の哲學は概して前者の方法に従ふものなり。さればこそ前者は常に荒蕪不毛にして實を結ばざる所以なれ。

嚴正なりと稱せられたる前の方法は、常に初學者の喜ぶところなり。知識發達の最中にある丁年

期に近きものは、暫くは此の方法を貴ぶものなり。推論以外何事をも爲さず、信念すら何等實際的關係を有せざる存在者あらんか、此の方法は實に其の者に取って安全なる方法たるなり。されども吾人人類にとりてはこの所謂嚴正なる方法は、單に純然たる形式的、主觀的數學たる科學にのみ適用することを得べきものなり。實有の世界に處せんとするに當り強ひて此の方法を用ひんとせんか思想は停止して一步も進むことを得ざるべし。近代の初めに當りデカルトは萬物を疑ふと揚言して却つて唯だ一の動かすべからざる事實を發見せり。曰く「我おもふ故に我在り」と。

されども彼は之れより一物をも演繹すること能はざりき、單に我思ふといへる事實のみにては、哲學上何の意味もなきことなり。正しきにもせよ、正しからざるにもせよ、我は何を思ふか、若しくは我は如何に思ふかの點こそ肝要なるものなれ。然れども單に「我おもふ」といへる一事に由りてはデカルトは物の世界にも、人格の世界にも、又た法則の世界にも、到達することを得ざりしなり。蓋し此の方法は、思想をして其の對象を有せしめざるほどに嚴なるものなりし故なり。概して疑ひ得べきものは凡て之れを疑ひ、凡ての疑題は豫め之れを決定しおくといふ方法を以て著手するときは、思想の進歩を期すること到底困難の事なるべし。論理學認識論及び形而上學に於ては、激論中の問題依然として今尙ほ存するにあらずや。又た懷疑家不可思議論者唯心論者等も、今尙ほ此の如きものあるにあらずや。

若し人にして唯だ抽象的の思索家なりとする、凡て數理的に證明せられざるものは、皆之れを疑ふべしといふ方法は、心をして終に荒漠たる主觀的狀態に陥らしめざるを得ず。然れども人は單に若しくは重に抽象的の思索家にあらず。彼は又た活ける存在者にして、實際上の興味と必要とを有するものなるが故に若し生存せんと欲するときは、之れに對して己の狀態を順應せしめざるべからず。蓋し單に智力及び理解力として人を考ふるが如きは主智論の永劫免がるゝこと能はざる一種の誤謬たるなり。人は遙に智力及び理解力に優るものなり。人は意志、良心、情緒、熱望なり。而して此等のものは論理的智力に比して更に勢力ある要素なり。さればその實際的の開發を見るに、心は論理上の演繹にもあらず、又た思索的の必然にもあらざる實際上の公準と假定とを設くること少なからず。此等假定説は人類が宇宙に生存するに必要欠くべからざる方法にして、最も充實せる生活を送る條件といふべく、つまり實際上並に理想上の興味と必要とを表示するものなり。此等明白なる原則は、思索的の構造によりて得らるゝものにあらず、實際的生活を分析するに由りて得らるゝものなり。生活は思索よりも豊富深玄なるものにして、吾人が依て以て生活する原理は自らその中に包藏せられたり。論理學者が設くるところの法則は、證明せられざることは何物も之れを信ずることを得ずとなす。然るに心が實際に遵守する所の法則は、心が自己の主觀的利益と傾向とを満足せしむる爲めに要するものは、歴然たる反對の證據を有せざる以上、之れを眞實なりと假定するを妨げ

ずとなす。通常主觀的分子を排除せざるべからずとせられざる認識界に於ても、亦た此原理の存する痕跡を發見すべし。吾人は之れを尋究せんとす。

吾人は認識的存在者として、天性事物を知らんと欲するの欲望を有す。然れども唯だ直接經驗したる儘なる實有は、之れをして智性の要求に應ぜしむること能はず。故を以て之れを整理して心意の必要に應ぜしめんことを圖る。之れを理論的科學と稱す。之れを爲すに當り吾人は隱然無數なる物と出來事とは、悉く一定したる部類に屬し、一定したる法則に従ひ一の合理的體系を合成するものと假定す。又た本來自然界の眞實なることを假定し凡て明白なる事實の表示するところのもの、信すべきものたるを假定す。更に又た自然界は元來了解せられ得べきものたるのみならず、そは又吾人の能く了解し得るものなれば、此等の事實をして吾人に了解せしむる爲めに、吾人の天性が必要なりと認むる事柄は、此等の事實其の物にも亦た必要なりといはざるべからず。何となれば吾人の所謂事實の説明は若しかくくゝの事實を假定するを得ば、現在の事實を了解するを得べしといふ意なればなり。此の如く吾人は經驗上の現實なる宇宙の裏面に、智力上の理想的宇宙を構成し、後者によりて、前者を理解するものなり。斯くして吾人は物に關して全然異なる二種の概念に到達す。一は五官の感覺によりて供せられ、他は思想によりて達せらる。前者は其が自ら報道するまゝの實有を示し後者は心によりて修理せられたる實有を顯はすものなり。

吾人は是れのみならず頓て理想の宇宙は、現實の宇宙の如く思はるゝに至る。而して經驗上の現實なる宇宙は、現象若しくは假現の地位に墮落す。何物もその報ずるがまゝに承認せらるゝことなく五官の感覺は凡て輕侮せられ、無邪氣なる意識の報告は嘲笑せらるゝに至る。是に於て無數の世界は發見せられ、諸種のエーテルは案出せられたり。各種の事物に關して奇說怪論百出し、吾人の目的は恰も常識によりて自然に發生する確信の虚偽なるを示すに如し。天文學其の他熱、光、音及物質等に關する學説は、即ち之れが例證なり。此等は悉く吾人の心中に有する理想上の構造にして、吾人は之れに由りて經驗上の實有を解釋し、以て吾人の智性に順應せしめんと欲するものなり。

此の理論的作用の本源と理由如何と問はゞこは吾人の認識性の要求自ら然らしむるに因ると答へざるを得ず。蓋し事實其の物は、理解せらるゝと然らざるとに關せざるものなり。唯だ吾人が自然に之れを理解せんことを求め、且つ之れを理解すべき權能を有し、宇宙は理解され得べきものにして、又た吾人能く之れを理解し得るものなりと合點す。吾人の設くる此等の假定は、極めて自然なるが故に、時としては必然の眞理なるが如く思はるゝことあり。然れども實は吾人が心の本性と主觀的の興味とを、實有の上に推し及ぼしたるに過ぎず。かの法則の結晶的組織といふ概念は、純然たる主觀的の理想にして、客觀的の事實なりとすべからざるなり。理解せらるゝを得べき宇宙は、

宗教的及び道德的宇宙と均しく純乎たる假定に過ぎざるなり。加之現實の宇宙即ち經驗の中に示されたる宇宙は解すべからず、解し得べきは、唯だ吾人が現實なる宇宙の裏面に設けたる、かの理想上假定の宇宙あるのみ。嚴密に論理的、批評的の見地より之れを論ずれば、理解すべき宇宙とは、其の實人類の純然たる一偶像に過ぎざるなり。然れども吾人は此の理想上の世界を實在と認めざるを得ず、何となれば本來吾人の理性と智性に背反する世界ありとするは、吾人が認識的天性を攪亂し、心意をして對象なく、又た意義なきものとならしめ、又た懷疑絶望の餌とならしむるものなればなり。

ア・サー、バルフォア氏の『哲學的疑惑の辯護』と稱する著書の示すところに依り、平生反對論者が宗教を攻撃するに做ひ、科學に對して論駁を試みなば此の假定的要素の存在を益明かにすることを得ん。吾人若し科學者に向ひて、其の依るところの公準を證し、其の假定説を明かにすべしとの要求を爲さば、容易に彼をして憐むべき位地に陥らしむるを得ん。彼れをして哲學的懷疑論者を満足せしめよ。彼をして不可思議論者を説破せしめよ。唯心論者をして辟易せしめよ。彼をして法則の體系の存在は客觀的の事實なることを證明せしめよ。彼が事實を了解せんが爲めに要するところのものは、事物それ自身にも亦た必要なることを明示せしめよ。彼をして自己の形而上學の難問を辯明せしめよ。物體が距離を間に置きて互に動作することを得る事實、エーテルの性質、物質と勢力

との關係、此等の問題は彼が先づ論究すべき好問題なりとす。吾人が宇宙の理會せらるべきものたらんことを希望するは、實に其の理會せらるべきを證するに足り又た吾人が之れを背理的實有と見做すを好まずといふ事が、果して其の背理的にあらざるを證するに足るか。之れを明かにせしめよ。又た彼をしてその極めて興味を有する科學は、甚だ狹隘なるものなればその一小派の意見を以て、宇宙の必然なる法則なりと斷言するは、傲慢の極なることを記憶せしめよ。

科學者が其の科學を論じ得るは、彼ら先づ凡て此等の要求に應じて、其の地位を明にしたる後の事なり、決して其の前にかゝる論斷を下し得べきにあらず。懷疑論者、不可思議論者の世に跋扈する間は、科學は全く虚妄ならざるを保證し難きなり。唯心論者口を噤まざる間は科學の研究する對象果して存在するや否やを疑ひ得べし。法則の體系存在すとの證明を有せざる間は、之れによりて如何なる演繹をなすも價値なしといはざるべからず。吾人が事實を理會せんとするに必要なりとするもの、事實其の物にも必要ならずんば、吾人の理論は吾人の心性を外界に推し及ぼしたるに過ぎざるべく、決して客觀的實有を了解したるものにあらざるべし。科學の形而上學に就きては、其の困難の存すること、神學と異らざるは、人の熟知するところなり。通常の科學者は、此等の問題に答へざるのみか、之れを聽きし事さへなきものなり。然かも此等の問題は、實に科學の死活に關する問題たるものなり。事實はこれ吾人がこゝに初めに論及せる方法の反對に遭遇したるものなり即ち

科學者は萬人の承認するところを假定し、批評は證明すること能はざるものを悉く疑ふべしと爲すが如し。

嚴正なる論法は、成熟したる思索家も亦た之れを難しとするところなり。彼は問題不可解の地に立つが故に問題を放棄するか將た又た他の優越なる解釋の方法を擇ぶか二者其の一を取らざるべからず。無論大多數の人は他の道に依らざるべからず。普通の民衆をして、自ら其の解釋の道を思考せしめんとするは、笑止千萬の事なり。彼等が傳聞、模倣及び智的感染等によりて、生存せざるべからざることは自然の事なり。社會の知識のみ獨り彼等が取りて以て従ふべき安全なる標準たるのみ。何となれば假令社會の知識は完全に達せざること遠しとするも、そは概して個人の知識よりも優れるものなればなり。

要するに心は死せる論理の機械にあらず。一箇の活ける有機體にして、種々の興味と傾向とを有するものなり。是れによりて其の開發の輪郭を定め、其の追求の力を生ぜしむ。心の開發に於て隱然目的とするところのものは、此等の意向を認識し、之れをして各適當なる場所と目的とを有せしむるにあり。かくして一聯の理念吾人の心意生活の中に生ず。認識的存在者の點より、吾人は此の宇宙を以て合理的のものなりと假定す。其の要素多くは模糊として現在これを處理すること難しと雖も然かもその中心に至れば、皆秩序整然凡て悉く純清透明にして、之れを理解することを得べし。

し。こは吾人が知らず識らず自然に假定するところなり。かくして吾人の思想中に一切光明なる體系といふ概念を生ず。而して此の體系たるや調和を以て其の基礎となし、合理的法則をその構造となし。其の各部は壯嚴なる恆存の理性によりて生み出され、維持せられ、又た光照せらるゝものなり。然れどもこは唯だ認識上の理想に過ぎずして、吾人の經驗は殆んど之れを維持せざるものゝ如し。然はあれ吾人は此の理想を固執し、之れに反對する事實は、未だ十分に理解せられざるものとして之れを保留するものなり。

吾人は又た道德的存在者なり。故に道德的の意向をも認識せざるべからず。之れによりて道德上の理想生じ吾人は之れをしてかの認識上の理想と相聯關せしめんとするものなり。宇宙は單に合理的なるのみならず。其の根柢は又た正義なるものならざるべからず。此の點に於ても吾人の信仰に反對する事實は、皆未だ理會せられざるものとして、之れを保留するのみ。害惡に關する問題殊に然り。是れにつき吾人は經驗上に於て、善惡の原因を發見するを以て足れりとせず、萬物の中心に善ありとする假定を助くる説明を固執して止まざるなり。

最後に吾人は宗教的存在者なり。而して吾人が天性の全體は、力を合せて宗教的理想を構造せんとす。智はその理想を生じ、良心はその理想を生じ、情はその理想を生じ、而して此等の理想は吾人の心中に懷き得る凡て他の完全に關する思想と共に結合して、一の完全なる實在、理想の理想、

無上完全なるもの、観念を形成す。吾人の心情、意志、良心、智力等均しく此の完全者の前に來りて『聖國を來らせ給へ聖旨をなさしめ給へ』といふ。此の點に於ても、前の場合に於けるが如く、之れに反對する事實を不問に付するにあらず、これは説明を要すべきものとして暫く之れを保留し、之れをして吾人の信念を害せしむべきにあらずとなすのみ。

此等の理想は均しく主觀的のものなり。此等は實に經驗に刺激せられて起りしものとはいへ決して經驗を其の儘に寫し出したるものにあらず、かの理性の透明なる宇宙は良心の正義なる宇宙、若しくは宗教の無上なる完全と同じく、全く心の産物なり。何れの場合に於ても、心は其の主觀的の理想を持って顯はれ、實有が之れを認識せんことを要求す。而して凡ての場合に於て、均しく實有は唯だ之れを不完全に認識するのみ、或る程度まで宇宙は理解し得べし。或る程度まで、吾人の有せざる外來の力ありて、その力、義を爲しつゝあるなり。或る程度まで神は啓示せられたり。然れども凡て此等の場合に於て徒に既知の事實に關し、純然たる論理的、客觀的の考察を試むるは、吾人をして不確實の惑を抱かしむるに過ぎず。吾人が堅實なる確信は經驗より生ずる論理的の演繹に由らず、心は自由の權利を有し、其の宇宙に在るは、恰も自家に在るが如く自由なりとの樂觀的假定説に由るものなり。心は自己の本性を棄て、心意上道德上の混亂に自らを委ぬることを肯ぜざるなり。これは疑もなく純粹なる信仰の作用なれども、吾人が全心の生命はかゝる信念に依憑するもの

なり。嚴正なる演繹的方法により更に假定の臭味なく、全然思索的に實有を知らんことは、到底不可能の事なり。

此の結論は宗教的と非宗教的なるを問はず、主理論者の直ちに首肯し能はざるところなり。宗教的主理論者は、かゝる考へを以て宗教を理性以下のものゝ上に築かんとするものとなし、そは宗教を墮落せしむるものなりとなす。非宗教的主理論者は、かゝる考へは宗教を理性の正確なる根柢に据えずして、單に感情の非論理的基礎の上に置かんとする術策に過ぎずとなす。彼は或は論文を草して卑近なる信仰の罪過と、論證せられざる事柄を信する不法とを痛く責むることあるべし。この兩者は共に理性なるものゝ性質を明解せざるものといはざるべからず、そは、兩者ともに理性を以て殆んど三段論法的の形式推論に外ならずとなすものゝ如し。

吾人はかゝる類の人の爲に既に述べたる事柄を更に異なる方面より論ずることゝせん。形式的の眞理と誤謬との鑑定は、矛盾法にありとす。心が矛盾なりと考ふる命題は、論理的に解釋し得べき性質のものにあらず、具體的の眞理と誤謬との標準は、實際上の荒唐無稽、支吾扞格にあり。唯我論には論理の上にては何等矛盾の存することなく、容易に之れを考ふることを得るものなり。自然を以て不合理、不可解及び惡なりとするは、決して困難なる概念にあらざるなり。笑止千萬なる背理の生ずるは、思索的といはんよりも、寧ろ實際的の事なり。かゝる概念によりて、人

生は不具となり、思想は対象を失ひ、行爲は目的なきに至らん。吾人の本性と意向との實際的矛盾自らは是れより生ぜん。然かも思想の法則に於ては、形式的矛盾の起ることなかるべし。試験の標準は、審美的、倫理的、實際的、意匠的にして、理論的にあらざるなり。かゝる場合に於ける議論は、其の中に含まれたる、感情、興味等を分解して、之れを列擧し、此の問題の審美的實際的の關係を摘示するを以て足れりとす。此の點を理會することなくして、此の問題を論せんと企つるものは、往々自らの議論を評價すると甚だ高く、之れを呼びて證據或は數學的證明となし、敢てその議論は、其の力を議論其のものよりも更に深玄なる或る物より得來るものなることを覺らざるなり。然るに全く異様なる意向を有てる反對論は、何らの力をも其の議論に見出すことなくそは全く假定の臆説に過ぎずとなすものなり。されば吾人若し活ける心の作用を理會せんと欲せば、此等眞理の二種の標準を判別し置かざるべからず。吾人若し靈魂の一切の意向と直覺とを總括して、之れに附するに「理性」の名を以てせんか。吾人は理性をして確信と識見との全領域を包括せしめんとす。されども單に論議によれる推度法の官能としての理性は、第二位にして、第一位のものにあらず、そは前提を豫想すればなり。

されどもこは吾人が信ずることを望むが故に信ずと云ふと同じく、論理上の不當これに過ぐるものあらざるなきかと。吾人は答へていはん個人の僻見、出來心、及び慾望等は信念の適當なる根柢

なること能はず。されども人類の共通なる興味や傾向は、信念の正當なる根據となり得るものなり何となればこは人心の固有なる構造と必要とを示し、又大なる宇宙の産物に含有せらるゝ一切の意義を有するものなればなり。こは吾人の創作といはんよりも、寧ろ吾人の爲めに造られたるものなり。是れを信ぜざるは、正しく吾人が知識の全組織を害するものなり。知識の進化論的敎説は、凡て人類の大なる意向情緒及び信念の組織中に深玄なる意義を發見するものなり。そは己自身よりも寧ろ己以外の勢力によりて、産出せられたるものなればなり。そを有神的見地より觀察すれば、その意匠的性質の明かなることは勿論の事なり。吾人は此等の感情と信念との反省的、論理的作用の結果と見るべき部分は、極めて僅少なる程度なることを忘るべからず。そは寧ろ生命と歴史との表現にして、又た人と自然と及び人間相互との複雑なる作用の結果として顯はるゝものたるなり。そは論理の演繹といはんよりも、寧ろ生命の成長したるものたり。そは生命の發動するに最も抵抗少き方面なり。かく觀來ればそが事物の天性に屬すること引力の法則の然ると異なることなきなり。そは是れによりて人々が生活する所の原理にして、是れなくば人は最善の生活を送ること能はざるなり。是れに反對し得るものは、感覺を以て示し得るものゝみ獨り實在すと假定する理論是れなり。されども此の見解の誤れる別に多言を要せざるなり。

若し此の見解にして眞ならんか演繹及び論理的證明の望は、一切之れを放棄せざるべからず。科

學若しくは宗教的思想の爲さんことを望み得る點は、經驗を解するにあり。それは經驗によりて與へられたる事柄を説明し、若しくは闡明し、若しくは組織立てんとするにあり。されど此の事柄自身は、承認せざるべからず。それは演繹すべきにあらず、唯だ承認すべきなり。是れなくば心は實に眞空なり。科學は凡て經驗の眞理を假定す。而して又た之れを解釋せんことを勉むるものなり。されば一切の宗教的思想と其の唯一の作用は、抽象的定理を證明せんとするにあらずして反つて人の宗教的經驗を説明せんとするにありとす。それは經驗を生じ得るものにあらず唯だ經驗を理會し其の纏綿たる關係を調和するにあり。

兩者の場合に於て、吾人が其の到達したる結果に、全く信頼し得る所以のものは、人生と實有とが、實に眞實なるものなりといふ心の根本的信念に基くものなり。抽象的原理を證明すると、人の經驗を解釋すると、論理に於ては二者の間に些の優劣なきものなり。

かく觀來れば吾人は吾人の思考作用は、凡て目的論の根柢に立つことを知るなり。心は客觀的事實の牽制によりて動かさるゝものにあらず。寧ろ自己實現と自己保存との主觀的必要によりて動くものなり。吾人若しかの嚴正なる論理の方法といふ空想より免がれ又た科學は一切の主觀的興味を離れたる思索的根柢を有し、全く宗教の根柢に優るものなりとの空想なる自然的思考の純獨斷説より脱離せんと欲せば、宜しく上述の事實に留意せざるべからず。

さりながら吾人若し一考せんか自己實現と自己保存の目的は、吾人が思想の全組織中に内在するものなることを覺るべし。而して思想の歴史も亦た同じ事實を示すものなり。心の根本的興味は常に遅かれ早かれ、自らその眞實なることを證し、又た世の承認を得たるものなり。古より今に至るまで、哲學的懷疑家は、多くの賢げなる、又た更に多くの無益なる事を想像したり。彼らが叫ぶところは、常に『汝が現に行ひつゝあるところのものを、行ひ得る權利あるを證明すること能はず』といふにあり。されども常識は此の漫然たる懷疑を棄て、顧みず。眞面目なる思想家は理論上之れを度外に置けり。彼ら一度はかゝる懷疑は、抽象的には維持すること難きにあらざるを認識せしも、それは永劫に空虚なることを看破したる後、かの祭司とレビの所爲に倣ひて、之れを其の儘に棄ておきて過ぎ行くものなり。

根本的の興味が看過せられ、若しくは不問に付せらるゝ間は、決して平和を保つべからず。時に智力は餘りに性急にして、漫りに單純簡約なる説明に満足し、全く心情と良心とを忘却し、無味荒涼なる無神論と唯物主義とに陥ることあり。されど久しからずして生命と感情との潮水は滿ち來りて、再び前日の問題を考へしめんとす。又た他の一方に於て宗教も亦た屢知識と良心と權威とを全然認めざりし過失に陥りしことあるなり。されば知識と良心とは自らを認識せしめんが爲めに戦を開きたり。良心は獨力を以て神學上の組織を動搖せしめたること幾回なるを知らず。吾人の道徳性

の承認し得る神の概念を発見する必要は神學進歩の一大源泉なりき。神學を道德化するの必要は、神學界に多大の變化を生ぜしめたり。然かも未だ終局に達したるにあらざるなり。凡ての方面に於て内的生命の發現益複雑となり、その内容愈豊富となるに従ひて、その概念の體系も亦た之れに順應せんが爲めに相伴うて進歩したり。此の如く生命と實有とに親しく接觸するによりて、思想は進歩するものなり。そは決して無用なる論理學的の議論、若しくは八釜敷しき證據調べに、字義上の小理窟を喋々するに由るものにあらず。此の如くにして科學、倫理學及び宗教は發達するものなり。而して心は益自信沈着の意氣を強うし、事物の眞に調和せりとの感を増し、いや増に沈着の度を加へて懷疑家の反對にいよ／＼無頓着となり漸次發達し來れる信念を以て科學、良心及び神の聖殿を建築せんことを勉むるに至るものなり。

然らば懷疑説をば如何に處理せんとするか。そは採るに足らざるものなり、特別なる理由に基きたる特別の疑惑は、合理的批評の一例と見做すべきものにして、常に貴ぶべきものなり。されども他種の懷疑説に至りては、之れを放棄して顧みるべきものにあらざるなり。若しそがかの嚴正なる論法に據るものならんか、そは人生の事情を解せざるに基くものなり。若しくはそが理由なくして事物を疑ふことは、抽象的には出來得べきことなりとの理由に立たんか、そは永久に疑を挿むことを得べし。然かも亦た永久に非合理的たらざるべからず。そは生命と道理とに向つて訴ふることを爲さ

ず反つて生命と道理とを離れ他者に向つて訴へんとするものなり。

されども他に何ら此の訴を判決する法廷を有せざるなり、かゝる種類の懷疑説は、心の虛弱なる人々には害を與ふべしと雖ども人類の發達上には、さしたる影響を及ぼすこと能はざるべし。此の種の懷疑説は餘りに之れを喋々して人の注意を惹起せしむべきにあらず、寧ろ之れを其の儘に放任し人をして實際の經驗に照らして自ら之れを顧みざるに至らしむべきなり。最後に全部懷疑説は懷疑説にあらず何となれば同様に心の全禮にわたるものなるが故に何事をも爲すこと能はず、萬事をもと有りし儘にて放棄するのみなればなり。又た萬事に不信なるは實際何物にも不信ならざるに均しとす。この種の懷疑説は議論の上こそ存在すれ實際には意味なきことなり。自然界の一樣なること我が隣人の存在すること等に對しても、議論上にては疑を抱き得るものなり。然かも之れと均しき原理に由れる宗教上の懷疑は、向後吾人を左右せしむべからざるなり。

又た有神論者が認識論及び形而上學上の一切の疑問を解せんと試むることは、方略の誤れるものなり。人生の短日月なると、其の他この事實と同様十分確實なる他の理由とに依りて、有神論者は先づ凡ての研究家に共通なる吾人の官能は信用すべきものとの信仰に頼りて其の論歩を踏み出だすべきものなり。感覺を超越する此の領域若しくは他の領域に於て、吾人の爲し得るところのものは、吾人は實際如何に思考せざるべからざるかを自問するにあることは明かなることなり。而して

この問題は吾人の経験を分解し又た反省することによりてのみ決定せられ得るなり。吾人若し此の道に由りて明白なる道理に達したらんか、吾人は始めて吾人が確信の唯一の証明を得るものなり。既に上述せし如く、理性の能力と智識の眞實とに對する全體の懷疑は口實を以て満足するの人士を除く外、實際何等の勢力を有せざるなり。懷疑の危険なるものは、人の下等性の傾向に重きを置き、その高等性を信ぜざるに基因して起るものなり。されども一般の懷疑は、形式的には維持し得べきも、事實無害なるものなり。

論理學の職務

吾人が既に前に述べたる如く、吾人をして宇宙に順應せしめ、宇宙をして吾人に順應せしめ、相互の間に對合を生ぜしむるは、心の開發上當に期すべき目的なり。かくて心の自然に守る法則は次の如し。即ち吾人の全性が要求するところのものは、何にても其の反對の證據明かならざる以上、之れを實在と假定するも妨げなしとの事是れなり。既に前述せし如く、種々なる實際上の公準は、之れより生ずるものなり。此は哲學上の思索より來らずして、生命より生れ出でしものなり。

されば此等の公準に付きては、論理學の職務如何なるものぞと問はん。その職務は言ふまでもなく之れを證明するにあらずして、此等公準及び其の含意を意識の中に明白にし、之れをして其の路

を失ふことなからしむるにありとす。其の職務は構成的に非ずして整理的なり。元來此等公準は、當初より今の有様にて知られたるにあらず。明白に定義せられたる原理としてよりは、寧ろ陰然含蓄せられたる傾向として存在したるのみ。斯かる有様なるを以て、其の傾向は動もすれば其の正當なる目的を誤ることなしといふべからず。是れ科學上若しくは認識上の意識が比較的近代の開發に係り又たその含意が猶ほ甚だ不完全に理會せられつゝある所以なり。

客觀的に果して確實なる知識成立し得べしと假定すれば翻つて此の假定の中には如何なる意義を含むかは之れを問ふもの稀にして又た之れに答ふるものは更に稀なり。多くの學說も無學の爲めに、世に哲學的思索と呼ぶる好位置を占むるものありと雖ども、一度其の眞意を解する時は、全く知識を破壊するに至るものなり。その滑稽は恰も人あり、己の外に存在する人なしと主張しながら其の隣人に向ひて之れを辯明せんと欲するに異ならず。倫理的の意識も亦た之れと同じく、其の本領を明白にすること甚だ稀なれば、之れを當然に發達せしむれば、結局凡ての倫理學を破壊するに至るが如き多くの倫理學說流行するものなり。人の宗教性も亦た然り。悠久なる精神的勤勞と數世紀に互れる經驗とに由りてのみ、漸く其の眞理を發揮し得たるなり。若し之れを其の自然のまゝに放任せんか全然其の含蓄を領會することを失ひ反つて非宗教的意見の間に自らを埋没する慮あらん。

故に凡そ思想の各方面に於て、吾人の公準を開發するに當りて、能く其の整合を保持し、その相互の關係を修齊することを目的とせる批評の必要存せりと謂はざるべからず。

生命の正當なるを辯ずることは、生命より來らざるべからず。生命を定式に示すことは論理學の業なり。されば吾人若し合理的にして正義なる宇宙の存在を假定せば、吾人は先づこは如何なる意義のものなるかを領會せざるべからず。而して又た之れと矛盾せる他の假定を設くべからず。殊に理會其れ自らの狂妄侮慢を抑制せんが爲めには、此の如き批評最も切要なるべし。此の官能若し批評に制止せられざれば容易に性急不耐、又た暴慢に陥る傾向あるを免れず。そは問題を未決の様に置くを好まず、屢餘りに速斷する弊あるを免れざればなり。若しそが説明といふ運動を試むることあるも、時に少しも進歩の跡なき事實を看過するものなり。若し心の正直を保つ徳強く發達することなくんば一學説を立てん爲めに事實を無視し、若しくは附會する弊あるものなり。主理説が哲學的思想中、最も淺薄なりとの評を得たるは、専ら此の事情あるに起因せり。論理學の重用なる職務此處に存す。且つ之れに對し論理學は奪ふべからざる權利を有するものなり。此の内部の開發、整合、修正の作用につき、論理學は認識、倫理及び宗教に均しく臣屬するものなり、而して此の數者は悉く皆其の根柢は、吾人が一切の經驗に由りて喚起せられたる吾人の主觀的必要及び傾向の表出し成長したるものにあらざるはなし。凡て盡く人類は自分を實現し、又た發現しつゝあるものなり。

なり。

吾人を以て論理學及び形而上學に反對して爭論するものなりと考ふることは、全然吾人の目的を誤解するものなり。論理學と形而上學とは、實際的生活の原則を與ふること能はざるや明かなりと雖ども、吾人が之れを實際的の性質に於て認識し敢て數理的に證明せられたるが如く之れを宣言せざる以上實際上の公準を立つるを禁ぜざるなり。然れども何ものも吾人が論理學及び形而上學に矛盾するを許さざるなり。此の如き矛盾は終に滅亡を免がるゝこと能はざるべし。證據の缺乏は實際上の必要によりて之れを償ひ得べしと雖ども、感情によりて妄りに反證を無視し、之れを不問に附るが如きことあるべからず。此の如き困難は論理學的理解の領域に起るものにして、之れに處するは唯だ論理學的理解を以てするにあり。證據の缺乏と反證とを區別するの明なきが爲め、宗教の教師にして多くの愚説を吐くものあるに至れり。彼らは論理學にも形而上學にも依頼することなく、其の結論には全然無頓着なりと宣言せり。時としては己が信仰の勢力を示さんとや哲學的思索と宗教との間に矛盾ありと宣言する程なり、かゝる見解は吾人をして全く思索的の懷疑に陥らしむるにあらずんば、心靈の諸官能に内亂を生ずるに至らしむるものなり。何れにしても其の結果は宗教上望まじきことにあらざるべし。

斯の種の誤解を防がんが爲めに次の區別を爲すを要す。即ち吾人の心的財産目錄中には、種々な

る命題の存することを示すものなり。即ち吾人の信ぜざるべからざるもの、吾人の信ずべからざるもの、吾人の信じ若しくは假定し得るもの是れなり、第一第二は知識の構造上に立つものなり。之れと衝突するものは早晚放棄せらるべし。第三は實行と蓋然性の領域に屬し、生活及び行爲に於て價值あるもの最も多く此の中に存す。吾人の興味及び欲望が其の是非を決するに與りて力あるもの、若しくは「信ぜんとする意志」がその正當なる職務を有するものは此の第三種類に於てのみ之れを見るなり。最も實際的なる事柄に對し、純然たる論理的の思考を試むることは、吾人をして不確實の中に迷はしむるものなり。されば信ぜんとする意志は、何事か爲さざるべからざる必要に驅られ來りて、その平衡を破り結論を促すものなり。されどもかゝる種類の信仰は證明せられたるものといふべからず。そは寧ろ選擇といふべき性質のものなり、そは人の假定若しくは公準若しくは實際上の主義若しくは彼が主張する事物を表示するものなり。かくして信仰は個人的道徳的となるなり。かゝる信仰が數理的に證明せられたるものなりと稱せられずして、單に個人的決定、道義的行動として實際的のものなりとせらるゝ時は論理學は決して之れに反對せざるものなり。

更に又た吾人をして難題を不問に附し且つかくまで多くの事を假定する必要は決して最後の認識上の理想にあらざることを認識否寧ろ斷言せしめよ。認識上の理想は疑もなく思索的に凡ての問題を解釋し、思想的體系の全部をして知識の前に悉く透明ならしむることを含むものなり。然れども

吾人の力に制限あるが故に、今直ちに此の理想に到達すること能はざるなり。如何なる部門に於ても吾人の知識は漏縫的のものにして假定に依るものなり。されば明白に此の事實を自認し、敢て論理學的の嚴正を裝ひて自らを欺くことをせず、又た實際的生命の要求に對しても不正なる處置なかるべきなり。

吾人は稍本論を離れて殊更方法の問題を細論したりき。こは困難は多く方法の誤れるに因りて生ずるものなればなり。論理學は具體的の事柄に對しては、その前提を経験の上に据うるもの、經驗は經驗の故を以て自ら權力を有するもの、而して前提とは多く心の樞要なる本能を、命題的形式に作りたるに過ぎざるべしとは、批評に習れざる人々の些の疑を容れずして信ずるところなり。されば斯の種の人々は形式的の推論と、又た概してかの嚴正なる論法に甚深なる信仰を有するものなり。此の方法が宗教上の事柄に適用せられんか、宗教は數理的證明を有せざることを覺るに至るべし。かくして宗教は信仰に價すべきものに非ずと想像せらるゝに至るなり。されば具體的の事柄に此の方法の應用し難さを指摘するは、單に無益なる業にあらざるのみならず殆んど教育的に必要なことなり。かゝる數理的證明の方法は、單に宗教を亡ぼすのみならず、又た科學をも破壊するものなり。吾人の取るべき方法は適用し得らるべきものならざるべからず。具體的の領分に於ては、吾人は何物をも演繹すること能はず。吾人は唯だ演繹すべからざる然かも否定すべからざる吾人の

経験を材料に採り之れに説明を加へ以て吾人が合理的の平和と満足とを求め得るのみ。此の見地よりすれば宗教の問題は新様態を帯び來るものなり。吾人は最早や不可能の數理的證明を求むるの要なきものなり。吾人の要するところのものは唯だ合理的説明にあるのみ。

心の開發及び其の順序を理會せんと欲せば、信仰の來歴に於ける如上の事實を記憶せざるべからず。吾人は證明し得たるが故に之れを把持するにあらず、反つて之れを把持するが故に之れを證明せんと試むるもの。又た吾人が之れを證明し得ると否とに係はらず、固く之れを把持せんとするところの信仰を有する所以のものは、如上の説明に依りて自ら明かならん。かゝる事實はかの嚴正なる論理の徒に取りては、非常に不面目なることなり。然かもそは人類發達の形式と信仰成長の方法とに對する自明の結果なりとす。又た同事實は純然たる論理的批評を事とするの無益なる理由を明にするものなり。生命に根柢を据うるの信仰は、論理學の與へ得るものにあらず、又た論理の取り去り得るものにもあらざるなり。加ふるに凡て人々の信仰は多種多様なるを免れざる理由も此處に存すといはざるべからず。蓋し信仰の根本は屢情緒、情操、向上心等の如き論理に比して、一段下層なる境域に横はるものなるが故に、吾人の確信は生命及び感情の潮の進退に従つて變化するものなり。信仰は生命を表現するものなればそは生命の變化と相伴うものなり。

此等の事實は或る信仰に、特種なる道義的性質の附隨する所以を説明し得るなり。信仰若し冷酷

なる三段論法の結論に過ぎずとせば、人をして信仰に對し責任を負はしむることは、背理の甚だしきものたるなり。されば或る信仰は、信者其の人の表現なりと謂つべし。そはかれの愛するもの、かれの主張するもの、かれの希望するものを顯はせるなり。かゝる種の信仰は個人的道義的の性質を帯ぶるものなり。

又た吾人は強ひて嚴正なる數理的證明を望むべからざるや明かなり。蓋し數理的證明は觀念の主觀的、論理的なる關係にのみ限らるゝものにして、實有に對しては、幾分假定の要素なくんば、其の關係を有すること能はざるものなり。こは宗教に於てのみならず、科學に於ても亦た然り。何れの場合に於ても客觀的にして、全く自らにて足れる證明の如きもの有るべき筈なし。眞理は證明に倚りて立つものにあらず。眞理たるの權利によりて永劫に存在するものなり。證明は無智なるものをして、知識を得しむる爲めに用ふべき一時の方便に過ぎざるなり。そは眞理の研究者をして、終に其の眞理に到達せしむべき方法に於て思考せしむる心の刺激たるなり。然れども此の如き證明は刺激の性質に由りて左右せらるゝのみならず、又た特に之れに達する心の開發によりて影響せらるゝところ少からずとす。故に爰に人性の全體に訴ふる辯論ありとせんか、其の効力は天性の發達せる程度に従ひて、強弱の差あるを免かれざるべし。例へば有神論に對する道德的推論の如きも、良心の力なきものに對しては強力なるものとも思はれざるなり。認識を求むる點よりする議論も、知

識に對する興味を有するものにあらざれば、徒に空論を爲すと思はるゝのみ、經驗の説明なりとするも經驗を有せるものには根據なき議論、若しくは空論を爲すが如くに思はるゝならん、幼稚なる心魂には説明を要すること。若しくは驚愕を喚起すること少かるべし。彼らは生命及び存在に關し狭少なる意義を以て満足す。此の如き場合に於て、吾人は到底萬人の一致を望むこと能はず。唯だ實有は全く吾が言に反するものにあらざること、我が信ずるところ、或は他の心胸に感應するものあらんことを望みて、我が内に存する信仰と其の理由とを宣言することを得るのみ。信も不信も之れ以上を爲し得ること能はず。適者生存の理之れを判斷せざるべからず。

かくの如く數理的の説明を棄つことは、多くの人の厭ふところなり、されどもこれ理由の存するにあらず。兎に角止むを得ざることなり、吾人は妄りにかゝる名稱を附したりとて議論を變じて數理的證明と爲すこと能はざるなり。是れに加ふるに議論の力は、其の名稱に依らずして論理に依るものなり。然れども此の感を起さしむる主要なる理由は、心理學上の事實を看過するにあるものゝ如し。蓋し思へらく命題にして證明せられざるときは、その最善なるものも亦た單に蓋然たるに過ぎざるべし。蓋然たらんか、不確實ならざるべからず。故に事の證明を放棄するは、之れを不確實なりとするに同じ。

誰か不確實なることによりて生存するを得んや。されば神は或は存在することもやあらんと言ふ

に至らば、自然神學の缺點明白なるべしと。こは例の嚴正なる論理の方法ならん。然れども此の如き言論は暗に信仰は、必ず論理の結果なりとの假定を含有するものなり。然るに人生は極めて確乎たる理由あるに非ざるも、なほ日常生活の基礎たる實際上の確實を以て充滿せり。吾人が實際上に於て自然界の一樣不變なるを信じ、人を信じ朋友の情を信じ、覺官を信ずるが如き、皆其の例證なり。無數の論理學的反對を發して、凡て此等を僅に蓋然的事柄なる位置に下らしむること難きにあらず。然らども此等の事一として吾人の心を動かすこと能はざるなり。蓋し吾人が最も深き確信を以て把持するもの、否寧ろ吾人を把持するところの事物は、論理學上の確信にあらずして生活上の確信なりとす。

有神論的議論は主として神の容知に關する問題に限られたり。此の如き見解の狹隘なること及び之れに依りて適當なる宗教上の概念に到達するを得ざるは、既に明なることなり。有神論の推論をかく制限するは、抑も數個の理由あることなり。

第一睿智の關係は根本問題にして他は凡て之と成立、不成立を共にす、故に有神論及び無神論間の争點は、睿智、非睿智の何れを、宇宙の原理と思惟すべきかにありと、普通に見做さるゝことはなれり。

第二此の問題は主として客觀的事實に基きて議論することを得べし。故に良心及び感情に訴ふ

るが如き主觀的の要素を含蓄すること少し。是れが爲めに他の議論に比し雙方の論者の爲めに共通の立場を與ふること多し。

第三有神論者は概して其の心中に、神に關する基督教的の概念を有し居るが故に、此の睿智の議論を以て宗教上適當なるものと見做せり。斯くて吾人の身邊なる世界に於て、意匠及び精巧の證跡を見るに當り、此の概念は靈魂の理想的傾向と相合して、此の微弱なる結果を擴張し、以て理想的宗教の體裁を具へしむるに至る。されば熱心なる有神的著者が蠅の眼能く神の存在を證し得べしと宣言するを見るは稀有の事に非ざるなり。勿論此の論法が兎に角證し得んとするものは、蠅の創造者の存在なり。されども此の觀念は、必ずしも神の觀念と、論理的に同一なりとなし得べきにあらず。斯の種の著者は、彼らが現に有する信仰の解明と、その適當なる證明とを混合するものなり。

然れども如上の批評あるにも拘らず、吾人は睿智對非睿智の問題を論ずるが爲めに多くの時間を費さんと欲す。そも神の觀念は、形而上學と宗教との二立脚地より、之れを論ずるを得べし。前者に於ては神は知ること及び説明の原理として顯はれ、後者に於ては宗教的意識の含意、即ち神なくんば宗教的意識自ら紛糾に陥らざるを得ざるべしといふことは是れなり。前者の見解は、特に宗教的概念に到達することなしと雖ども、凡て宗教的概念に缺ぐべからざる要素を供給するものなり。此の故に形而上學は、有神論の研究に於て十分なりと云ひ難きも、是れ決して無用の長物にあらざる

なり。右有神論に關し、互に矛盾するところの誤謬は、古來世に傳はれり。即ち一方に於ては唯だ推論を事とし、之れを以て十分なりとなすものにして、其の弊や遂に何等効果なき乾燥無味なる主理論に陥るなり。他方には感情を至高なるものとなし、智力の正當なる要求を顧みず之れを不問に附することは是れなり。甚だしきは思索的懷疑を以て、宗教の根本なりとなすに至れり。然れども獅子と羔とは暫時の間共に臥せしむることを得べしと雖ども、終には獅子羔を捕へ去らざるを得ず。かゝる問題に對しては、吾人幾多の同盟を得るも決して多きに過ぐる憂なかるべし。純粹の智力が神の存在を要求し、且つ之れを含蓄すと説くとも、此の説明は決して感情及び向上心より立論する議論の力を、薄弱ならしむる恐あるものにあらず。吾人の結論は、重に此の問題の知識に關する側面を論ずるにあり。勿論場合に應じ情感に訴ふる權利は吾人之れを保持するものなり。

純粹智力の側面より論ずれば、有神論は又た二個の形狀を取り得るものなり。即ち吾人は世界の秩序は其の原因として睿智の存在を信するにあらずんば理解すべからざるものなるを示し、又た神なくば理性自ら紛糾絶望の狀に陥らざるを得ざるべきことを辯明することを得べし。前者の場合に於て、神は事實を理會するに必要な假定として顯はれ後者の場合於ては、合理的生活の必要なる含意として現はる。固より此の如き目的を達せんには、先づ思想の法則は客觀的に確實なるものにして且つ思想の主觀的必要に對し之れに該當する實在の客觀的必要ありと見做さざるべからず。さ

れどもかゝる假定は、特に有神論にのみ限るべからず。客観的知識の全體系に通じて然りとなす。心の性質此の如く経験も亦た此の如くなれば、神を信ずることは、心及び経験の必然的含意なることを明にするは唯一の合理的目的なり。

此の目的達せらるゝ時は、其の含意と表示とを併せて人の天性を認容すべきか、若しくは勝手氣儘に之れを抛棄すべきか各人自から此の二者の何れかを選ばざるべからず。萬一その擇びしところ非合理的の方なりとせんか彼は固より沈黙の義務を守るべきなり。これ吾人が均しく有する知識の慣例を抛棄するものは決して人と談論する権利を有するものにあらざればなり。

終りに教育學的性質について一言加へしめよ。常識の本能的偏見によりて有神論は屢不公平なる待遇を受くるものなり。就中世人屢誤り假定して思へらく、無神論は物質及び勢力と共に其領域を占められたれば、議論によりて追放せらるゝ迄はそが占領を許さざるべからずと、かくて有神論は一の假定と見做され、消極的即ち無神論の證據を要求せらる。然るに無神論は經驗上の事實を表示するものにして、別に證據を要せざるものゝ如く思はるゝなり。されば有神論若し其の位置を證明すること能はざる時は、奇怪にも無神論已に確定せられたるものゝ如く想像せられたり。無神論の著述を熟知する人々は、彼らの勢力は、重に有神論の缺點を指摘するにあるを認むるならん。無神論が事實に對し、合理的證明を與ふるに十分なるを示せる議論は、比較的甚だ僅少なりといはざるを得ず。

ず。

かゝる議論の立脚地は、極めて子供らしきものなりと、そは實に思索の古生物時代に屬するものといはざるべからず。實有の性質は思想の問題なり、而して實有に對する吾人の思想は、此の問題の解決なり。實有をば一或は多、物質若しくは非物質と見做すに拘らず、學説は均しく思索的たるを免れず。その價はそが事實に該當するや否やによりて決せられざるべからず。有神論にして假定説とせんか、無神論も亦た然り。公平なる心は二者の優劣を判決せんことを求めずんばあるべからず。此の判決は事實に對照し、且つ兩者を比較して、其の上簡單なるもの、合理的なるものを採るにあり。その反對の説を罵詈譏する能力あるや否やによりて、學説の是非を判斷すべからず。果して事實に相當するや否やを究明することを要す。有神論及び之れに伴ふあらゆる困難は、無神論及び之れに伴ふあらゆる困難と、相對照せらるゝを要す。かく爲すを得ば、有神論者は、其の輕信の爲めに赤面する理由極めて少く其の信仰に對し何ら耻づべき點を見出すこと能はざるべし。

こゝに又た他の普通なる誤謬を論ぜざるべからず。さて思想の最も深玄なる問題に逢着するとき、必ずや貫徹すべからざる秘密の域に接せざるを得ざるなり。此に於て吾人は解明し難き事實を肯定せざるべからざるに至る。吾人は更に進んで演繹し理會すること能はざる承認を與へざるを得ず。無教育、不明晰なる人の心には、此の事往々に躑石となることあり。而して有神論は殊に困難

なる教説なりとの臆測廣く流行するに至れり。然れども事實は凡て科學及び思想は限定總念と稱せらるゝものにて充つるなり。限定總念とは、事實が強ひて吾人の心に提起せしめ且つ事實の此側面よりは極めて明白なりと雖ども遙か彼方なる側面より之れを望めば、困難と秘密との中に包まれたる總念をいふものなり。此等は思想の或る線に沿うて終極の肯定を言ひ顯はしたるものにして、遙か彼方の側面よりは決して之れを理解すること能はざるべし。他の事物に對する其の關係を顧みず、其の成立の法則を忘れて之れを理解せんとは試むるときは、之れをして自家撞着若しくは背理の狀に陥らしむること、極めて容易の事なりとす。然れども有神論は、凡て形而上學の難題を説くを以て、己の責任となすべきものにあらず。吾人の特に注意すべきは、一の難問を免れんと欲して、更に大なる難問に陥ることなからん事なり。永遠なる人格者無始なる意識等の總念は、永遠の物質、無の運動等の總念に比して、更に困難なりといふを得ざるべし。

或る説の困難に不満を懷きて、更に多くの非難を受くべき他の説を探ることは、智者の業と爲すべからず。凡て此等の事は、決して思想に對して無抵抗の線路を見出さんとするにあらずして、寧ろ最も抵抗少き線路を發見せんとするものなり。抵抗なき線路を發見せんことを夢みるものは、極めて無學なるものに非ざれば甚だしく淺薄なる人ならざるべからず。

かゝる長き緒論も、此の有神の問題と、其の論證の方法とを明白ならしめおくためには、必要なりと思惟せり。有神論が過去に於て甚だしく困難を感じたる所以は、自ら己が問題を理解すること能はず、又た哲學的方法の公正なる概念を有する能はざりしに基因するものなり。かくして有神論は一部は健全にして、一部は曲辯的なる世の批評に遭遇し、之れに應ぜんとして、到底出來得べからざる事を爲さんと試みたりき。されども此の問題が單に三段論法的理論の問題に非ずして、又た更に深く生命と人類とその歴史との問題なることを覺るに至りしは、一進歩といはざるべからず。されば吾人は神の存在を證明せんことを目的とすにあらず、寧ろ世界と人生とが吾人に強ふる問題の解釋を試みんと欲するのみ。言を換ふれば吾人が心魂の安息し得る底の經驗の解釋を與へんとするにあるのみ。吾人は凡て哲學上の難題を明かにせんことを期するものにあらず唯だ有神論の信仰を有するにあらずんば、吾人は思想及び生命に關して、一層深玄なる問題に向ひては、宛然バビユア人若しくはバタゴニヤ人の日蝕に對するが如く、茫然として自失する外なきに至らんとしむ。

第一章 世界の原由は一なり

神の觀念を作製し若しくは演繹するは哲學の業に非ず。神の觀念は人種の生命開發に従ひて徐々に發展したるものなり。加ふるに人は哲學者たる前に既に宗教家たりしなり。哲學の研究始まりし時は、既に宗教の盛なりし時なりき。されども哲學はかく宗教の領域に自發したる觀念を闡明し又た之れを修正し、併せて其の合理的の根據を示す用を爲すものなり。かゝる始末によりて神の存在に關する種々なる議論起りたりき。此等の議論が有神的信仰の起原となることは稀にして、寧ろそは成立せる信仰の保證となるものなり。

カントは主要なる有神論を三種に分てり。即ち本體論的宇宙論的及び物理神學的の三點にして、彼は一々之れを批評せり。其の論ずるところ痛切にして又た餘蘊なしと雖ども、亦た臆測に耽り字義に拘るものあり。其の推論は概して陳腐に屬し、悉くカント學派の原理に基けるものなり。彼は曰く意匠に基く推論は神に關する十分なる觀念に達すること能はず。必然にして完全なる實在の總念は、他の推論の依りて以て立つところなれども、之れを要するに理性の主觀的理想に外ならずと。

彼の批評は二個の柱石によりて支持せらる。第一は數理的の證明は信仰に缺くべからざるものな

りとの主知説傳來の僻見之れなり。カントの意義によれば、科學の領域は數學の如く、證明を有せざるべからず、然らすんば何等の用なきものなり。而して有神論は何等確實なる數理的證明を有せざれば、そは正適なる科學の地位を占むること能はず。そは理性の含意、實際的生命の要求なり。此の故に有神論は思索的真理といはんよりも、寧ろ實際的の真理なりといはざるべからず。是れに反して無神論は思索的地位を有せず、又た實際的地位をも有せざるものなりと。カントの批評の第二柱は理性の形式及び理想は、客觀の意義を有するものに非ずとするカント派一般の原則是れなり。そは獨り經驗界には確實なるも、實有には適用し難きものなりと。

此等の見解は兩者とも陳腐の説なるを免がれず。今や有神的信仰の事柄に對し、嚴密なる數理的證明を期待する有神論者は極めて少し。學術上の蓋然は、實際的の最確實と兩立し得べきものなれば、有神論者は有神的信仰が科學の信仰の如く、證明し得べき議論といふよりも、寧ろ蓋然的推論に屬することを發見するも、敢て意とするものにあらざるなり。

カントの主觀論に關してはカント自らも此の問題を考へ盡したるものにあらざることは、人々の夙に熟知するところなり。或る意味に於ては、一切の知識は、必然的に主觀的個人的ものたるなり。心は如何にしても自己の外に逸脱して、而して心たること能はず。又た其の本性に従ひて形成せられたる概念に依らずして、事物を理解すること能はざるなり。されば心理學的起原より觀れば

知識は主観的にして又た個人的のものなり。されども此の事實は決して個人の特別なる経験として發生したる知識が彼以外の他の人々及び物の體系に向つて確實なるものなるや否やを決すること能はず。此の問題は純然たる事實の問題にして、經驗に訴ふるに非ずんば答ふること能はざるなり。純然たる主観説は吾人をして唯我的個人説中に閉塞せしめ、人格物體何れの世界をも否定し、唯だ之れを個人の夢現空想に過ぎずとなせり。誰かかゝる極端なる説を取るものあらん。兎にも角にも吾人は吾人の思想の或るものに對しては、その客觀的確實性若しくは普遍性を認めざるべからず。又た批評の効果を收めんと欲せば、吾人の思想の何れが確實なるかの問題に吾人の批評を限らざるべからず。思想若し批評的、反省的となる時は、吾人は實有に就ては如何に考へざるべからざるか。こは思想の發し得る唯一の利益ある問題なり。而して此の問題は又た思想そのものによりてのみ答へらるゝものなり。吾人若し思想の重要な發表に接せんか之れを承くると否とは各人自ら之れを決せざるべからず。カントは心以外の物其れ自身の體系は、吾人の官能と關係なくして存在するものにして、吾人は其の物の眞性質を領會すること能はずとの空想を保持したり。されども此の空想は思想の肯定するもの以外に事物存在せず、又た思想その物即ち經驗に對して確實なるものゝ外、何ら物に於ける他の客觀性存在することなしとする發見によりて取り除かれたり。

吾人は物につきて如何に考へざるべからざるか。思想明白にして自ら意識するときは吾人は有神

的に思考せざるべからず。されども吾人は單に論理的學說に注意するのみならず、又た心理的狀態にも留意せざるべからず。之れ吾人が現下の答なり。論理學的には正當なる多くの辯論も、教育學的の事情には適應せざるものなり。吾人の目的は確信を生ぜしめんと欲するものなるが故に、第一明確にして既に承認せられたる事實若しくは原則を見出して、議論の起點となし、第二直ちに多くの結果を期するなきを要す。而して此の如き起點は本體論若しくは意匠論の供給するところにあらざるなり。

普通に所謂本體論的の議論は、完全なる實在といふ總念に基けり。完全なる觀念は必然に其の存在の觀念をも含有す。是れなければ自家撞着の語たり。されば完全者は存在すと結論を下さるべからずと。されど此の議論は聊も効力を有せざるものなり。そはたゞ完全者の觀念は必ず存在の觀念を含有せざるべからずとの點を指摘するのみ。然れども自己一貫の觀念は必ずしも之れに對する客觀的の實在を表示するものなりとの證據を有せざるなり。故にデカルトは唯だ完全者のみかゝる存在の觀念の本源たるべしと論じて、之れを補はんと試みたり。然かも効少し。其の實此議論は宇宙に於て獨り價值を有する眞善美は、固より宇宙に屬すべき筈なりと主張する審美的、倫理的の確信を表示するに過ぎざるなり。人の心は其の理想を棄つることを好まざるべし。本體論的の有神論が勢力を有する所以は、此の如く速に其の理想を信ずることあるに因れり。其の神學上の用語は、

此の信仰に證明的論理の體裁を與へんと欲するに起因するものなれども其の結果は之れを強むるよりも寧ろ弱むるものなり。

此の信仰は之れを抽象的に述説し、論理的に之れを試験するときは、嘗に根據なきものたるのみならず、又たそは存在するものにあらざるが如し。吾人は疑を懷きて之れに接す、而してそは影の如くに消ゆるなり。そは意識の上に顯はるゝといふよりも、寧ろ動作の中に示さるゝものなり。宇宙論的の議論若し吾人に第一原因の肯定せられざるべからざる事を信ぜしめんか、此の非宗教的思索的抽象を變じて、神の觀念となさしむるものは、實に此の完全なる理想に對する信仰なりとす。

意匠論若し吾人が經驗に顯はれたる事實の順應に對し、其の經營者の存在を肯定せんか、そは此の同一の信仰、即ち完全なる理想に對する信仰こそ、特に極めて大なりとも稱すべからざる結果を轉じて、無限完全なる神の觀念となすものなれ。而して吾人は既に緒論に於て論じたるが如く、此の神の信仰は、靈魂の生命に含蓄せられたる大前提なり。そは何物によりても證明せられず、又た證明し得べきものにあらずと雖ども然かも亦た何物にも含蓄せらるゝものなり。

目的論即ち意匠論は、恰も目的の如く見ゆる順應殊に有機界に存する順應に基きて推論を爲すものなり。此の推論はアングロサクソン人種には大いに愛好せらるゝ所のものにして、カントも之れ

を敬重したりき。其の論理上、思索上の缺點はともあれ、更に高尚なる思索的の議論に比ぶれば、常識を満足せしむるに適するものゝ如し。されども嚴正の批評を下さんか、非難を免がれざる點少しとせず。所謂自然界の意匠目的も今なほ爭論中の點少しとせず。特に進化論の行はるゝ今日に於て然り。されば現今の思想の状態によれば之れを議論の起點となすこと決して策の得たるものにあらざるべし。自然的産物の大多數は、目的といはんよりも寧ろ結果と稱すべきものなり。水陸山野等の如き自然的作因の複雑なる配置を見るに、或は目的を有するものあらん、然れども吾人の觀察には、此等の物は唯だ單純なる事實にして、幾多の結果之れより生ずるに過ぎずと思はるゝなり。又た有機體と無機體との相互の關係に、目的といふもの或は存せん。されども吾人の觀察する所の事實によれば、後者は前者の用を爲すといふに過ぎずして、必ずしも後者の前者の爲めに作られたりといふべからず。若し世界の原由睿智ありとの事實、他の場所他の方法によりて證明せらるゝならば有機體及び無機體の關係を以ても、亦た之れを例證すべき點少なからざるべけれども、然かも初めより之れを以て有神論の證據となすこと能はざるべし。有機界に至りては、順應の證跡最も明白なりと雖ども、不幸にして之れによりて成就せられたる目的は、大抵成就の價值あるものにあらざるなり。其の目的は明白なる價值若しくは理由を有せず、恰も非理の勢力行はれつゝあるならば、左もこそと思はるゝが如き無意義なる物に似たり。されば神に關する吾人の觀念、他の方法に由り

て決せらるゝに非らずんば、此等の事實あるは有神論の爲めに、反つて妨害となることありとも利益するところあらざるべし。よし自然界に意匠存すとすも、之れに由りて世界の原由唯一なりと斷言することを得ざるべし。多神説必ずしも不可ならざるべし。自然界に善と惡と相反し、智と愚と相混ざるを見れば、多神説反つて最も善く吾人が經驗に適合するものゝ如し。基督教は吾人をして唯一神論に慣れしめたり。されども嚴正なる論理學を以て之れに臨まば經驗に基き意匠論に依りて此の點を證明すること難かるべし。意匠論が有神論を證明する十分なるものゝ如く思はるゝ所以のものは、普通之れを用ふるに、之れを以て有神的觀念を演繹せんと欲するにあらず、寧ろ吾人が既に保有する所の有神的信仰の例證たるに過ぎざればなり。

以上の推論は何れも起點として満足なるものにあらず。在來の宇宙論も亦た然りとす。そは今日の言語に翻譯せらるゝにあらずんば、吾人の確信を生ぜしむるに適せざる奇怪の言語なりといはざるべからず。此の推論の目的は、他に依頼して存在せる被制約的宇宙より推論して、必然獨立即ち無制約的存在を認定せんと欲するにあり。而して其の推論の形式も亦た各異なり。或は運動より推論して、動かざる最初の發動者ありと認定するものあり。或は偶然なる存在より必然なる存在に推論するものあり。或は依存的存在より、獨立的存在に論及するものあり。傳來のまゝなる形式にては此の推論は多くの非難を免れず。

されば從來の推論の分類は、無益なるものとして之れを棄つるを得策なりとせん。何となれば推論の價値は其の事柄にありて、其の名目によらざればなり。具體的問題も、之れを抽象的に説述すれば、時に人その論旨の那邊に存するかを明察すること能はざる場合あるものなり。故に吾人は現代の思想を以て、此の問題を論究せんとするものなり。而して神に關する宗教的概念を、即時に確定することを爲さず、稍謙遜なる目的を以て、凡て實有の根據即ち世界の原由は、一にして多にあらざるを示すを以て満足すべし。

此の説に就きては吾人の論ずるところ、古今の思想家と一致せり。其の根本的一元論に賛して、根本的多元論を排するに至りては、有神的思想家も非有神的思想家も、共に相異なるところなし。今日最も斷乎たる非有神的と無神的との見解は、真正なる一元論の意義と要求とを明白に理解するとは思はれざれども、然かも自ら一元論なりと稱するものなり。知識に客觀的確實の存在を認めざるカントすら一元論は理性の最も深き要求なりとなせり。臆病なる人の獎勵の爲めと、又た一元論は屢不良なる思想を加味したりとの爲めに吾人は此の論辯に於て、一元論とは汎神若しくは唯物説を意味するものにあらず、世界原由の單一なることを説くものなることを指摘せんとす。

然れども此の事實に對しては、かく一致すと雖ども、之れに到達する方法に於ては、甚だ異なるを見る。既に然り、されば吾人は議論の出發點として、普く承認せらるべき最良點を發見せんこ

とを要す。こは客觀的認識の公準是れなり。

諸種の事物は體系を作る。而して此の體系は一個なりとは、反省的睿智の最も深き確信にして、又た知識の組織に要する至上の豫想なり。此の體系の内に萬物は相互の關係を限定せられ、各事物は全體との關係に依りて、現下の場所、現下の状態に在るものなり。此の體系は經驗に現はれずと雖ども、然かも認識に含意せらるゝなり。そは理性の單一性の反射なりと雖ども、之れを分解すればそは客觀的知識の示さるゝところ。一として此中に含まれざるなきを見る。世界、宇宙、萬有、事物の體系といふ文字の中には、明かに體系の存在を假定するものなり。

かく理性は單一にして、組織的のものなれども、感覺の經驗は多種多様なものなり。是故に統一に對する合理的要求と、實際經驗によれる複雑なる事實との間に、調和の必要を見るものなり。科學と常識とに對し、普通之れが解釋として與へられたるところのものは、複雑のものが一の體系に統一せられ、その論理的關係は、事實存在すとせらるゝ動的交互作用を假定するもの是れなり。

今は交互作用の事實なるや否やを論ぜずして、吾人は直ちに交互作用の體系は、同格作用の體系なくしては、不可能の事なるを示さんと欲す。認識の目的に有用なる交互作用の中には、如何なるもの含まれ居るか、これ吾人が第一の疑問なり。

第一の含意は事物は互に相感じ相限定すとの意なり。此の假定なくば、凡て出來事は、絶對的無關係の起源なりといふ外なからん。宇宙は連絡原因を有せざる單位に分れ個人的意識は唯だ自己の内に幽閉せらるゝに至らん。加之此の假定は萬物悉く交互作用を爲すとの意を含む。何となれば若し一物にても全然因果の關係を離れしものあらんか、此の假定は虚構の想像説と見做さるべければなり。

さればかゝる亂雜なる交互作用は、認識の要求に應ぜざるべし。吾人は之れに加ふるに、法則統一の觀念即ち同一の事情の下には、同一の出來事必ず起るべしとの觀念を以てせざるべからず。然れども之れ又た萬物交互順應して、其の結果は此に一つの狀態あれば、他の狀態も必ず其の種類と程度とに於て、一定する所あるべきを期することを含意するものなり。若し此の假定なかりせば同一ならざる原因にして、同一なる結果を生じ、同一なる原因にして、同一ならざる結果を生ずることあらん。かくては到底論理上の認識を得ること能はざるべし。されば萬物の間には交互作用と法則と存せざるべからず。而して此等の物は己の好むところのものたること能はず、又た己の好むところのものを爲すこと能はず、皆共通の方案に拘束せられざるべからず。換言せば一の體系を形成せざるべからず。體系のあらん限りは、各の事物は正確にして一般なる順應の中に交互に關係せざるべからざるなり。

複雑中に於ける交互作用は、實に唯一者の内在的行為なりと解する権利を、しばらく保有しおき吾人はこゝに如上の公準は、凡て客觀的認識の基本として、何人も賛同すべきものなることは言ひ得るなり。意匠の假定の如く之れを疑ふものなかるべし。こは元來知識の構成中に含意せられたるものなり。固より法則や體系の特種たる性質は、解明を要する問題たること無論の事なりと雖ども然かも合理的法則及び體系の存在は暗に假定せられたるものなり。

故に吾人が議論の出發點は、法則によりて交互作用をなし、以て理會し得る體系を形成したる萬物の概念是れなり。然れども之れを出發點とするの利益は、其の思索的に證明せられたるが爲めにあらず、唯だ其の一般に承認せらるゝ故のみ。批評的に考察せんか、神が宗教性の理想たるが如く體系としての宇宙即ち自然界は、認識の理想たりと雖も、兩者何れも之れを適當に證明すること能はざるなり。されども何れかの理由によりて、認識上の理想は、宗教上の理想よりも、容易に認容せらるゝものなれば、吾人は前者より出發して、其の含意するところを開發せんと欲するものなり。

吾人が先づ發すべき疑問は交互作用の含意に關するものにして、次なるはその交互作用を爲すところの局部が統一的體系を如何にして組織し得るか。こは重要な問題なり。こは唯だ局部をば其の交互の關係に置かしめ、又た之れを維持するところの統一的實在の存するによりて然るのみ。こ

れ吾人が解釋なり。吾人は議論の梗概を形而上學より借るものなり。

吾人は自然に思ふ、凡ての物は實在にして相互獨立せりと思ふべからざる理由なしと、萬物は共に空間に存在して何物も他のものを含蓄するものとは見えざるなりと、此の程度にある思想によれば物は皆互に相關せず、各獨立するものなれば、よし他の物悉く滅ぶることありとも此の一物は必ず永續するを得べしと信ずること容易なり。かくして此等相互無關係なる事物を一致せしめ交互作用せしめんと企つるものあるなり。

交互作用を説明せんと試みしもの多し。然れども物自身が獨立すと見做さるゝ限り決して此の計畫は成功すること能はざるべし。大抵の説明は比喩的に言語を用ふるか若しくは想像の産物に過ぎざるなり。例へば或る一物が、己が状態にて、作用を及ぼされたる或る他の一物に移すといふ、而して此の移轉を動作なりといはんか、さすれば動作とは物と物との間に往來するものと考へらるゝなり。されども此の空想は状態は其の性質上附隨的のものにして、主體より離れて存在するものにあらずとの反對論に屈服せざるべからざるなり。状態移轉すといふ總念の依りて以て起る所以のものは、主として熱及び運動の傳達といふ事であり。されども元來此の語すら事實を正確に言ひ顯はしたるものにあらず、何となればそは傳播プロパゲーションにして傳達トランスミッションにあらざればなり。樣態、性質、事情等は、必然に附隨的の性質のものなることは、一切の移轉の總念を放棄せしむるものなり。

他の同様なる字義的説明も、試みられざるにあらず、即ち感化力傳達の總念にして、感化力が物より物に傳はりて物體を感化せしむと。之れも亦た前と同様なる反對に遭遇するものなり。感化力若し結果の意味とせんか、吾人は單に新なる名を此の問題に付するに過ぎざるべし。若し結果以上の意味を附せんか吾人は感化力を以て、一種の物と爲すものにして、益問題を困難ならしむるに過ぎざるなり。何となれば吾人は此の物と物との間に往來する新しき物は、如何なる物なるか。他の物と異るところ何處にあるか。傳はるものと、そが作用を及ぼす物との關係如何。又た傳はる物はそが出で來りたる物よりも如何にしてより多くの事を爲し得るか等の問題に答へざるべからざればなり。吾人若し此等の疑問に答へんと試みんか、此の説明の純然たる文字上の事に過ぎざるを覺るに至らん。そが想像に起因するものなること明かならん。物は空間に於て相離れたるものとして考へられ、而して想像は物と物との間に行はれ、之れを交互作用と稱するものなり。

此の見解と等しきもの物理學者の間に行はる。曰く勢力、物と物との間に行はれ結果を生ずと。されども亦た想像の産物にして、何等の解釋を與ふることなし。勢力は唯だ物の作用より出づる抽象的觀念にして、物と物との間に若しくは其の物より離れて存在するものにあらざるなり。

そが若し物ならば感化力に關して發せられたる疑問は、同じくこゝにも發せらるべし。そが若し物にあらずとせば、吾人は單に新なる名稱を此問題に付したるに過ぎずして、何等解釋を加へたる

ものにあらず。

此等の總念の困難なるが故に、或る者は此等勢力を抛棄して、凡て交互作用は物互に密接する結果なりといふ。蓋し距離を隔て、作用することの困難なるを説明せんが爲めなるべし。此の説は問題を物理界にのみ限れども、然かもなほ此に於てすら二重の失敗を爲せり。第一密接に基ける説は物理学に於て之れを維持すること能はず。第二密接に由れる作用は、距離を隔てたる作用と均しく獨立したる物と物との間にありても、理會し難きものなり。空間に於ける隔離は、此の困難を生ぜしむるものにあらず反つて想像をして之れを語るに便ならしむ。若し物にして獨立せば、換言すれば他の物に關係せずして其の現状を保つとせば、如何なる方法を以てすとも相互影響せらるることなかるべし。此の如き實在にして空間に存在すとせば縦し同一の點を占むるとも、無限の虚空に依て隔てらるゝとも、同じく相互に影響するところなかるべきなり。若し物體と物體との間に更に深き形而上學的の關係存し、兩者の間の斥力を生ずるにあらずんば、空間の接觸を以て、密接に由れる結果を説明する何等の助とも爲し能はざるなり。理性の困難とするところは、虚空なる空間を通じて作用することにあらずして、各獨立して互に關係なき物と物との隔離を通じて作用することありとす。此の困難は假令空間の世界存在することなく、たゞ心靈の社會のみ存すとすも、なほ取り除かるゝことなかるべし。

思索に慣れざる讀者の或る者は、かゝる辯論に倦みていふなるべし。如何なる疑問の發せらるゝにもせよ、吾人は交互作用の存することを知らず。吾人はかゝる人に向つて、先づ注意せしめざるべからざることあり。交互作用は經驗上の事實にあらざることは是れなり。吾人の眼に映ずる事實は、物と物との間に、相互相伴ふ變化なり。若し甲變化する時は、乙丙と續いて一定の秩序と程度とを以て變化す。此の交互變化の秩序のみ吾人が觀察し得る事實にして、又た科學の研究し得る事實なり。此の事實を説明せんが爲めに、吾人は勢力を假定す。然かもこは事實自らにあらざりて、單に事實に附加したるものに過ぎず。之れに加ふるに動的推理の勢力は、純然たる方程式風の關係を示すものにして、決して物の原因たるものにあらず。

吾人は次に反對論者に想起せしむべき事あり。そは原因力確に働きをるとするも、之れが爲めに吾人の其原因力を思考する形式を決定するものにあらざること是れなり。物と物との間の交互變化を説明せんには之れが原因を要すること無論なりと雖ども、其の原因は多くの各自獨立なる事物間に之れを分つべきものなりと決定すること能はざるべし。此の見解或は不可能にして、他説を以て之れに代へざるべからざるやも未だ必ずべからず。

交互獨立なる事物が必然に交互作用を爲すとは、自家撞着の事なり。吾人は既に交互作用の體系に屬する、各局部の交互作用に關して、互に正確に、精密に相順應するものなることを指摘したり。

かゝる事物は其の性質と力とを、何等地に關係することなく、絶對的に自ら之れを爲すものにあらず。唯だ其の關係の中に、若しくは體系の局部組織分子として之れを有するのみ。各自の原因は凡ての原因と相對的なるものなり。或る者の作用に關する法則は自他一切のものに關するものと、同様なるものならざるべからず。されどもこは各自の實在は、總ての實在と關係あることを含意するものなり、何となれば實在自らは作用の中に含蓄せらるればなり、されば吾人は物は他の物が、現に爲す様に爲すが故に、そも亦た現に爲す様に爲すものなりといふ外に、更に物は他の物が、現に斯く在るが故に、そも亦現に在るが如く在るものなりと言はざるべからず。實在も作用も共に關係の中に含蓄せらるゝものなり。關係といふ言葉を離れて實在を定義せんことは、不可能のことなりとす。かゝる實在は必ず相對的のものなり。そはそが限定の基礎を自らにのみ有するにあらずして又た他の物にも有するなり。而してこは必然なる交互作用の體系中に含蓄せられたる一切の事物に對して然りとす。各自は全體の官能にして、全體は各自の官能なることは、代數の方程式に於けるが如し。互に關係することなく獨立したる物量といふことは、兩者とも均しく有り得べからざることなり。

かく觀來れば交互獨立したる事物が必然に交互作用を爲すといふ總念の矛盾なることを知るなり。交互作用といふ總念は、一の物は他の物に依りて限定せられ従つて凡ての他の物に依らざれば其の現に在る所の状態を保持すること能はざるべしとの意を含む。其の作用及び性質、他に依屬す

るところありとせば、物は其の關係を離れて存在すること能はざるや明かなり。其の存在は其の關係に含蓄せられ、又た之れと共に消滅すべきものなり、之れに反して獨立といふ總念は皆他に制せらるることなく、凡て其の限定は全く自己に在りとなすものなり。此等二種の總念は確に矛盾するものなり。物其れ自身が獨立なりと見做さるゝ以上、感化力若しくは勢力の通過によつて決して此の隔離を結合せしむること能はざるべし。此等獨立を主張する議論に於て、吾人の進み得る最高點は、物は交互獨立す、然かも皆均しく其の存在及び調和的同格の原由たる、更に高尚なる實在に依存するものなりと見做すこと是れなり。此の説は實にライブニッツが其の原子論及び既定和合論に於て論じたるものと同一なり而して此の説は根本的多元論と交互作用の實在とを否定するものなり。

之れに反して吾人若し物は事實交互作用若しくは相互限定の秩序中に包含せられたるものなりと假定せんか、吾人は此等の物は各絶對に獨立したるものなりといふこと能はざるべし。吾人は物皆全く自己同一及び自己充足の姿にて存在すと見做す通俗の見解を棄てざるべからず。斯の種の物は系體の中に在りて、交互關係に於てのみ存在するものなり。此等の物は皆相對依存的の存在を保つものなり。果して然らば獨立の存在は何處にあるか。何らの物にも依らざる依存的の物といふことは矛盾の語なり。又た多くの依存的の物を集むるも、之れによりて獨立の物を生づる譯もなきなり。

り。若し甲乙丙丁各自依存的の物なりとせんか $M+N+Z+U$ と之れを加へて行くと、なほ依存的たるを免がれざるべし。加法の記號に何等依存的の物を變じて、獨立のものとなす力なかるべし。

先づ思ひ浮ぶることは、體系其れ自らを以て、獨立的の物と見做さんとすることなり。其の説に曰く組織分子たる局部は體系中に於て交互相依るものといへ、其の體系其れ自らは、何等の物にも依ることなしと。こは甲乙丙丁のみが本體的存在なりと想像せらるゝ間は、唯だ論理上の空想たるのみ。かゝる場合には、體系は單に物の總和若しくは概念的產物にして、本體論上より觀れば無たるのみ。吾人若し此の順序を轉倒して、物を實在の眞の單位とし、之れによりて體系を構造するにあらずして、寧ろ體系を物の本源及び原由として、之れによりて物を構造すと説明するにあらずんば、到底此の謬妄を免ること能はざるべし。吾人若し此の修正の説を取らんか、體系は眞の本體論上の事實にして、物は單に其の依存的產物若しくは含意たるに至らん。されども體系といふ文字は、此の概念を言ひ顯はす好適の文字にあらざるなり。吾人の有する觀念は、眞に單獨自存する根本的の實有にして、自餘の萬物は其の實有を彼の内に、又た彼に由りて有すといふ是れなり。

吾人が物と呼ぶ物に、交互及び相伴の變化存することは、吾人が經驗する事實なり。此等の變化を説明することは、思索的の問題に屬し、之れが解釋は直ちに判明するものにあらず。されども明

白なる一事あり。吾人は變化を變化する物のみによりて説明すると能はざる是なり。交互獨立なる物が、必然に交互作用を爲すといふ事と依存の物を總計して以て獨立の實在に達せんとすること、の中に含まれたる矛盾を避けん爲めに、吾人は相對依存の世界を超越し、絕對獨立なる根本的の實在を假定せざるべからず。而して此の根本的實在は、唯一なりとするによりて、吾人が交互作用と稱するものは、その究極の説明を發見するものなり。多くの物の交互作用は、之れを排列し、又た其の交互作用を媒介し、又た多くの物は或る意味に於て、その現象若しくは變形に過ぎざる萬有包括の唯一者の統一によりてのみ出來得べきものなり。かくして淺薄なる考へより起る多元論は廢れて根本的一元論之れに代るに至らん。而して通俗の交互作用に關する概念は改善せられたるなり。物の交互の變化に對して、之れが原因を要求するは、全く正當の事なり。されども之れが原由を交互作用、若しくは獨立したる物の他動的原因にありとするは無理なることなり。吾人は物と物との間に働く他動的原因の代りに、萬有包括の唯一實在なる內在的原因を以てせんと欲するものなり。

多と根本的一との一般の關係に關する概念は二つの外に出づること能はざるなり。吾人は多數は全く此の多數を排列し、又た其の交互の關係若しくは交互作用の媒介を爲し然かも全く之れと異なる唯一者に依るものと見做し得るなり。其の排列整齊の眞の原由は、多數の物が自ら發するにあらずして、寧ろ之れを排列整齊する唯一者によりて彼らの爲めに、又た彼らと共に爲さるゝところ

のものなり。彼らは交互限定するものにあらずして反つて交互限定せらるゝものなり。他の概念は其の外部にある物に依らず、其の内に存在して、然かも其の物の本體たる實在に依るものにして、其の物は或る意味に於て、悉く其の實在の現象若しくは變形に過ぎずとなすにあり。物といふ語を普通に使用する意味に於てすれば單に實在化せられたる現象に過ぎず。唯だ文法的實名詞に依屬するものゝ如く本體に依屬する物として、その物たる事を得るものなりと。以上二種の見解の中何れを擇ぶべきかは、後日の研究に譲らざるべからず。然れども兩説共に物の自足的なることを否定し、世界の統一的原由の必要なるを認むるものなり。

萬物の存在の基礎たる此の實在者に、吾人は基礎的若しくは根本的實在の名を附す。この者は自足的のもの、若しくは其の限定の原由を自らに有するものなるが故に、吾人は之れを絕對者獨立者と稱す。自ら以外の何物にも局限せられざるが故に、吾人は之れを無限者と名く。世界を説明するが故に、吾人は之れを世界の原由と呼ぶ。此等の言葉は字典の意味に取るべからず。されども特に擇ばれて用ひられたる意義に注意せざるべからず。無限者は萬物の總計なりとするにあらず。唯だ之れを以て有限者の獨立的原由となすのみ。絕對者なればとて、凡ての關係を絶ちたるものとするにあらず。唯だ他の物に制限せらるゝが如き關係を有せざるのみ。他より加へられたる制限の關係は絕對と矛盾するものなり。されども己が自由に加へ又た己之れを維持する關係は矛盾にあらざる

なり。

此の如く略説せられたる議論を承認せんとするには躊躇する個條少からざるべし。されども此の議論に對する確實なる反對論ありとは見えざるなり。此等の疑惑は主として吾人が覺官に拘泥するより生ず。覺官は直接且つ終極なる形而上學的の知識を與ふる十分なる力を有すと想像する人に取りては、以上の如き議論は毫も勢力あるべからず。されど哲學はかゝる人の業にあらざるなり。是れに反して更に他の優れる場合に於て、吾人若し名辭と其の意義とを知り、又た理性内部の構造を知らんか、かゝる人は皆上の如き結論に同意せざるを得ざるべし。唯心論者は又た反對して言はん。此の方法を以て如何ぞ眞の一致を見出すことを得んや、眞の一致は獨り思想中に又た思想を通じて見ることを得るものなれば、かゝる動的考察は、吾人をして一致に到達せしむるものにあらざるべしと。吾人は大體此の說に賛成するものなり。形而上學は吾人に示すに本體論的一致は唯だ有心者の場面にのみ行はるゝものにして、充足原理の法則によれる遡源的思想も、複雑より單一に移ること能はざるべきを以てす。吾人は固より此の點に異議なしと雖ども、吾人はなほ吾人の議論は其の論議の範圍に於ては正當なりと主張するものなり。吾人は統一を肯定する必要を示したり。されどもそれは未だ此の統一を思想する形式を決したるものにあらざるなり。吾人の議論は二重に假定的なり。若し物あり又た交互作用ありとせんか、吾人は多元の根據より、之れを考ふること能は

ざることを辯じたり。而して吾人はなほ此の說を維持するものなり。されども吾人は時來りて更に唯心的なる思想に迫らるゝ時は多少の修正を加へんことを望むものなり。一時に萬事を言ひ盡すと能はず。教育學的の考も看過すべからざるなり。

是故に吾人は淺薄なる思想より生ずる多元說を棄て、根本的一元論を採用せんと欲す。勿論此の說と雖どもあらゆる困難を免れんことはかたく又たあらゆる問題に答ふるること能はざるものなり。反つて實在の秘義は、前の如く幽玄にして明かならず、其の唯一の價値は人の心意が終極の統一を要求する意を表示し、相獨立せる物と物とが、交互作用を爲すとの假定中に含まれたる矛盾の弊を排除するにあり。吾人は故に無限者及び有限者の關係を思想に描寫し、若しくは無限者の存在を理解することを得べしといはず。此處に吾人は何れの點に於ても知識の界線に接するときは必ず遭遇するを免れざるものあり。即ち之れを認識し承諾するを禁ずる能はざれども、之れを演繹し理解する能はざる事實を承諾する必要あること即ち是れなり。

無限者の性質に關して吾人の知り得る所は、無限者の一なることのみ。形而上學は更に一步を進めて、吾人をして之れを動的のものと見做さざるを得ざらしむ。然れども此の如き觀念は無神論も汎神論も等しく之れを承認するに難からざれば、未だ全く神の完全なる觀念なりといふべからざるなり。さはれ吾人の説明は従前の解釋に比して多少の進歩を爲したるに相違なし。吾人は唯だ意匠

論のみにて到達すべからざる點に達したり。多神説の維持すべからざること既に明かなり。若し有神論を採るべしとせば、唯一神教の外擇ぶものなきを知るなり。吾人は又た自然界の統一に就いて論ずるところありしなり。そは思索的の十分満足なる證明を有せずと雖ども科學的思索的信仰の個條とはなりたるなり。其の保證は自然界の根柢の本體的單一に存すとせん。

吾人は更に進で此の根本的實在者の性質を判定せんとす。吾人は思索上の唯一者と宗教上の神とを一致せしめんことを希望す。よし強ひて之れを爲す必要なしとするも、之れを爲すの不可ならざらんことを望むものなり。

第二章 世界の原由は睿智を有す

此の點に於て吾人は適當に數多の問題を提出するを得べし。然れども吾人は世界の原由は睿智を有すといふ有神論の中心問題を論ずるに急なれば今此に之れを論ぜず。他の時に譲るべし。吾人が刻下の目的は有神論的根柢に依るにあらざれば、吾人が經驗に合理的解釋を附すること能はざるべきを示すにあり。然れども吾人は此處に形而上學より一對の原理を取り來りて之れを本章の初めに論述すべし。

一 此世界の原由は其の獨立なる地位より有限者及び凡て其の限定の本源たり。吾人が之れを盲目的若しくは開眼的たりとするも、必然的若しくは自由なるものなりとするも兎に角有限なるものはその存在の原由を自己の内に存せず。その存在、性質及び歴史をば全く此の世界の原由に歸せしめざるべからず。吾人は萬物の限定的原由を此の根本的實在の計畫に求めずんば之れを其の性質に求めざるべからず。

二 此の世界の原由は製作に用ひらるる原料と見做すべきものにあらず。原因たり作因たるべきものなり。そは世界が之れによりて以て製作せられたる材料にあらず、之れによりて以て生産せられたる作因なりとす。形而上學は本體の主要なる意義を、不動にして靜的なる實在に見ることなく

動的なる原因性に發見するものなり、原因性は本體の本質なり。

世界の原由を睿智のなりとする議論は之れを二大別することを得、即ち歸納的と思索的と是れなり。前者は睿智を論ずるに世界の秩序あること、自然作用の結合が一目的に向ふが如き若しくは有限的睿智の千種萬態なる存在の如きは正しく世界の原由が睿智的なるを證すとす。後者は之れを論ずるに理性の構成智識の性質及び含意と、形而上的批評の結果とを以てす。然れば吾人は歸納的議論と認識論的形而上學的の議論とを有するものなり、請ふ之を別論せん。

歸納的議論は通俗の思想に喜ばるゝものなり、事實通俗の思想は他種の議論を解し得ざるものなり。認識論形而上學に依る推論は甚だしく抽象的にして幾分の教練と省察的能力とを有するにあらざれば、之れを理解すること能はざるべし。されば斯の種の推論が論理學の見地より最も満足すべきものなりとするも、それは決して通俗的のものとなり得ざるべし、通俗なる思想の主要なる困難は歸納する範圍の中にあり、又た其處に發見せらるゝものの解釋に關するものなり。此等諸種の困難は主として誤解に基くものなりと確信するが故に吾人は此處に先づ歸納的の議論より始め、形而上學の考察をば後に譲ることとせむ。教育學上より見れば、此の歸納的方法を、抽象的思索的なる議論よりも先にするには更に有効なるものとす。

通俗の思想にありては、有神論的推論の主要なる動機は説明の欲求にあり、世界の秩序的運動、自然

界に於ける目的を有する如き生産物、有限なる智能の存在は説明を要する事實として吾人の面前に顯はるゝものなり、而してそは世界の原由は睿智なりとなすによりてのみ之れを説明し得べしとの結論に達すべきなり。或は全く之と相反し自然界の機制と勢力とは之を説明するに資し、吾人は其れ以上或は其の裏面を尋ぬるの要なしとする結論に達するものなり。兎に角思想は説明を欲求せり。

こゝに吾人は人の心は原由の説明に關し、唯だ二種の原理を有す、即ち機制と睿智となりとの見解を論理學より借り來るべし。他の原理を表示するの字句を構成すること難きにあらざるべし、然れども此等の字句に對合するところの思想の存せざるなり、吾人は後に到りて機制は決して何物をも説明し能はざるべしとの確信に達するところあらん。然かも今は唯だ説明の二型を納るゝこととせん、即ち背後より推ざるゝ必然的機制力と將來を先見し自由にその目的を實現せしむる睿智と是れなり。前者は吾人前事の必然的決果として之れを説明し、後者は睿智の作用として之れを説明するものなり。然れば問題は左の一點に歸す。曰く如上二種の原理に就きて孰れか人を包藏するの宇宙と生命との究極的説明として優りたるものなるかと。

歸納的議論は有神論的結論の證明として或る顯著なる事實に訴ふるものなり、即ち秩序の體系自然界に充滿する目的を有するに似たる生産物有限なる睿智の存在等是れなり。此等の中何れにても之れが唯一満足なる説明は世界の原由を以て睿智なりとの斷定を必せしむるものなり。如上諸種の事

實は相集めて以て反對し難き加重的の推論をなすものなり。吾人は今之れが説明に移ることとせ
ん。

世界の秩序より立論す

此の推論は物理的體系より取り來らるゝものなり。何となれば吾人はかしこに世界の不變なる法則の最も明瞭にして又最も印象つよき例證を發見し得ればなり。此の推論は多數の人に取りては最上なるものなり。意匠の事實は微細にして比較的小區域に限られ然かも必ずしも明瞭なりと言ひ難し。然れども世界の堅確なる法則は萬世不變なるものなり。されば秩序は彼等に取りて睿智の大なる表示にして此の事實よりして睿智の存在を確かに推論し得るものなり。この事實自からは説明の價値を有す。

吾人は後に世界の領會せらるゝ事は世界が秩序的合理的組織的の構造なることを含意する故なることを論ぜんとす。乃ち今は唯だ再び各事物は交互作用の體系中に含まれたる他の事物に正確にして萬有包括の順應を爲すものなりと言ふを以て満足すべけん。吾人は既に吾人に何らかの意義を有する眞實の體系は一定の前件は一定の後件を伴ひかくして順次交互作用の各員子は、其の他のものに對し、正確なる順應即ち適合を要求する法則の體系ならざるべからざることを論じたりき。然

らずんば種々なる事物或る事物に伴ふか若しくは何物も之に伴ふことなきことあらん。自然の過程が數字的の正確を保つは、此の順應の法驚くべきものあるを例證するものなり。天は數理の結晶したるものなり。あらゆる勢力の法則は數理的なり。エネルギーの交換、化學的結合亦均しく然りとす。結晶體は立體幾何學なり。幾多の有機的生産物にして之れと同様なる數理的の法則を示せるもの少からず。科學は數理的となるにあらずむば、其の終局の形狀に到達したるものにあらずとなすものなり。然れども單に空間に於て存在したればとて其運動は必ず數理的關係を有し、其存在は必ず數理的形狀を呈するの道理なし。空間は形狀の形なき根柢たるに過ぎず。故に不規則にして亂雜なる形狀と少しも相矛盾するものにあらず。又た空間は數理の缺乏と兩立するを得べし。眞に數理的なるものは靈性の所爲なりとす。故に數學の原則此の如くに行き亘り、體系に於ける形狀と過程プロセスとにして、一定の數理的概念を表示するもの多く、且つ甚だ精細に數を以て測量せられ得るは最も驚くべきことなり。

宇宙をして靜的存在たらしめば、物は恒久此の如き關係に於て成立するものなりといひ此の事實の背後を尋究するの必要なしといふを以て吾人或は満足するを得ん。然れども又た甚だ疑はしきことなり。何となれば類似ソムニライと同等イコワリとは合理的關係にして睿智を認むるにあらずむば、之れが説明を施すこと能はざればなり。然ればクラーク・マックスウェルは其の著名なる「分子論」に於て分子

の同等と其性質とは分子は「製造せられたる品物」なることを證明するものにして、決して他の自然の作用として之れを説明すること能はずとなせり『されば各分子が明確にメートル法の印を押されたる跡あること、恰もバリーの文庫に於けるメートルの如く若しくはカーナツクの神殿に於ける王の二倍のキュービットの如きものあるなり』と。こは兎に角天地は嚴格不變の物にあらずそは寧ろ理解するを得、法則に従ひ變化止むことなき過程なり。此の過程たるや常に能く合理的の秩序を維持し、若しくは恢復するものとす。重さと廣さとを測量することは間斷なく天地間に行はるゝなり。化學的の變化に於ては一元素の一定したる分量、他元素の一定したる分量と配合す。場所の變化を見るに、引力斥力の強度即時に順應して一致せんとす。意匠の問題に拘らず唯だ萬物が一定の法則に従ひ、其の品質及び分量に於て順應するの單純なる事實のみにも極めて意味深き事實なり。世界の原由は多くの點に於て、體系中の多くの物に働けり。而してその作用は常に自他の者に於ける其作用と順應して相悖らざるなり。其の間に一髪を容るゝ程、原子を動かさんか重力の及ぶところ凡べて他の原子にも之と順應するところの變化生ぜざるを得ず。然れども物は間斷なく動くものなり、故に順應齊整を要することも亦た間斷なく且つ即時ならざるべからず。重力の一法則すら廣大なる問題にして吾人の心之れを理解せんとして茫然自失するものあり。然るに之れに加ふるに勢力に關する他の法則を以てせんか其の複雑なること人智の以て究むべきものにあらざるを感ず

るものなり、加ふるにかの有機體の生長作用を考究せんに無數なる構造は絶えず生成せられ若しくは維持せらるゝなり。而してその形狀は一定の型に則るものゝ如し。この點に就きてはこゝに之れを論ずるの要なかるべし。

さらば此に思慮ある人をして、永久に不可思議の念に堪へざらしむる一問題は提出せらるゝなり。世界を創立する勢力、又た世界を永久に發出せしむる勢力は、衰へず又た疲るゝとなし、故に世界の眞實なる法令は堅くして動くにあらざるなり。而してこの問題を解決せんと欲せば睿智無睿智、自ら指導する理性と盲目なる必然の二原理の外に出づると能はざるべし。前者は適當にして牽強附會の跡なし。そは事實をして吾人の經驗と同化せしめ、經驗より暗示せらるゝ唯一の原理を此の秩序に與ふる者なり。吾人もし此の説を採用せんか凡ての事實は悉く明瞭となり、照應亂れざるに至るべし。

是に反して他の見解を取る時は自らは睿智を有せずまた合理的にもあらずして然かも睿智を有し合理的なるものを生じたる勢力ありと假定せざるべからず。そは萬物に働き其各々に於て凡てに對し正確なる關係を有す。然れども自からも知らず、己れの遵守する法則も、其の創設する秩序をも解せず己れに依りて絶えず發生せられ又た維持せらるゝ多數の生産物が、一見目的を有するが如くなるをも領解せざるなり。吾人若し此の勢力何故に然るかと問はゞ唯だ然らざるを得ずと答へざるべからず。何を以て然らざるを得ざるかを知るかと問はゞ唯だ假定によると答ふるの外なからむ。

然れども此の如きは萬物は必然然らざるを得ざるが故に然るなりといふに同じきなり。換言すればそれは全くこの問題を抛棄するものなり。事實を悉く不明瞭なる假定によれる必然に歸するものにして、更に之れを尋究すれば此の必然は實に此の同問題が唯だ他の形態を装うて現はれたるに外ならざるなり。而して之れを適當に解釋せんには有神論の外又た他の途存せざるなり。

秩序の無神的説明は、一たび之れを調査せんか其の根柢空虚なるに驚くべし、其の理由は淺薄なる形而上學と論理學とに由るものなり。此の事につきては後に論ずる所あるべけれども、今無神論的説明の弱點を陰蔽する二箇の源因を指示せんとなす。

第一に吾人は原因を見ると妄想す。殊に物質を以て眞實の原因なりと妄想す。之れに反して精神は全く假定的の原因にして、物質てふ疑ふべからざる確實なる原因が説明することあたはざる所を説明せんが爲めに假説せられたるものに過ぎずとなす。故に有神論は物質と稱する眞實の原因に對して假定的原因ともいふべき神を主張するものと見做さる。而して物質の説明するところ日に多きを加ふるに反し神の必要益々減ずるに至る。必然及び無睿智は明に物質と相結合し以て最も有力なる原因力カウゼンを形成せり。さらばその勢當り難く誰かその能力を制限し得んやと。

此の思想は近代無神論の再興に於ける一大要素なりき。吾人は之れに答へていはん、之れ陳腐なる認識論の反響なりと。吾人は諸原因に對し直接に何物をも知るものにあらず。吾人は或る結果を

經驗し之れより原因に論及す。而してその原因の性質は結果より推論するものなり。物質は何物の原因とも見えず。精神も亦た然り。宇宙的現象の原因は吾人の眼之れを觀察すべからず。故に吾人が發し得る唯一の疑問は、その原因を如何に思想せざるべからざるかといふ是れなり。吾人の答は如何なる場合に於ても、思案的、形而上學的ならざるを得ず。有神論者は現象の中に於ける法則と秩序とを觀察し之れを己れ自からと己の爲すところを知る所の勢力とに歸す。無神論者は己れ自からをも、又た己れの爲す所をも知らざる勢力に之れを歸するものなり。

無神論の弱點を蔽ふ第二の理由は法則といふ概念にあり。人の心は殊に抽象的思想を實在視し物を之れに服従せしめんとする傾向を有す。法則の統治なる語は之れがため全く根據なき意義にて用ひらるゝことゝなれり。法則は物を離れて存在し、又た之れを支配し且つ凡ての作用を限定するものゝ如く想像せらる。かくして重力の法則は物を離れて存在し、物皆之れに服従するかの如く考へられたり。かくて重力の秘義は之れを法則と稱する事によりて解き去られたりと爲せり。此の考の誤れるは極めて明白なり。元來法則といふは物體の如き存在を有するものにあらず。そは單に事實若しくは或る原因によりて發動する規則の概括的表示に過ぎざるなり。物は重力の法則之れを要求するが故に互に相引くものにあらず。然かもこれなくして物は相引くものなり。而してその多くの場合を比較するに、引力の強度一定の法則に準じて變化するを吾人は發見するものなり、されども

此の法則が此の相引くといふ事實を生ずるにあらず。法則は唯だ之れを言ひ顯はすに過ぎざるのみ。こは他の自然の法則に於ても凡て然るものとす。彼らは事實を生ぜず、又た之れを強ひず、唯だ之れを言ひ顯はすのみ。然れども抽象的思想を實物の如くに誤解する心の頑強なる傾向によりて吾人は先づ法則に付するに實體の如き性質を以てし、而して之れを先在の必然として物の背後に携へ以て凡ての物を説明せんとす。然かも此等の法則は理性の永遠自足の真理と均しく、敢て説明を要せざるものなりとせり。無教育なる人心は必然といふ形式によりて思想するの傾を有す。此の必然は心自らの影なるに、然かも忽ち説明するかの如くに見做す。此の如くにして吾人は合理的秩序といふ事實を以て反つて之れを統治する理性の存在を否定するの理由となすが如き、道理を顛倒せる怪事を呈するに至れり。

然れども事實に於ては法則はこの問題の大部分を占む。吾人若し世界の原由は量及び質に關する一定の法則に依り完全なる適合及び正格なる數的順應を以て事物を按排すといはんか吾人は其の問題を陳述したるのみ未だ之を解釋したりといふべからず。順應が意識に伴ひて發起することは之を眼にて見るべからず。然れども必然によりて發起することをも又た之れを見るを得ざるなり。意識も必然も共に吾人の觀察にまで附加されたるものなり。吾人が見得る所はたゞ法則に準據せる變化のみ。吾人若し此の如き變化は如何にして起るかと問はんか睿智無睿智の何れかに訴へざるべから

ず。コムト曰く此の問題を提出するは人心未熟の兆候なりと。然れども一度び之れを提出せんか有神論は唯一の答へなりと。彼又た曰く無神論は神學者中自家撞着の最なる者なり。何となれば彼らは神學上の問題を提出しながら然かも解決する唯一の道を拒否するものなればなりと。

コムトの言は吾人の注意を喚起するが故に之れを此處に引照するの價値あるものなり。

彼曰く 吾人若し強ひて現象を發生する必須なる原因の不可解なる秘義を解せむとせむに現象はその内若しくは外に在在する意志の發生するものなりといふより更に満足なる假説はなかるべし。こはかの現象を吾人の中に存在する慾望によりて生ぜられたる結果に同化せしむる假説なり。形而上學と科學との研究より生ずる名譽心なかりせば、古今の無神論者が此の種の直接なる説明を棄てゝかゝる問題に對し、その曖昧なる假説を信じたりとは到底考ふるに能はざるなり。如上の説は人々が絶對の眞理を尋ね究むることの全然空虚にして又た無益なることを覺ゆるに至る迄は、理性を實際に満足せしめたりし唯一の説明法たりしものなり。自然界の秩序は如何なる點に於ても極めて不完全なることは言を要せず。然れども自然界の生産物は之れを盲目的機制を以て説明せむよりは、智的意志の假説を以て解釋せむ方遙に優れりといふべし。されば頑固なる無神論者程、神學者中最も非論理的なるものなかるべし。何となれば彼等は神學上の諸問題を提起するものなるに然かも之れを論究する最も適切なる方法を斥くるものなればなり」と。

無睿智的のものを以て宇宙的秩序の原因となすを正當とすべき唯一の方法は此宇宙の形態及び凡ての法則と組成員子とは、合理的の必然即ち根本的實有の含意なりといふことを示すにあり。數學の眞理は空間及び數に關する吾人が直覺の含意にして其の眞理に對しては敢て理由を要せざるなり。何となればそは自明の眞理なればなり。此の如く宇宙とその萬象とは萬物の根本たる獨立せる實有の含意なりと想像し難きにあらざるなり。かゝる場合には目的論の物理學生理學に不必要なること數學と異なることなし。

これ嘗て哲學的思索の夢想せし所にして之れを成就せむことをつとめたるものなり。無論そは失敗に終りたり。單に獨立なる實在てふ總念のみを考察するも實際の秩序を洞見するを得ざるべし。吾人は物質及び心靈の根本的區別を演繹せざるなり。唯だ之れを發見したるのみ。宇宙的活動の法は之れと同様なるものなり。重力を初めとして萬有の法則は全く存在せざりしとするも、若しくは現在のものと全く異なれりとするも敢て思考し難きにあらざり又たよし法則の存在を假定するも、其の結果は現在のものと全く異りたるものたるを得べし何となれば法則のみ獨り結果を定むるものにあらず。そが依りて以て行動する條件ありてこそ然かするを得るものなれ。若し條件にして異らんか同一の法則も異様なる結果を生じたりしならむ。物理學と化學との法則は常に同一なり然かも之れを應用する境遇に準じて其の結果を異にするものなり。されど是等の境遇は凡て不定のものな

り。宇宙と其の法則は必然たるの痕跡を示すことなし。これ單に吾人が事實として認むるものにして吾人は之れを演繹せんとするものにあらざるなり。形而上學は更に此の必然の總念を推し尋ね、其の結果を究極すれば遂に根本的唯一者の一なることを取り消し吾人をして堅固なる岩上に立たしむることなく反つて深淵に沈ましむるものなることを明かにすること難からざるべし。然れども吾人は此の議論を中止すべし。此に一の勢力ありて其の作用は理解すべく又た法則に従へり。而して諸事相互に調整して平均順應最も精微を極め、又た此の平均は絶え間なく再現するものなり。有神論は此の勢力は睿智を有するものとなし無神論は然らずとなす。有神論者は合理的にして理解すべき工作は理性と睿智とを示すと稱し、無神論者は合理的にして理解すべき工作は無理性無睿智を示すと結論せり。吾人は二者の中其の一に居らざるべからず。

此の無神論の根柢にかゝる議論をして尤もらしく實らしからしむる所以のものは、蓋し批評を欠ける未熟なる覺官的實在論存するが故なり。されば此の物質勢力及び法則を有する堅實に見ゆる世界が單に睿智の一作用に過ぎずとは、少しも念頭に浮び出でざるところなり。吾人は之れを後に論ずることとせん、今は唯だ此の議論の空虚なることを、それ自らの原理より明かにするを以て足れりとせむ。

目的論に基ける議論

秩序の存在より立論するは宇宙より立論する議論なり其の關するところは宇宙の構造是れなり。然れども宇宙の法則は目的存在の正確なる證據を有するものにあらず。若し此等の法則如何にして成立し得るかと問はゞ睿智によりて之れを説明せざるべからず。若し成立の目的を問はゞ吾人は之れを明に理解すること能はずと答へざるべからず。吾人の見得るところのものは、唯だ法則に準ふ運動と結合とに過ぎざるなり。然れども有機界に來らば此の疑ひ自から消散するに似たり。有機界にては活動は單に法則に準ずるのみにあらず、そは又た將來の目的に相關するものなり。無機界に於ては吾人が主として接するところのものは事實を結果として生ずる前行條件なりとす。有機界にありては單に後方を眺むるに止まらずして、又た前方を望むものなり。宇宙的活動はその秩序たるよりして、又た目的となるものとす。而して結果は單に産物にあらずして又た目的を有するものゝ如し。其の順應は豫め工夫せられたるものゝ如く其の安排は目的するところありて然るが如し。後ろに前行條件を顧みば海濱の石が圓かになりたるを説明し得べく然かも卵子は前方の見望を含意するものなり。此等の事實は歸納的議論の第二なる目的論的即ち意匠論の材料たるものなり。秩序と意匠(目的)との推論は之れを嚴正に區別すること能はず。若し完全なる知識を得むか或は此

の二者の一致を發見するやも知るべからず。若し無上の睿智存在せりとせば吾人は自然界の法則と其の原素的要素とが生命の世界に關係なくして定められ、有機界が自ら完全なる無機界の單に附屬物に過ぎざるものなりとは想像し難きものなり。目的若し存在せんか、そは兩界を包含せざるべからず。有神論者は能く家畜、五穀、礦物、石炭、鑛脈等にもなほ人類と文明に對する準備の備はれるを發見するものなり。カントは有機體の目的論と單に無機界の用に供すべきことを區別せんとせり。然れども此の區別は上に述べし理由によりて嚴正に維持し難きものなり。然れども歸納的の見地より吾人は之れを別に論ずるを可とする十分の差異を發見するものなり。吾人は有機界に於て意匠及び工夫の最も著しき痕跡を發見す。假令現法則の行はるゝものあればとて、必ずしも目的の如きものを有する生産物ありといふを得ざるべし。法則の行はるゝは亂雜なる岩石に於けると、結晶體若しくは生物に於けると異なることなし。そが間違なく行はるゝことは、荒蕪なる砂漠も豊饒なる平野と等しきものなり。然れどもその結果は、そが睿智を暗示する力に於て大いに異なることあるものなり。最後に秩序に基く推論は意匠論に反對するものなりとなすものあり。こは一定の法則の存在は特殊詳細なる目的の存在と相容れざるものなりと妄想するもの多きに因る。かゝる次第なるを以て吾人は別に此の推論を試みんとするものなり。

意匠論の運命は古より一定せざるなり。是れを陳述するに當り用語の正確ならざるが爲めに、言

語上の批評滔々として洪水の推し寄るが如きものあり。又た屢哲學上の不人氣を來したることもありき。されども常識は常に之れを珍重すべし。カント之れを論ずるや尊敬の意を表はせり。ゼー、エス、ミルの如きは有神論中勢力あるものと稱すべきものは唯だ此の推論あるのみといへり。この議論は時に褒め過ごされ時に貶し過ごされたり。意匠論は固より神に關する十分なる觀念を與ふるものにあらざると雖も、思索的ならざる人の心に取りては、第一原因の叡智あるを證する主要なる議論たらずんばあるべからず。

此の推論を攻究するに當り次の數點を注意すべし。

一、此の推論は意匠は意匠者の存在を證明すといふことにあらず。こゝに意匠あり。故に此等の事物は意匠者を有せざるべからずといはゞ之れ少くとも形式上に於ては疑問の論點を漫りに前定し、匿證伴争の誤謬に陥れるものといはざるべからず。何となれば此の小前提の眞偽を知らんと欲するは議論の争點なればなり。意匠が意匠者の存在を含蓄することは誰も之れを疑ふものなし。然れども意匠なりと稱せられたる事實が果して眞の意匠なるや否やを疑ふものは蓋し少からざるなり。故に意匠論は寧ろ左の如き方法にて立論せらるべし。此に意匠及び工夫の記號を有する事實あり。是れを目的の存在に歸せしむるにあらずむば説明すること能はざるべしと。論點は宇宙の體系に發見されたる目的らしき順應及び結合を説明せんとするにあり。而して有神論者は之れを意匠若し

くは目的に歸せしむるを以て唯一の適當なる解釋となす。之れを解き明すに於てその言語上の誤謬は兎もあれ此の議論の眞意に到りては古往今來常に此の如くにてありしなり。その目的は一個の思索的定理を證明せんとするにあらずして、そは具體的問題を解決せんとするにあるものなり。されば此の論議の價値は之れを解決するや否やによりて定まるものなり。

二、意匠論は結果の生ずる方法につきては何事をも假定することを要せず、唯だ復雜なる成果の中に、理想的目的に對して順應適合するの跡を存するは、何れかに意匠の存するを指示するものなりといふに過ぎざるものなり。智能は將來を慮りて動作するものなり。然ればその原由は結局的即ち目的的たるものなり。自然界に於ける動作若し明に將來の結果を望みて進むものならむか、その活動は智力的にして又た目的的なりと考へざるべからず、吾人が意匠論に必要とする所はたゞ之れに止まるのみ。更に之れより以上のものを加へんかその餘分の形而上學的推論にあらずむば通俗なる傳説の反響に過ぎざるなり。

三、意匠は決して原因的にあらず。そは唯だ理想上の概念にして之れを成就せむ爲めには期成原因エフィシエント因若しくは數種の期成原因の體系を要するものなり。胃にして自から之れを消化せざらんとせば、その消化を司るところの膽汁に對して胃は自から防衛するの準備なかるべからず。氷沈みて生物を凍死せしめざらむとせば、その分子的の構造に依り、其の容積水の同重量に比して大ならざるべか

らず、各種の事件は二箇の全く異なる疑問を生じ得べし、そは該事件は法則の秩序中如何に発生したるか、そは又た目的の計畫中何等の意義を有するか是れなり。前者の場合に於て吾人はその事件を以て之れを統治する法則に準據する前行條件の結果なることを證せんと欲し、後者の場合に於て其の目的意義を證せむと試むるものなり。此の二種の見地は全然別種のものにして、決して混同すべからざるものなり。發生の順序を研究する時は、吾人は意匠を以て、原因的系列中の一作因と見なすべからず。之れに反して或る事件の目的を研究する時は、吾人はそれが如何に発生したるかを語るの要なきものなり。凡ての事件は法則の秩序に準據し如何にかして發生するものなり。吾人は他の疑問を發するの要なくして此の秩序を研究し得べし。吾人は秩序と事件發生の形狀とを悉く發見したる後更に其の運動は目的を有するものなることを信じ得るなり。人々が疾病の爲めに死すといふ事實は同時に神の意志が行はれたりと考ふるを禁ぜざるべし。然らば事件が空間と時間との秩序の中に起ると述ぶる事と、之れを目的に解釋することとは、全く異なることなり。此の點に感ぜらる難點は、蓋し自然界を以て神の敵と考ふる朴素的實在論に歸すべきものなり。

二種の見地の差は屢々唱へられたる反對說即ち意匠論は科學的假定にあらずとの說に對する應答を含むものなり。吾人若し科學を現象間の共存と繼到との同様の研究に局限せんか此の反對は實に眞なり。然かもそは又た不必要の事なり。何となればかゝる場合科學は自らを經驗の一側面

に限りて、敢て他の事柄に關せざればなり。そは意匠の存在を肯定もせずまた否定もせず此の問題に對して全く局外者の地位に立ちて現象の一般的法則を尋究するものといふべし。

四、これを以て發生の順序の研究は、目的の信仰と論理上矛盾すること能はざるものなり。前者は如何にして結果の生じたるかを示し、而してその動作に意匠の存することを信ずる理由を妨害することなし。こは人類の活動に於て自明の事なり。かく判別せられたる二種の見地は、人類界に於ては決して混淆せらるゝことなし。人の發明なるものは意匠が固有なる法則によりて意匠通りの結果を生ずる物理的結合によりて實現せらるゝ時、始めて成るものなり。機械の作用を見れば意匠は少しもその原因的系列中に其の跡を示さず吾人は唯だ自然法と機械の構成的部分の性質とを見るものなり。

補整振子の目的は振子の長さをして一定せしむる様に用意せられたる異種の金屬の收縮によりて達せらるるなり。意匠の存するところはその組合せにあり。されどもその組合せの動作的要素中には何等意匠の顯はるるものなし。原因發動の順序によれば何物も皆結果若しくは生産物なり。概念の順序によれば、原因的系列の中生産物と見ゆるところのものも概念として、既に先きに存在したるものにしてかの原因的系列は此の概念によりて預定せられたるものなり。

されば吾人が人類の目的論に於ては、期成原因と結局原因とは互に相背反するものにあらず。結

局原因はその實現の爲めに期成原因を含むものなり。宇宙的目的論に依れば期成原因の任務若し意匠を實現するにありとせんか、若しくは理想的概念其の力を期成原因の體系中に留め後者は前者に準じて動作し以て前者即ち理想的概念を實現するものとせば吾人は生産物が行動する作因の性質より、必然に發生すべきものなりと期待せざるべからず。若し然らんか機制メカニスムは自から目的の奴僕として目的が定めたる形式に従ひて作動するものとせざるべからず。形而上學は期成原因が機械的ならざることを暗示す。然かも生産の順序と生産せられたる事物の目的的解釋とは自から異なるものなれども二者は互に矛盾するものにあらずして後者を豫想するものなりとせば、同一の結論に達するものなり。されば吾人は『現象の連續と考ふべき自然の全進行は全く前行原因によりて決せらるゝものなり』とするも決して目的論的結論を妨ぐるものにあらざるなり。機制的思想の粗笨なる形而上學を眞理と妄信して、假定の機制を素朴にも永遠自定の必然なりと之れを變改するものを除くの外誰か如上の兩側面を事實の上に認むることを難しとするものあらんや。さはあれかゝる素朴なる思想は病理學的作用にも劣りて、更に論理を欠きたるものといはざるべからず。

五、目的論的推論は多く斷片的に行はれたり。即ちこれ、かれ、及び其の他の者は意匠せられたりと、かゝる議論の結果は意匠を以て、微少にして不必要なる事實に限られたる特發的のものとなすものなり。意匠論もしかゝる方法によりて行はれんか、世界を全體として觀察せむと希ふもの、

随つて世界の各處に睿智を發見するか、然らずむば何處にも之れを發見する能はざる底の人の感情を害するや必せり。

意匠といひ工夫といふ言は兎角些細なる解釋に陥り易きものなり。此等の言が引用符によりて用ひらるゝときは、特に輕侮に價するを覺ゆるものなり。されどもこは必ずしも議論の要部にあらず單に説明若しくは心の制限に伴ふ偶然の事故たるにあらずむば、爭論者の案出に過ぎざるなり。必要なる點は前方を望むことゝその特別なる有機的微細なる點若しくは全生物體系若しくは大いなる宇宙の運動其物より觀察するも、協同的勤勞の存するや否やにありとなす。

若し此等の諸點を適當に認むるときは目的もしくは意匠に基く推論は、決して世人の多く想像するが如く微弱なるものにあらず。さりながら歴史的にいへば期成原因若しくは時空に於ける生産に關する順序の研究は屢目的若しくは結局原因の信仰を弱むるの傾を現はす。此の事實に多くの理由あり。即ち意匠の擬人的説明機制の爲し得べき點につきて不明瞭なる總念自然に關する粗笨なる形而上學及び一般の理論的混雜是れなり。吾人はこゝに少しく細論するところあらむ。

意匠論は外部の製作を説くに止まり内在指導を教へざるものゝ如く誤解せられたり。人の意匠は其の印象せらるゝ材料の外部に在り。然れども外部にありといふは決して意匠の要件にあらず。人類たる製作者若し彼の考案を已に存するところの材料に順應せしむることを爲さずして自から直接

にその材料を創造し、彼の考案を其の物に印象することありとするも、其の意匠たるは今と等しく現實にして又た明白なるを得ん、須要なる點は吾人が既に述べしが如く、前方を望むと言ふ事と「目的に向つて協力する勤勞」といふ事これなり。而してこは意匠が外部的なると内在的なるに關せざるなり。斯くの如き擬人的妄想の影響により、意匠論は從來多く不利なる地位に置かれたりき。或は之れを大工論と稱するものあり。此の語は意匠論の真相を解するものにあらずと雖も善く其の批評の粗雑なることを示すものなり。されども意匠論は物の構成中に具有せらるゝ意匠なれば一定せる開發の秩序に於ける萬物は其の豫定せられたる方案即ち目的を成就する内在的意匠と矛盾するものにあらず。吾人若しこの事實を念頭に留めんか、吾人はかの大工論に對する非難を聽きて聊か倦厭を生ぜざるにあらざるも、決して驚惶を來すが如きことなかるべし。若し意匠が大工流のものと考へられ若しくは或る擬人的の事故アップロントが、此の教理の本質と思はるゝときは、かゝる非難は蓋し當然の事なり。されどもかゝる皮相の見解若しくは誤解を打破したりとするも眞面目の人士を動かすこと能はざるべし。彼等はミルの言へりし如く、一教説はその最善の形態に於て論破せらるゝにあらざれば、全く論破せられたるものにあらざるを知るものなり。

同様なる擬人論的困難は、目的が成就せらるゝこと遅々たるるとき、目的に關する吾人の疑惑によりて起るものなり。目的的活動の前方を觀望することは、種々なる要素が目的に向つて輻合するこ

とによりて特に示さるゝなり。而してこの輻合が遅緩にして心界が限局せらるゝとき其目的は多く見失はるものなり。吾人は人類の活動に於ては目的が複雑となるか、若しくは考案の性質を取るとき、始めて全體を包容的に調査することによりて目的の存することを認知し得らるべきなり。身自ら工作の眞中に立つもの、特にその混沌たる初めに於てせるもの若しくは單に微細の點を研究して其の全體の諸關係を考査せざるものは往々全くその目的を見失ふものなり。故に自然界に於ける目的に關しても吾人はなほ多く此の立場にたゞざるべからず。吾人の一生短かきが爲め、目的の實現が緩漫なるとき吾人は之れを信ずること容易ならざるなり。何となればかゝる場合には、目的に向つて輻合する運動の活潑躍如たる印象を得ること能はざればなり。幾多の有神論者が宇宙形態の遅緩なる發達の教説に對して感ずる困難は多くこの事實に存す。之れと同じく又た同様の論理によりて蜉蝣の生を有するものは多くの人類の活動中に目的を見出すことあたはずして之れを否定することあらん。何となればその知識の範圍と時々の變化の速度とが目的に向つて進行する運動の強度なる印象を與ふること能はざればなり。吾人はその擬人論に陥らざる様注意せざるべからず。時と時の速度とは終極態フアイナルステイの純粹なる智的關係と何等の關係を有せざるなり。然れども吾人若し之れを連接して見れば、長日月を通じて漸次そが實現に向つて前進する目的は一日の目的よりも更に深く吾人に印象を與ふるものなり。擬人論的の惑亂を正すことは之れを以て終るべし。

外部的意匠に對する誤謬の結果は、次に物理的の法則及び作用を以て説明せられ得るものは之れが爲めに心の管轄を免るゝに至るとの妄想を生ずるものなり。カントすら此の惑を脱するを得ざりき。

其の『斷定批判』に説を爲して曰く目的なる總念は單に齊整的の價値を有し得ん、而して萬物悉くは皆機制的の説明を有するならんと。彼は意匠を以て原因中の期成原因となすの惑ひに陥り、果して目的より出でしと信ずるも、其の結果の生じたる方法を知ることあたはざるべしと思ふものゝ如し。公然此の説に賛同せしもの少からず。胃が其の腸壁の胆汁に浸入せらるゝことなからん爲めに一種の液を分泌するが故に、自らを消化せずとの發見はこの事實より一切の不思議と思はるゝ點を除去するものと見做れたり。目的は整然其の跡を探り得る法則の秩序を通じて動作するとき目的なりと想像せらるゝものにあらず。其の原因の發動を探り得るときに於てのみ目的を認識すといふ妄想は、近代の無神論の復興に與りて力ありき。かゝる輩は自然法發見せらるれば、如何なる場合に於ても、目的を排除し得べしと妄想するものなり。此の見解は第一意匠を以て原因なりと假定し、次に元素及び自然の法則に與ふるに目的を含まざる形而上學的の自足性を以てするものなり。この第一の假定と第二の想像即ち元素及び自然の法則に自足性を付することゝは、共に誤謬たるを免れざるなり。吾人既に論ぜし如く意匠は生産の作用中に於ける要素にあらず寧ろその豫定的

規範なりとす。意匠は時間と空間との中に感覺し得る様示し得ること能はず。そは智的に認識せられざるべからず。吾人は更に又た前章に於て説けるが如く非人格的實物界の體系は自足的存在を表せず唯だ世界の原由が作用する法を表はすのみ。其の爲すところ果して目的を有するや否やは唯だその結果を研究するによりて知るべきなり。若しかゝる研究にして宇宙的過程は前方を望みて進むものなるを明にせんか。時空の法則の名によりて之れに反對するは、少くとも全く見當違ひの事たるを免れざるべし。

吾人は目的が事を爲すと思惟すべからず。然らずして事は目的に準じて爲し得らるゝものなるを知り得るなり。

法則の體系と特殊なる意匠とを區別する主要なる理由は、自然界の工夫と見ゆるところのものにあり。自然界の工夫は結果を生ぜんために諸種の方則を結合せしむるも、其の方則は各自單獨に此の結果を生ずること能はず。殊に有機體を見るに自然界の諸の過程は相互に結合し合ふものなり。此等の過程若し單獨に行動するときには有機體を滅すに至らん。然かも互に相合する時は全體を維持することを得べし。此等の事實により多くの人思へらく意匠は元來之れに關係なき體系に注入せられ若しくは添加せられたるものならんと。然れどもこは不正當なる抽象に基づく妄見たるのみ。何等目的らしき生産なくして物理的化學的作用の行はるゝ體系敢て想像し得られざるにあらず。

然れども實際の體系に於ては、此の如く結果なきものにあらず、吾人若し法則を以て抽象的の規則となし之れを其の實際の作用及び成果と區別するときは、吾人は唯だ理解に便ならしめんが爲めに複雑なる實有を分晰して之れを多くの要素となすに過ぎざるものなり。然れども之れを以て實有を發生する構成的要素を代表するものと見做すの要なし。然れども此の問題は論理法の形式的及び客觀的の意義に關する問題に立ち入ること極めて深ければ、之れを此に論ずるも益少なかるべし。

以上は意匠の推論に對する世人普通の不信の中に存する誤解の數例なり。然れども此等微細なる枝葉の反對論に拘泥して反つて議論の真相を失する憂あれば吾人が爰に再び本論に立ち歸りて新に歩を進むるも敢て無益の業にあらざるべし。

意匠に關する積極的の推論は、自然界に於ける許多の作用が目的に依りて決定せらるるものなるを示すを以て始めとなす。眼の目的は視ることにありて、耳の目的は聴くことにあり。肺の目的は酸化にありて、生殖器の目的は生命の相續にあり。凡て這般の場合には數多の要素は協力して共同の結果を生ぜしめんとす。而して此等の諸要素が凡て歸向するところの此結果は其の協力の結局原因なり。さればこは目的を以て働くものといはざるべからず。然れども目的は之れを目的として意志せる或る作因の意識に於ける概念としての外働くこと能はざるべし。成果たる目的は結果にして

原因にあらず。故に目的に向つて活動するものあれば豫めこれを思慮する睿智なかるべからずとはその必然の含意若くは條件なりといふべし。

この推論は正當なり。先づ自然界に於て、目的の爲めに働く活動なるものゝ存するや否やの歸納的尋問と、次に如何にしてかゝる終極態は説明せらるべきかの思索的疑問は、之れを睿智に論究するによりて始めて答へらるるものなり。

此には終極態の例證を擧ぐるの必要なし。本題を論ずる多くの著書は、其の例證を擧ぐることに少からざるなり。加之有機界に於いて世界の原由が恰も方案と目的とを有するものゝ如くに進行するは萬人の等しく認むるところなり。思索家は目的論を否定す然かも生物學上の用語は多く目的論的のものなることは人の熟知するところなり。

斯く雜草は根を以て之れを驅除すると雖も、直ちに復たもとの如くに生ずるものなり。有機體中の作用の多くは目的的なり。生ける箇體がその交互作用と又環象との相互作用に於ける作用の多くも、亦た目的的たりとなす。

吾人これを目的論に訴ふるにあらずむば理解することの難きは言ふまでもなく之を陳述することすら爲し難かるべし。されば無神論者も眞理を表白せんが爲めには、己が信ぜざる小説的の言語を使用せざるべからず。吾人は有機體建造上、自然課程に於ける終極態の例證として有名なるジャネ

「の著書の一節を抄録すべし。」

『無数の原因相協力し、孵卵若しくは妊娠てふ不可思議なる方法によりて活ける器械は作らる。そは全然外界より離れたるものなり、然かも之と相調和し、その凡ての部分は外界のある物理的條件に順應するものなり。外界と生ける實在の内部の實驗室とは互に通ずべからざる幔幕によりて隔てらる。然かも亦た精妙なる調和によりて互に一致せられたり。外に光あり。内にこれに順應する視力の器械あり。外に音響あり。内に聴感の器械あり。外に食物あり。内に消化器存するあり。外に土地、空氣、水存して、内にはこれに順應したる運動の器官あるあり。穴倉に閉ぢ込められたる盲人が單にその肢體を動かして以て最も複雑なる錠に適したる鍵を鑄造したりと想像せよ。こは正しく自然が生物を造るの方法たるものなり』と

格別遲疑するの要なくして、吾人は將來を望みて進む即ち先見し準備するが故に、睿智と解せざるべからざる作用の存するものなりとの斷定に達せざるべからざるなり。勿論この推論に對する答辯は、昔より一見目的と考へらるゝも眞實はさにあらず、皆前件より止むを得ずして生ずる結果のみ。決して故意に意匠を運したるものにあらずといふ議論なり。眼は見んがため造られたるものにあらずして、吾人は眼を有するが故に見るなり。生命の傳播は決して目的せられたるものにあらず。只だ生殖作用と器械とが存在するが故に生命を傳播するのみと。この赤裸々なる非意匠論は、

三百代言的の詭辯を弄して善良なる思想を亂さんとするものと同視せられ、詭辯に迷はざる人々は常に之れを指彈せり。されどもこが若し不良なる形而上學や、惑亂したる論理によりて變裝せらるゝ時は、眞らしく見ゆることあるものなり。

然るに有神論的結論は次の理由によりて辯難せらる。

- 一、自然界の機制は此の事實を説明す。吾人は必ずしもその背後に進入するの要なし。
- 二、世界の原由が恰も豫め方案を有するものゝ『如くに』動作するの事實ありとするも、之れを以て直ちに世界の原由が此の方案を有せりと斷ずること能はず。
- 三、人の活動と宇宙の作用との間には類似の存するものなし。人の行爲に目的の存するは吾人の熟知するところなり。然れども吾人は未だ世界製造の經驗を有せざれば、宇宙の作用に就きて何等の論斷をも下すこと能はざるべし。二者の距離甚だ遠くして推論を下すべき知識も亦極めて不十分なりとす。

凡て無神論的反對論は此の三項中に歸すべし。吾人は序を追ひて一々之れを論究せんと欲す。

機制的説明

此の點に就きて吾人はいはんとす。自然界の機制は本體論的の事實にして、疑問の發すべき餘地

なきが如くに假定せられたりと。此の機制的本體論に就ては極めて重大なる疑點の存すること、且つ兎にも角にも此の機制は、自動的の體系にあらずして寧ろ自己以外の勢力の現象的結果に過ぎざるとは疑問の餘地なし。されども吾人は暫く此等の點を論ずるを止め今は機制及び凡て必然の體系は到底目的論的問題を解くこと能はざるべきを摘示せん。此等の問題は自からを指導するところの睿智によりてのみ終局の説明を見出すことを得べし。他の説明は複説に非ずんば、結局この問題を拋棄するものなり。吾人は曩に宇宙の普通法則は特殊なる結果を説明するものにあざざることを摘示したりき。此等の法則は運動の法則と均しく、有らゆる場合に適用せられべきものなれども、その何れをも説明するに足らず。特殊なる結果は特殊なる境遇（法則は此境遇の下に働く）によりて生ずるものなり。故に結果を説明せんがためには、吾人は一般法則の起原を明かにするのみならず、又た恰も方程式の隨意不變數に等しき特殊なる境遇をも説明せざるべからず。然れども此等は如何なる種類を問はず凡ての前件によりて説明せらるべきものにあらず唯だ其の中に結果を含有するところの前件によりてのみ説明せらるゝことを得べし。斯る場合に於ては吾人は結果の特殊なる性質を説明することなく、唯だ之れを一步後へに移したるに過ぎざるなり。充足理由の法則により結果より原因に説き及ぶとき吾人は其結果を如何なる種類の原因又各の原因に歸すること能はず。獨り結果の秘義及び特質を含蓄する原因にのみ之れを歸せざるべからず。此の如くな

れば吾人は到底問題を捕ふること能はざるべし。例令ば吾人Aを-Aに歸す。而して-Aを $2A$ に、かくて $2A$ は N_a に歸せらる。若し N_a 出づる時は終りにA顯はれんとす。然れども其の最も遠端なる N_a に於て吾人は已にAの含意的に又た必然的に含有せらるゝを見るものなり。此の如き體系にては吾人は停止するところを知らず、又た真正なる説明を得ること能はざるべし。Aなる事實の現に存するは-Aが前に存したるに因る。又た-Aの存するは $2A$ が其の前に在りしが故なり。此の如く順次に逆行して終極するところなし。然れども凡て後の秩序及び排置は N_a に含蓄せられたるものなるが故に、吾人が現在の事實たるAを其の前件より演繹するは、先づ此等前件に關する思想を構成して、將に演繹せられんとする事實を此の中に包藏せしむるにあり。固よりAはAの儘にて示されたりとするにあらず、たゞ終には之れに到達せざるべからざる此等前件の中に存すといふのみ。かくて既往に溯り此の連綿たる體系中何れの點を調ぶるもAは必然なる含意として存するを見ん。必然の系體に於ては全く新起點を出すこと、若しくは新形状の急遽に起るが如きことあるべからず。唯だ必然なる含意の開發することあらんのみ。此の如き體系を横斷するときは、如何なる點に於ても凡ての事物が、實際若しくは將成的に存在することを見出さん。而して一見新事實の顯はれたりと思はるゝものも、それは偶然の出來事にあらず。もとより常に存在せざりしを得ざるものなり。到達したるものも、到達せざるものも、殘存したるものも、殘存せざるものも、同様なるものも、新機軸のものも

遺傳したるものも、變種のものも一として永遠の昔より定められざるものなし。此の如く考ふれば世に創始といふべきものなく、凡ての物は自ら中心とせる體系即ち凡てのものを包容し、凡ての物を開發しつゝ永久に流轉する世界の秩序に屬するものなり。此の説は吾人をして甚だ重大なる形而上學の困難に遭遇せしむるならん。然れども吾人は今茲に之れを論ぜざるべし。唯だ論ずべきの點は此の見解は決して目的論の問題を解決するものにあらず。唯だ之れを遷延するもののみ。若し事實そのものが説明を要すとせば其の事實に關する此等の假定說的原由も等しく之れを要すといはざるべからず。何となれば吾人は原理に於て此等の事實を假定的原由の中に齎し行きたるに過ぎざればなり。然れども吾人は全體の上に必然てふ陰影を投じて以て此の事實を蔽ひ、更に之れを研究せんとするの道を妨ぐるものなり。吾人は既に述べし如く、合理的秩序の中に根本的理性を否定する根據を見出すことは道理を顛倒するの甚だしきものなりと、吾人は此にも同様の弊あるを認む。吾人は顛倒せられたる目的論によりて吾人が宇宙的機制の思想を構造するものなり。機制説は單に目的を逆に讀過したるものに過ぎざるなり。然れども必然といふ總念は吾人の思想を眩ましめ、凡ての宇宙的成果の總稱たるに止まる宇宙的機制が其處に含まれたる目的を否定するの理由となされたり。

此の如く機制的若しくは必然に基く各種の説明は全く虛妄なるものにして信を置くに足らざるも

のなり。現在よりして過去を推度するを得ば、また過去に於いて現在を發見せざるべからず。然らざれば吾人は之れを推度すること能はざるなり。吾人若し過去の中に將來を發見することをせずして之れを考へ盡し、又た餘すところなしとせんか、將來は根柢なきものなり。過去によりて之れを説明すること能はざるべし。然れども吾人若し過去に將來を發見せんか、將來を説明する過去は即ち將來を含む過去たるものなり。之れより以上の論理なく又た見解あることなし。同様に結果より原因に及ぶ凡ての推度法に於て、吾人は結果によりて原因の思想を決定せざるべからず。吾人は正しく其の結果によれる原因より多くも又少くも推度すること能はず。吾人若しより多く推度せんか、不當なる處置の誹を免れざるべし。より少く推度せんか、其の結果に對して足らざるもの存せん。Bを説明するAは之れを考へ盡せばBを含むことを知るほどBと關係したるものならざるべからず。然らば説明は事件中に將成的のものとして考察するにあり。而して演繹は此等の將成的のものを實現したるかの如くに思惟するものなり。逆行すれば現實を將成的のものとなし前進すれば將成的のものを現實となすものなり。此の過程の内在的性質に就いては吾人は少しの概念も、經驗をも有せず、單に之れを述ぶるの言語を有するのみ。必然を根本とする議論は常に此の空妄なる言辭を免るゝこと能はざるなり。

こは凡て機制的に思考するより起る難點にして到底解し能はざるものなり。かゝる思考法によれ

ば原因と結果とは、必然なる論理的の均等にして、何物をも増減すること能はざるなり。吾人若し單純に發せんか決して複雑に達すること能はざるべし。複雑に起らんか單純に進むこと能はざるべし。必然は進歩若しくは分化の原理を含み居らざるなり。單純なる必然は、吾人竊に變化を之れに導き入るゝにあらざれば、全く不動なるものとす。一度變化導き入れらるゝ時は、この必然といふ總念は其の内的相互關係の測り得難き多數の必然といふものとなり終るものなり。然れども吾人は多く此の點を論ぜざるべし。唯だ此處には必然といふもの若し存すとせば、そは其の永遠の含意を開發し得るのみなりといはん。そは何等新しき地に到達すること能はず。又は何等新しき行路を開拓すること能はざるものなり。若し何等か一見新しき物と思はるゝ物に達せんかそは常にその體系の中に含まれ居たるものなり。若し何等か分化の顯はるゝことあらんか、そは常に其の中に含蓄せられぬたりしものなり。現在が過去より成長し來りたるはそが過去の中にありたるが故なり。高きが卑きより發生するはそが卑き中に含蓄せられたればなり。開發して尨雜となるところの同質のもののは初めより陰然尨雜のものたらざるべからざるなり。開發中に顯はるゝ尨雜は決して本質の新たなものにはあらず、そは少くとも將に斯くあるべき可能的のものとして存せしものなり。

斯かる思考法によれば、よし其の根本的概念は批評家の反對するところにあらずとするも（否反對なきにあらざるべし）宇宙又た進歩なるもの存すべからざるなり。

吾人は爰に人の看過し易き點あるが爲めに、此の事に就て注意を促さんとす。其の看過の重要なものは言語によりて單純作用を施し以て事物が實に單純にせられたりと考へ違ひを爲すにあり。事物の複雑、多數、差異も其の部類なる言語の單純と同一によりて消滅せられ、事物自らが單純及た統一せられたりと妄想することあるものなり。此の如くにして吾人は物質及び勢力といふ抽象名辭を作り、是れによりて物質的事物と勢力との特色と差異とを消滅せしむ。こは概念の唯一と單純となれども後には眞實なる存在の唯一と單純とに考へ誤まるるに至る。此の純然たる言語の作用によりて論理的抽象の最後の言語名辭が眞實なる存在の最初にして又た固有なる形式と誤解せらるゝに至り、此の問題は表面のみは恰も單純なるものとせられたるが如く見ゆるものなり。單純にして同質なる物質と勢力なるものゝ存ぜざること論なし、されど若し茲に本體的なる實有存在すとせば、そは無數なる個體の存在なり。而して各自は夫々特種なる勢力と法則及び關係を有し然かも交互關係して此の廣大なる全體の中に各自の分を爲すものたらざるべからず。されどこの問題は既に述べし如く謬れる分類によりて虚妄なる單純作用を装へるものなれば其の驚嘆に値する自然の妙工を見ること能はざるなり。根本的概念たる物質と勢力とは單なる實在と原因性との外、何等の内容をも有するものにあらざれば之れに關して疑問を發し、若しくは驚愕を生ぜしむるが如き何物をも有せざるなり。固より物質と勢力とは獨り自から作用するが如くに見ゆ。されど吾人一度物質と

勢力との不滅を熟思せんか、吾人はその常に、獨自に進行するものなるや否やを疑ふものなり。少なくとも凡ての物理的事實は物質と勢力との特殊限定たるに過ぎざれば、往々にして此の論理的の從屬を以て本體論の含意なりと誤解することあるものなり。

此の迷謬は言語が概して略記法の性質たることを忘るゝによりて、其の極に達するものなり。吾人は象徴によりて思考し、只だ必要なるだけその思想を填充するものなり。されば吾人が結果を歸せしむる原因も漠然たる思考の方法に依りて考へらるゝなり。かるが故に速記的象徴的思考法と異り具體的十全なる思考法によれば、吾人は機制的必然の説を唱ふる限り、決して複雑なるものより單純なるものに、若しくは單純なるものより複雑なるものにと逸出することを得ず。又た論理學的の手工によりて此の問題を簡易ならしむること能はざること看過し易きものなり。古來單純無意義の或る原始状態より世界を演繹推論せんことを務めたるものありしかども畢竟するに一として此の眞理の看過に基かざるものなし。不定、不齊合、不分化の同質を以て始むることは、そが物質なると否とに拘らず到底論理上の惑たるを免れざるなり。

され此の惑に左右せられて、吾人は其の過程を解説し得べしとさへ思ふものなり。吾人は吾人が宇宙の由來を尋ねて星霧の如き一見同質なる状態に達す。而して渾沌たる無形の物體は開發して一定の組織ありて、恰も目的を有するに似たる結果を生ぜざるを得ずと結論す。吾人が根源に溯る

とき其の末なる結果に一定の秩序あるを忘れて吾人は全く意味もなく、秩序もなき境界に達し得たりと想像す。斯くして又た漸く前進して原因より結果單純より複雑に至るに當り、忽ち一定の組織ある結果を記憶し、之れを一の演繹と見做すに至る。是の故に星霧説及び自然淘汰の説は、試験と不適排除の方法による一種の機制的必然に依りて、目的なき行爲より目的を起せるものなることを示すものなりと主張せられたり。然れどもこれ全く充足理由の原理に背けることにして覺官に取りて不定なること、理性に取りて不定なること、を混淆せりと言はざるべからず。一樣に見ゆる凡ての同質のものも實際は決して一樣なるものにあらざるなり。

差異の全體系は其の中に含まるゝものなり。其の渾沌無形の狀と思はれしは、蓋し覺官と想像との然らしめしのみ。正しくこれを理解したらんには、法則の行はるゝこと古今異なることなく普遍的にして嚴密なるものなり。此の點に於て無神論は常に偶然と必然との間に動搖して奇態を呈せり。時としては萬物全く限定せられたりとなすが如く然かも一たび意匠論出づるときは忽ち不定限の要素現はる。何等語るの價值あるものを含まざる渾沌界、若しくは睿智ある原因を要せざる程に下等なりし存在物の發端は何時となく議論の中に紛れ入りたり。

其は下劣なるが爲めに疑問ともならず、又た不思議と思はるゝこともなし。不定なるが故に隱然問題を假定して以て目的論に對し匿證伴争を事とせるものとも見えず。斯くしてよくも人の心理的

作用の法則を忘るゝことを僥倖し、必然といふ魔の杖を揮ひ無を變じて萬物を説明する一種の有たらしめたり。『存在の條件』より立論する議論も亦た無限なる時間に於ては、諸種の配合を試み盡くして、又た遺すところなかるべきものなれば、現在の秩序に偶然會合したるものならざるべからずと論ずるが如き、更に昔風の妄見なれども、畢竟するに同一の妄想、議論の根柢に伏在するものなり。科學的方法、現に此の種の妄見の陳腐なることを明にしたれば、此の如き議論の淺薄なると別に之れを論ずるの要なかるべし。これ思想が自らの目的と方法とを解せずして、盲目的に事物の真相を模索しつゝありし時代の遺物なりと見做さざるべからず。必然なる含意以外に何物をも存すること能はず、凡て其他のものは出來得べからざることなり。故に現今の秩序をよくも偶然に發出せしめたりとする不定限なる時期なるもの曾て存したることなし。此の種の總念は機制的推理の基となす定命論とは到底兩立すること能はざるなり。機制といへば其の原料は後に生ずべき凡てのものを含蓄するものなり。時が如何程永くとも又た自然淘汰、適種生存の法世に存すと雖も事物の最初の排置中に既に全く豫定せられざりしものは何物をも生出せらるゝこと能はざるなり。

此等の言語と象徴的思考との誤れる單純作用は、常に此の問題の中に入り來りて具體的問題の難解なる複雑と、吾人が説明の單に文字の上に止まれる空虚なるものなることを隱蔽するものなり。吾人は問題を具體的に考查することを爲さずして單に一般的に事物と勢力とに歸せしむるものなり。

然れども吾人若し此の問題を考一考すれば吾人は其の理論の唯だ重複するのみにて何等進歩を見ざるのみならず吾人の用ふる名辭は之れに相當する概念の存せざることを覺るに至るべし。吾人若し具體的に考ふれば、たとひ物質と勢力とを以て論理學的、計算器以上のものとするもその實有なるものは無限に複雑なる關係の秩序中に包含せられたる數多の元素と、その數多なる活動の形式的概念となるに過ぎざるなり。凡て此等の要素は自らに就て、若しくは交互の關係に就て若しくは如何なる法則に就ても、何等知覺することなく然かも物理的、化學的構造的有機的方法に従ひて斷えず相互に生じ來る變化に順應して非常なる變化と至要なる調和とを具へたる事物の秩序ある系體を生起し、又た之れを、維持せざるべからず。斯かる重複的なる説明の外に、吾人は機制的の議論を表白する他の方法を知らざるなり。吾人若し他の方法を試みんか、吾人は遂に言語を弄し抽象を事とする弊に陥らんのみ。

請ふ之れを次に示さん。動的に考へたる機制的の體系には二個の要素を有す。即ち空間的變化と結合との體系と之れを生起せしむる動的體系とこれなり。前者は何物をも説明することなく、寧ろ自ら問題となるものなり。後者は凡ての表象と具體的概念とを輕視するものなり。元素若し有機的に結合するとせんか、そはあらゆる複雑なる結合を爲す有機的諸勢力の在所たらざるべからず。吾人一たび概括の誤謬を捨て、此の問題を具體的に又た詳細に考察せんか、問題は紛糾複雑のもの

にして到底解決し難きものなるを發見するに至らん、吾人は空間的の結合なるものをば想像し得べし。執意的知的原因性は之を経験し得べし、然れども前者より以上のもの後者より以下なるものも吾人が發見し能はざるところなり。吾人は之れを空間中に見ること能はず。又た之れを意識中に發見することを得ざるなり。斯かるものは唯だ抽象的の假作にして眞に實在するものにあらざるなり。吾人は空間的配置と變化とに對しては十分なる理由存せざるべからずとする堅實なる確信を有す。而して其の理由は吾人何の造作もなく之れを假定の元素中に置く、而して其の理由が果して十分なるべきや否やは、之れを不問に附したりき。凡て此等の事は全く明なり、何となれば吾人は暗に空間中の元素の外何等他の作用なきことを假定し、又た元素に就いても何等秘義なるものなかるべしと想像すればなり。

吾人若し機關士を有せずして然かも機關士の指揮の下にあるかの如く機關車を支持し一發車の際鐘を鳴らし、踏切に於て汽笛を鳴らし、下り坂にブレーキをかけ、豫定の停車場に停車し、信號に注意し避線を待ち、時間の損失を回復する等の如きを爲す機關車の建造を計畫したりとせんか。吾人は此の種の機關車を作る事が必要とすることが、直ちに此の種のもが出来上るべしといふ十分なる解決とはならざるべし。これ或は十分ならん、然かも具體的には「此の種」の總念を聊かにても形成し得るや否やを尋究するを要す。如上の場合に適合するものは唯だ機關士あるのみ。若し機

關車が見ゆる指導者なくして如上の如く汽走せりとせんか。機關車の「性質」能くこれを爲さしむるといへばとて見えざる機關士の存在すといふ暗示に對する答たること能はざるべし。何となれば吾人は又た此の「性質」の如何なるものなるかを知ること能はざればなり。言辭は之れを用ひ得べし。然れども觀念は之れを有すること能はざるなり、かの「此の種」と此の性質とが不可解のものなる如く、物質界の物力論も亦た其の積極的概念に至りては不可解のものたらざるべからず。そは純然たる言辭上のことのみ。形式的には多少正確なるもの存せん。然かも具體的の意義に至りては空虚なるを免れざるべし。

こが眞正の解釋は意志的の原因性に求めざるべからず。其の他の解釋法は全く虚偽として之れを排せざるべからず。カントを参照せんか意義自から明瞭を加ふるに至らん、彼曰く「範疇は現實若しくは可能性なる經驗の範圍以外に應用すること能はず」と、若しこれを應用したらんか吾人は空虚なる抽象の言辭を紛雜せしむるに過ぎざるのみと。此の點に於て範疇は文典上の一般的形式なり。然かも自らに就ては何も語るところなし。主題の事柄は兩者以外より來らざるべからずと。經驗若し適當に定義せられんか、此の説は慥に眞なりといふべし。實に範疇の意味は形而上學の示す如く獨り睿智の活ける自己經驗の中にのみ表はるゝものなり。こゝにその唯一の具體的實有は發見せらるゝものなり。

こは特に因果の力的範疇に於て然りとなす。之れを語るは易し。而して範疇は形式的必要なるものなるが故に此の場合吾人は或る實際の概念を有すと妄想し易きものなり。されども吾人一たび吾人が心中に入りて省みんか、概念はたゞ吾人が經驗を行ふ形態たる意志の形態下のみ實現せらるゝことを發見せむ。これ以外には吾人は單に内容を有せざる又た内容を有し得ざる思想の空虚なる形式を有するのみ。吾人若し望まば悟性の描寫し難き總念に就て語るを得ん、然れども之れを空間の形態に描くこと能はず。又たこれを自己の經驗に於て實現すること能はざる此等の總念は、單に妄想たるに止り決して、適當なる總念にあらざること明なり。原因及び根柢は存せざるべからず。然れども形而上學は能動的の睿智のみ、獨り實際の原因若しくは根柢たるを得となす。物理的の物力論は形式的數學關係の一部を除くの外、何等積極的内容を有することなく純然たる夢想に過ぎざるなり。此の事實は普通人の疑點に上らざるものなるが故に、物理學的の思辯家は、通俗形式的數學の概念を取るか、或は物理的原因の全眼目を不可知的のものとして全然放棄するか、兩者の間を往來するものゝ如し。

無神論的推量に於ける此等論理的妄却に加ふるに、吾人は秩序に基く推論中に言及したる如く、形而上の假定をも有するものなり。吾人は現象の最近原因を直接に又た明白に知り、且つ其の物質的にして無智的たることを陰然假定せり。又た此等の原因は少くとも現在は自から作動し、且つ多

分いつも然りしならんと假定せられたり。吾人は最近原因を知り、之れを以て説き明すところの區域益々廣くなり行くが故に、新なる事實に接するとき、之れを描きて更に隔絶せる原因を求むるに及ばず、唯だ己に知れるところの原因に關する總念を擴充するを要するのみとす。然れども物質の力を限定することは吾人の考にあらず。其の爲すところを観察するにあらずんば如何にして物質の力を知り得んやと。此の説は二個の妄想を藏す。第一吾人は直接の知覺を以て原因を知ると假定し、第二に此等原因の性質は秘密なると同時に又た知り得べきものなりと假定するものなり。之れを秘密なりといふ、吾人は其のなすところを研究して之れを明白にせんとすればなり。之れを知り得べきものとなすは、物質といふ語は素より睿智を除外するところの意義を含むを以てなり。此の如き大なる謙遜と没我の精神とを示し且つ極めて嚴正なる論理の風體を顯はしつゝ、吾人は唯た物的基礎の上に思想の組織を築かんとし而して最も看過し易き手細工を以て自らを弄しつゝあるを覺らざるなり。

現象の原因は直接に知らるゝものなりといふ假定の妄なるは吾人の既に論述したるが如し。原因は見るべきものにあらず。其の性質は思索的推論に依るものなり。又た例令物質的の元素をして最近の原因たらしめざるべからずとするも吾人は之れを獨立のものと見做を得ず。其の法則及び性質は凡て絶對なる世界の原由に依存するものなることも、吾人既に之れを論じたり。此の故に吾人は

機制的法則に準據して作用するものの系體を以て安んずること能はず。其の背後に進み之れを通じて自己の作用を行ふ或る物に達せざるべからず。機制的系體は終局にして自足的のものにあらず。唯だ世界の原由が自から働き若しくは物を働かしむるところの方法を表示するのみ。吾人若し何故に此の如く働くかと問はんか吾人は之れを自ら指導するところの智力なりと見做して、其の目的是れその理由なりといふか、然らざれば世界の原由其の物の中に漠然たる必然の理由ありと假定し、これ然らざるを得ざるが故に然るのみといはざるべからざるなり。吾人は之れを搜索する時は、固より必然なるものを發見すること能はず。然れども吾人は之れを假定し得るなり。而して假定したる必然は無論適當なるものなるべし。何となればそれは事實自らの必然なればなり。吾人は必然より何物をも引き出すことなし。唯だ事實を必然と稱するのみ。されば凡ての事明瞭となるものなり。

如上吾人は目的論的問題に關する一切の機制的説明の複説にして又た妄説なるを詳論し稍や重複したるの嫌なきにあらず。種々なる勢力と複雑なる關係とを有し、概して其の物が將に爲さんとするところのものは、微細の點に至るまで、之れを含蓄するが如き元素の大數を與へなば、吾人は其の物が爲し得るところのものを説明し得と言ふものあらば何人も其の言を以て進歩的啓發的なりと考へざるべし。之れと同じく世界の秩序を解釋するに無人格なる實在の内的必然といふものによりて、凡て爲すところのものを爲さざるべからずといへばとて決して説明の助けとなりたるものに

あらざるなり。然れども凡て人の心に訴へざる機制的説明は此の種の性質のものなり。斯かる説明は結果に適する様なる機制を形成し己が入れ置きたるものを引き出すが如きものなり。問題の複雑なることが名辭の單純なるによりて蔽はれ、吾人が第一原理の暗々裡に存する含意が一統といふ觀念に欺かれて忘却せられ全體の説明の空妄なることがこの批評的ならざる獨斷説に依りて隠され吾人はたやすく御定まり文句なる不定不齊合なる同質のものより望ましき定限あり齊合ある老雜に進むなり——此の文句も亦た矛盾の巢窟たるを失はず。

目的論的問題に對する説明が睿知の存在を信ずるか若しくは何等斯かるもの、存在を信ぜざるか、兩者の一に居りしことは、古より批評的讀者の熟知せるところなり。されば現今の進化論が少しも此の結論に影響せざりしことを示さんとするは、聊かその煩に堪へざるの感なきにしもあらず。此は論理上さることながら、普通人の考へには然らざるなり。されば吾人は爰に聊か此の點を論ぜんと欲す。誤謬の生ずる源は例によりて思想の混亂によるものなり。

進 化

進化論が一時有神的信仰を攪亂したりしことは決して怪むに足らざるなり。批評的の頭腦を有せざるものは、一の教理と其の教理を考ふる特種の様式とを混同するものなり。ある教理に對し新概

念を作るの必要發するの時は、彼等は其の教理自らが既に廢れたるものと考ふるものなり。教理そのものと之れに關する傳承的概念との區別を明にし、新概念は反つて舊思想に勝りてよく其の教理を説明するものなるを覺り、此の新想法を自ら採用するに至るまでには歲月と熟慮とを要するものなり。こは實に進化論の例によりて明なり。進化論一度起りしより、目的の實現せらるゝ方法に關して新概念を作らざるべからずといふ必要生じたり。然かもこは目的の否定なるかの如く見えたり。又た自然作用の時間をして不無限に長からしめたるが故に、人多くこは全く目的に關する傳承的證明を失ひたるものとなせり。何となれば吾人が既に述べし如く目的の歸納的證明は、首として多數の活動と作因とが、共通の目的に向ひて輻合するにあるものなれば、若し此の輻合が遲緩にして又た複雑なるときは吾人は往々目的に對する明確なる印象を見失ふものなり。然かもこは吾人が生命の短きと吾人が智力の遠きに達せざるに因るものなり。事實は永き時代の間忠實堅確に動作する目的は、一日にして實現せらるゝ目的よりも、更に印象深きものなり。然れども思慮淺き者の此事實を解するに至るは時日を要す。さればこそ多くの疑問と不安とは生ずるものなれ。之れに加ふるに普通に解せられたる進化論は、多く誤れる論理學と形而上學とに依るものにして之れを信ずる者も信ぜざる者も、等しく之れを唯物説、無神論の新形なりと爲すもの多し。

幸にも反省的思想の進歩は、斯かる状態を一變して此の教理を不安と誤解との地より救ひたり。

先づ進化は宇宙的定式として二種の異なる意義を有し得ることを知る。そは進化したりしとする事實の起原と歴史との記述なり。而してそは又た斯る種の記述に加ふるに其の事實の原因に關する説たり得るものなり。換言すればそは現象的起原と發達との順序を記述するものなり。而してそは又たかゝる發達を生ぜしむる形而上的原因の説たり得るものなり。前者は科學的の意義に於ける進化論にして、後者は形而上學的學說なり。科學的の意義によれば進化論なるものは支配する法則にあらざり又た生産する原因にもあらずして、そは單に現象界の秩序を述ぶるに過ぎざるもの、即ち觀察者が此の説を眞なりと定め、若し宇宙の最も單純なる状態より今に至るまで、各階級を通じたる宇宙的運動を觀察し得たりとすると、其の觀察したるところのものを陳述するものなり。そは方法を述ぶるものにして原因を述ぶるものにあらず。されば此の意義に於ける進化に關して全然同説を持つるもその形而上學的解釋に至りては全く相調和せざるとあり得べきは明なることなり。かゝる場合には詮するところ科學的の異なる見解に非ずして、寧ろ哲學者の爭論たるものなり。理論家は事實に於て一致す。然かもその事實を解釋するや、各異なる形而上學的の考案を以てするものなり。かゝる事情なればこそ或る思想家は進化論を以て、信仰の確實なる聲援なりとなし。或る者は反つて之れを以て無神論を賛ぐるものなりとする所以なれ。

淺薄なる思想を有するものが惑に陥る重なる原因は普遍に關する誤謬是れなり。これが爲め進化

論に關する文書の大部分は複雑を氣儘に單純なるものに還元せしめ、又た單純を複雑に進化せしむるに至りたるものなり。生物界に於て此の誤謬は更に花やかなる混亂を來さしめたり。茲には注意は全く種の上に集められたり。種は變化するものとせられたれば前なる低き種は後なる高き種を生じたりとの妄想を起したり。高きものは低きものによりて生ぜしめられたれば、高きものも結局眞に高きにあらず。實質は低きものと等しきものなり。されば人間は化成即ち進化の能力によりて猿より生じたりと雖も、人間は猿に起原するものなれば事實猿の種たりしなり。

此の問題に就いては吾人は文字の爲めに迷妄に陥ること明なり。實際には種とは多少等しき個體の一團に過ぎざるものにして、又た其の個體より離れたるものにはあらざるなり。種の化成とは産出系統線を辿りて新部類を形成する變種の個體の産出を意味するに過ぎざりしなり。斯かる場合の唯一單純なる事實は個體を生ずるところの勢力は、漸次複雑に進む上進の度合に應じて各個體を排列せしめ得べき方法によりて之を生ずることなり。然れども斯かる事實には何等種々の個體若しくは高き形態と低き形態を見分くるが如きことなく、寧ろ吾人が分類の體系が相關的のものたることを暗示するものなり。吾人が論理學上の細工を離れんか個體と生殖の作用により昂進の度に準じ之れを分類し得べき方法を以てこれを生出する其の勢力とを以て事實となす。其の他は吾人が心の影なり。形而上學は生産力を世界の原由そのものとなすなり。而して認識論は吾人の分類は何物を

も生ぜざることを示せり。そは同一をも作ることなく、差異をも亡ぼすことなし。吾人若し此の見解を常に腦裡に止めんか、夫の進化の教理をして、其の意義を滅殺し世人の陥り易き煩雜なる惑を除くことを得べし。

屢此の議論に顯はれ又た討論の要點となれる『特別創造』に對する反對論も其の重なる理由は普遍に關する誤謬に因るものなり。凡ての具體的存在は特別なり、又た特別ならざるべからず。特別な事實は之れに對する特別な動作によりてのみ生出せられざるべからず。吾人は此等のものを一の種類の中に集むることを得べし。然れども其等のものが尙別個のものたることは以前と異なるところなし。こは個體と全般ユニバサルとの必然なる對句なり。此の點を看過したればこそ大なる混雜と無用なる爭論の起りたる所以なれ。明晰なる思想を有するものゝ忌むところは、唯だ非論理的の渾沌關係を有せざる事物即ち亂雜に生産せられたる物、全體の計畫に何等の關係なくして生産せられたる事物の觀念是れなり。唯だ無關係無同化といふ意義に於てのみ『特別創造』の思想は反對せらるゝものなり。然れども共存若しくは繼到の多大なる具體的個體を以て全體の計畫を實現せんとするときは、其の働きは獨り多大の動作によりてのみ成就せらるべきものにして、又た其の動作は各其の生産物の特別なが如く、又た特種特別ならざるべからず。此の意味に於て凡て個體は特別な創造たるものなり、若し少しく名目論と實在論との論難の歴史を知り居たらんには、進化論の爭論も大いに

其の度を減少したりしならん。

問題の此の側面を更に説明せんか。そは音曲、例へば合奏の如し。其の後の部分は前の部分より成るものにあらず。又た作られたるものにあらず。さりながら前後兩部とも共通の音樂的概念と法則とに従ひ己れ以外の原因作用に基くものなり。吾人若し或る特殊なる音調に對し之れは特別なる創造なるや否やと問はんか、其の答は見地によりて然りとも否ともいひ得るものなり。そは無關係無法則といふ意味に於て特別なる創造にあらず。何となれば各の音調は全體の計畫に従ふものなればなり。特別なる音調を含む目的と活動とを有せざれば、そは成立せざるべしとの意味に於て特別なる創作なりといふべし。又た斯る創作に於ては何等進歩なるものあることなし、唯だ音樂的概念順次實現せらるゝものなり。前行音調は其の動的結果として後起の音調を含まざるべし。然れども前後兩者の音調は、思想に準じて、作家と演奏者によりて創出せらるゝものなり。彈曲の連結は獨り演奏者の思想意志目的の中に存するものなり。宇宙を現象的と見る概念に向つて、同種の結論を下し得べし。かゝる場合に於て進化は唯だ連綿たる現象の系列以上なる原因作用の連結的發現たるのみ。而して進化の諸程度が其の中に動的關係を有せざるは恰も連續的音調の之れを有せざるが如きものなり。さはあれそは見地によりて各特別なる創造といひ得べきなり。

全體の法則に従ふ點よりすればそは特別にあらず。特種にして具體的事實としてそは特別の創造

なり。現象界に於ては何物も實際進化せざるなり。

唯だ之れを發出する能力に於てのみ、其の連結と意義とを有する現象の連續的生產によりて、思想が順次發現せらるゝものなり。

斯く論じ來れば此の進化論に對する世人の思想が、如何に不明瞭不確實にして、所謂進化の事實なるものも如何に曖昧なるものかを知るべきなり。宇宙の原因作用は宇宙の系列の中において、一時的前件は動的に一時的に後件を決定し之れを生ずるものなるとは無論の事として假定せられたり。此の見解は形而上學の爲めに斷然拒絶せられたり。宇宙の系列の原因は其の系列以外に存するものなり、その員子の關係は論理學的目的論的にして力學的にあらず。かゝる場合には進化の議論は多く消え失するものなり。適者生存、祖性復現、退化及び之れに類する語は單に文字に止まり、決して之れを字義通りに解すべからざるものとなすなり。現象界に於て此等のものが實際生存せざることば音曲に於けるが如し。何となれば現象界に於ては唯だ法則と思想のみ常住するものなればなり。吾人若し思ふが儘に之れを分解せんことを勉めんか、聊か迷惑を感じざるべからず。然れども迷惑を避けんが爲に吾人は意味なき事を語るべからず。さばれ吾人は餘りにかゝる事に心を煩するところなかるべし。

進化論の要點は個躰の性質と之れを生ずる力とに關するものなり。吾人若し此の教理の名目論な

るを想起せんか、多くの難點は自から消失するものあらん。吾人若し進化は常に何物をも爲すことなし其は單に進行の一形式に對する名たるに過ぎざることを記憶せんか、進化の制限に關する問題も凡ての意味を失ふに至らん。問題をして之れ以上のものとなさんか、そは言語と抽象とを實在のものに變ずるか、若しくは動作の秩序を作因そのものと誤解するものなり。

吾人は再び一般の問題に復歸せん。有神論は事實が常に適當に承認せられをらんには、生産の方法若しくは秩序に關し敢て問ふものにあらざることは明白なることなり、そは神的原因を主張することを以て足れりとなし、その動作の方法に至りては之れを経験の發見に委したりき。されば其の關する所は科學的の意味に於ける進化論にあらずして原因論としての進化論なり。此の意味に於て進化論は誤れる論理によりて作られたる、誤まれる形而上學の一片に過ぎざるなり。吾人が機制説の空妄なるを説ける諸點は又た概して此の進化論にも適用し得らるゝものなり。吾人は決して多より一に、一より多に、又た低きより高きに、高きより低きに、又た定的より不定的に、不定的より定的に達すること能はざるなり、吾人若し此を爲しうるかの如く思惟せんか、吾人は普遍に關する誤謬に陥り論理學的手工の單純作用を、具體的事實の秩序なりと誤解したるものに過ぎざるなり。自由の睿智は眞實なる進歩に缺くべからざる要件なり。而して進歩其物が若し世界的本の體無意義なる動搖以上のものならば進歩なる觀念は目的論に關せずして之れを定義すること能はざ

るべし。吾人若し世界運動の本源たる自由の睿智を信ぜざらんか、吾人は吾人の意義を具體的に言ひ顯はす道なし、唯だ漫然として將成態に就き語り得るのみ。吾人の思想明晰ならんか、進化論は創造の方法と歴史とに對する吾人の概念を一變することあるべきも、自然界に於ける目的の議論に對しては何等の變動あることなく、依然として舊の如きや明なり。又た如何に長くとも時間を睿智と同視することは到底不可能の事なり。機制の世界に於ける各事物の全然決定せられ居ること、かゝる世界に於ては原因と結果とは必然に論理學的同一なること、は決して斯かる總念を許すこと能はざるなり。世界の明白なる目的論に對する唯一の説明は蓋し睿智を許すの一あるのみ。固より通俗進化論なるもの、即ちそが宗教的なると非宗教的なるを問はず分化結合により格別の價值なかりし物が進化し始めたりとする説は取るに足らざる迷誤にして到底無學の證たるに過ぎざるなり。そは實に夫の美はしき言葉なるメソポタミアに(大言壯言なり、然かも意義の明瞭ならざるもの)倚頼したるものにさも似たり。

『恰も——に似たり』の反論

意匠論に對する第二の反對論は世界の原由は例令目的を有するもの、如く動作すればとて之れを以て直ちに目的を有すとの證據となすを得ずといふにあり。此の反對論は有神論を反駁するにより

て無神論の地歩を確立するものなりと妄想せる舊説の遺物なり。よし世界の原由其の動作恰も目的存するものゝ如しといへばとてこれを以て直ちに事實目的存在すと證するに足らずとするも、此の事實が之れに目的存せずと證するものあらざるは更に明なりとす。

此の一般の反對論に對する第一の答は、凡て客觀的の智識は恰も云々なるに似たりといふに基くものなりといふにあり。知覺の對象に關し唯心論の疑惑は茲にこれを論ぜざるも、凡て客觀的科學の全體は、物の外見を以て眞實なりと假定するに基けり。吾人はエーテルの存在を知らず。吾人の知るところは唯だ視覺上の現象恰もエーテルの存在を要するが如しといふのみ。吾人は直接原子の存在を知るものにあらず。吾人の知るところは唯だ物質上の現象恰も原子を要するに似たりとするにあるのみ。吾人は火岩石が嘗て溶解し居たるを知らず。唯だ其の狀恰も溶解し居たりしが如しといふのみ。沈澱質の岩が前には水底に淀み居たるものなりといふは、之れが唯だ然か見ゆるを以てのみ。今の陸が海底に沈み居たりしことを知るは唯だ其の形狀より推論してかく信ずるに過ぎざるなり。若し「恰も云々たるに似たり」の反論の原理正當なりとせんか以上の結論は一として寸秒も維持せられ難きものなり。若し自然にして事實智識を有せずして、恰も智識を有するが如きものを生起するを得ば、火若しくは水の力を借らずして、水火の作用に似たる痕跡を示し得る道理なり。有機體體系の假定的必然が有機物を生じて生物となすことを得ば、生物を媒介とせずして直接に化

石をも造り得べきなり。尙一層適當なる語を以ていへば物質の本性が生物を造り得るものとすれば、又た直接に化石をも造り得ざることあるべからず。若し夫れ然らんか化石の遺物を見て世界既往の歴史を察知すること能はざるべし。何となればこれ恰も云々なるに似たりといふ論法によるものにして、反對論者の許さざるところなればなり。化石は如何にして其の所に存するに至りしやと問はゞ、唯だ彼處に在らざるを得ざりしが故に彼處にありといふ以上、別にいふところなしと答ふる外なかるべし。若し質問者にして強ひて其の疑問を質することをせんか吾人は事物を唯だ一種の方法によりて解明し得べしと主張するは背理の極なりといはんと欲す。天地の間生じ得べきもの何ぞ限りあらん。其の中にて吾人は只だ一つを考へ得るのみ。然れども吾人が事物を説明するの小さき方法が實に宇宙の方法ならんとは信じ難きことなり。されば己の見るところを越へて推論を逞うするは極めて輕卒の事なりと。斯かる議論が有神的問題に適用せらるゝ時は、如何にも深奥に且つ公平にして、心の誠實なるを示すものと見做され、然かも他の問題に對しては實に不満足に感ぜらるゝは奇怪なりといふべし。此の心理學及び論理學上の疑點を説明するを待たずして、吾人は有神論の「恰も云々に似たり」といふは、科學上の「恰も云々に似たり」と擇ぶところなきものなることを指摘せんとす。前者を棄て、獨り後者のみ採るべきにあらざるなり。

雖然吾人はなほ此の「恰も云々」の事に就きて明瞭ならざるもの存するを知る。概して吾人が勢

力の何たるを知るは、唯だその爲すところを観察するによりてなり。其の本體は未だ嘗て見られし事なく唯だ其の結果によりて之れを知る心の如きは殊に然り。こは唯だ人の心のみならず、神の心も亦た然りとす。吾人は概して覺官の奴隷たるの弊よりして、直ちに己れ自から隣人の心を見るが如く妄想するの過失を生ず。而して有神論に反對して議論をなすものは、通例人に心の存在を認むるも、自然界には心の存在を認めずとなす。然れども心理學の初歩を知るものは、此の説を斥くるなるべし。吾人は吾人の同胞が心を有すとすは、彼等が心を有するものゝ如く動作するが故なり。即ち其の動作は秩序と目的とを表示するが故なり。之れを略言すれば客觀的睿智を證明するの議論は人間、動物若しくは神の區別なく皆な同様なり。誰か有機物の體系は人の行爲よりも、秩序目的を表示すること少しと言ふものあらんや。故に若し唯だ「恰も之を有するに似たる」のみなりとして自然界に心ありとするを否定せば、人に於ても亦た然せざるべからず。何となれば人に心の存在するを認むるは、唯だ「恰も心あるものゝ如き」動作をなすに因ればなり。吾人は神に關しては、之れを信ずること容易ならざれども、神以外のことに就きては客觀的睿智を認むること驚くべきほど容易なるの觀あるものなり。最も僅少なる徴候によりて人畜又は其の動作の上に智力の現在するを證す。然れども何物もよく自然界の背後に睿智の存することを證すること能はずと、此の奇怪なる論理は、僻見混同の哲理を深く究むることによりて明にするの外道なかるべし。

吾人は既に論述したる點を更に詳しく論ずるを要す。最も極端なる唯心論者と雖も、人格共存を疑はざるなり。此の信念は吾人が年少の時に於て最も強し。此の事實を説明せんが爲めに或は此を本能と稱し、或は更に著しき直觀といふ名稱を與へたり。何故に此の信念が凡ての議論に先だちて、又は之れに反するも絶對的に確實なるものと見做さるゝかといへば、恰好の理由なきにしもあらず。即ち人格共存の確信は道德的活動の主要なる條件なり。此の確信にして弱められなば、恐るべき結果或は之れより生ずるものあらん。然れども此の信念の論理的根據は全く吾人の隣人が恰も睿智を有するものゝ如く行動すといへる事實に在りとなす。

而して熟慮の結果、吾人が睿智存在すと認むべき活動は、甚だ著しきものにあらず。寧ろ有機體が自から之れを爲し得べきものならんと思はるゝが如きものなり。人類の行動が智識ありと思はるゝは、蓋し我等の内に然か解するの理由を存するがためのみ。若し之れを人格より離して考察せんか、そは殆んど奇怪なる意義を呈するものあらん。凡て此等の場合に於て言語の使用すらも、其の結果を究むれば、そは物理的運動の或る形態にして、之れに物理的の説明を與ふるは當然の事なりとす。言語の事に關しても吾人は思想を其の結果の中に求むべからず。思想は吾人自からの附加物に過ぎざるなり。吾人は唯だ薄膜の動搖によりて空氣の波動を生じ、空氣の波動に由りて薄膜又た動搖するを見るのみ。こは筋肉の收縮胸腔の收縮を來たすによりて生ぜらるゝものなり。更に遠く

其の源を推究せんか吾人は神経波動の秘義中に迷ひ入りて、問題の所在を知るに由なからん。吾人は系列の何れの點に於ても心といふものを見ざるなり。吾人は無論理解し得べき結果を有す。然れども無神論者は曰く、『結果の理解すべきは其の原因に睿智の存在するを證明し得ざるなり。加之結果は吾人の之れを推究したる限りに於ては、純然たる機制的の説明を與へ得るものにして、敢て之れを心に歸するの必要なし。吾人が推究する限り、悉く物理的なるものが推究し得ざるところに至れば、忽ち他の或る物に變ずと結論するは、最も奇怪なることにして又た連關法トイフコトニヒトに背くこと甚だしといはざるべからず』と。時計は意匠の結果なり。然れども眼は然らずとは人の常にいふこととなり。こは誤謬なり。吾人が時計師を見ざるは眼を造れるものを見ざると異なることなし。吾人は唯だ一個物理的の有機體が周圍にある物質と共に複雑なる交互作用を爲すと、其の事恰も目的を有するものゝ如く動作することを見るのみ。又た他を見ざるなり。生きて思考する所の工人の存在は、『恰も云々に似たり』より推論して知りたるのみ。然れども自然に於ても亦た作用は目的を有するものゝ如くに進み行けり。其の『恰も云々たるに似たり』といふの點は前者と異なることなしといはざるべからず。若し時計が自らの爲すところを知解する見えざる工人の存在を指示するものとなせば、自然も亦た自らの爲すところを知解する見えざる工人の存在を指示するものといはざるべからず。これを疑へば又た同じく彼をも疑はざるを得ざるなり。吾人若し隣人が知識あり氣に行動する

によりて、實際其の知識を有するを覺知すとせば、同一の理由により世界の原由にも 亦た知識ありといはざるを得ざるなり。

然れども吾人は更に一步を進めざるべからず。前節既に論じたる如く吾人若し自然界に心の存在するを疑ふときは、人にも亦た心の存在するを信すること能はざるに至らん。然れども又た熟々之れを考ふるに、自然界を統御するの心なくば、人に於ける統御の心も亦た存在すること能はざるべし。何んとなれば根本的勢力若し盲目的、必然的のものなりとせんか、之れに依存するところのものも亦た悉く必然的のものならざるべからざるなり。此の如き場合に於ては凡ての開発は後より動かさるゝものにして、前より導かるゝものにあらず。思想も感情も此の必然なる開發の中に屬す。さればそは結果にして原因にはあらず。根本的必然は萬事に於てそれを支配すれども聊かもそれによりて其の動作を左右せらるゝことなし。思想は單に思想としては何等の價值をも有せず勢力は思想の條件たる機制的前件によりて動くものにして、思想それ自身を経て動くものにあらず。故に吾人が己れを制御すと想像するも、全く妄想にして之れを斥けざるべからず。されば人生及び其の歴史は心若しくは目的を表示するものにあらず。唯だ萬物を包括せる必然力の過程を表示するのみ。思想と目的とは主觀的の状態として彼處にありしならん。然れども出來事の動的繼到の範圍外に驅逐せられて、恰も後光の如く影の如くに之れに添ふと雖も、何等宇宙的動作に關係すること

なく。思想は此の問題を解明せざるのみか、却つて之れを複雑ならしむるものにして、少しも指導を述べず、更に解釋を要するの點を増すに過ぎざるなり。根本的必然は吾人が謬りて睿智に歸せしむる物理學上の運動及び類集を生ぜざるべからざるのみならず、又た意識的思想及び自制の妄想をも生ぜざるべからず。此の非常の困難なる業は全然人心を否定するによりて僅に免るゝことを得るなり。吾人は唯だ其の指導を必要とするの確信より客觀的の存在を肯定するものなるが故に、此の如く心を否定すること決して難きにあらざるなり。若し此の確信を缺ぐものあらんか客觀的思想を肯定するの理由を有せざるなり。

時計は意匠に因るを知るも、眼の意匠に因るを知らずとの主張は、二個の點に於て維持し難きものなり。第一、吾人は時計の意匠に因るを證すると同様なる證跡の、眼にも亦た存するを見る。第二、眼にして意匠に因らざれば時計も亦た意匠に因らざりしならむ。兩者等しく必然より生ず。思想その過程に伴ふことありとするも之れに對して何等の影響をも與へざるべし。

意匠論は實に吾人が自由なる努力を有すとの意識に其の力を藉り來れり。吾人の經驗によれば、凡そ目的の爲めにする事物の結合は、先づ概念に存し、而して此の概念はやがて吾人が動作の規準となるとき獨り吾人の經驗中に上り來るものなり。斯くて吾人は何れの場合にても、一見目的の爲めなりと思はるゝ配合の存するを發見するときは、自己の經驗上、缺ぐべからざる條件なりと考ふ

る先在の概念及び自決力を之れに附け添ふるものなり。必然を主とする見解を以てすれば到底目的論の問題に答ふることは能はざることは吾人の既に論ぜし如し。此の如き説にありては此等の目的論の問題は論理上提出せらるべきものに非ざること亦た明かなり。此の如き問を發するは、物が現在の有様より他の有様にて有り得べきを含蓄するものなり、従つて凡ての存在は全然必然に決定せられたりとする説を否定するものなり。萬物はかく必然に決定せられたるものなりと信ぜんか——物は何故かくあるかの理由を問ふは、恰も直線は何故に二點の間に於ける最も近き距離なるかと問ふに異ならざるなり。必然と目的論との矛盾を明に認めたるものは、有名なる必然論者中獨り彼のスピノザあるのみ。多くの必然論者は此のスピノザの如き洞察と目的論上の渴望を満足せんと欲する機制的説明との間に往來したりき。此の如き自家撞着は、宇宙的必然論が稍や論理に合せざるものなることを示すに足らん。機制的議論の反駁に於て吾人は既にその最良の説も尙ほ空妄にして吾人に明確なる見解を與ふるものにあらざることを發見したるものなり。而して吾人は今此の議論の原理を徹底せしめんか吾人は懷疑説と又た神の心とを否定するに止まらず終には人の心の存在をも否定せずんば止まざるに至るべきを知るに至れり。

此の結果は又た無神論の依て以て立てる自然的思想の思考法が全く淺薄なることを示すものなり。思想淺薄にして些の批評を用ひざるときは時空の現象を以て覺官によりて表示せられたる自足

の事實となし、又た何等疑問を挟むの餘地なしと考ふるに至るは自然の勢なり、かくして曰く、「自然」は心若しくは目的なるものを有せず、唯だ機制的に動くのみと。此の意味に於ける「自然」は神を解せざると共に又た人をも解せざるを認知するに至りて、稍吾人の驚きを和かしむ。かゝる事實は唯だ自然論といふ悪魔に憑かれて批評的思想を不可能ならしむる場合を除くの外、議論をして全く害なからしむるものなり、又た此の「自然」は實に架空的のものにして感覺論者の一偶像に過ぎざるを覺るに至つて吾人の安心は其の極に達したるものなり。

第三の反對論は人の行爲と宇宙的作用とは其の差著しく大にして前者の例を以て後者を斷ずることを許さずといふにあり。然かもこは單に立派なる言葉を以て人を脅すに過ぎざるものなり。凡て吾人の知識することは人の睿智に普遍的なるもの存しあらゆる宇宙の實有に對して、人智の法則の妥當なるを豫想せしむるものなり。されども此の事實を看過して智力を測るに、其の物理的伴隨物に依らんとするは、人の屢陥り易き弊たるなり。固より人體と吾人の地球とは、かの廣大なる天の群星に比せんか其微力なること言語に絶せん。さればかゝる物理界の廣大なる爲めに心は其の合理性を放棄せざるべからずと結論するものゝ如し。されどもかゝる議論に動かさるゝものは獨り受動的の心を有する者のみ。かゝる反對論は畢竟するに認識論に反するものにして、その有神論に反對するは間接の事なり。眞の認識論は全宇宙に對して思想の確實性を假定せざるべからず。而して有

神論は單にこの假定の含意に過ぎざるもののみ。有神論は理解せらるゝ結果より睿智なる原因に論及す。合理的にして理解せらるゝ作用は、理性と知識とに因るものなりとせらる。容積の大小は此の推論の妥當性に對して何等の影響を有せざるなり。時間と空間とに於ける廣大といふことのみは、決して論理の法則を變化せしむるの力なきものなり。吾人若し之れを否定せんか、そは恰も數の法則は少數に對しては確實性を失はざるも、大數に向つては其の法則を亂すといふが如きものなり。客觀的なる人の行爲には知識を有すれども宇宙的作用には之れを有せずといふは誤謬なり。人の行爲には理會するを得べき性質あるによりて睿智の存在を示すと雖も宇宙的作用に於ては、同じく理解すべき理を備ふるにも拘らず、之れを以て睿智の存在を示すことなしといふが如きは、理論にあらざりて我儘なる見解に過ぎざるなり。又た若し人の未だ發見せざる多くの超越的能力ありて、其中何れ的能力も能く此等の結果を生じ得べけんといはゞこは空漠たる想像に耽らんが爲めに、理性を棄つるの不條理に陥らんとするものと謂はざるべからず。

凡て此等考察の結果世界の原由唯一なること明にせられたる以上は、意匠論に依りて人に心の存在するを證するよりも更に明確に自然界に心の存在するを證し得と主張するものなり。此の二者は共に立ち又た共に倒るゝものなり。

目的らしき結合物と自然界の作用とは、吾人之れが解決を求むるを以て正當なりとする問題とな

し得べきや否やは、各自の判断に委すべきなり。吾人は唯だ吾人若し之れが解決を試みんと欲せんかこは獨り睿智の存在を信ずるに於てのみ之れを發見し得べしといはんと欲す。之れを以て偶然なりとするは、合理的推論のあらゆる原理に適はざることなり。法則と機制とによりて之れを説明せんとするは複説たるのみ。無神論的の解釋は何等積極的の價値を有せざるべし、之れを批評的に研究するときは無神論の空妄なること指一たび水泡に觸るる時は、忽ちその形を失ふが如きものなり。疑問ともすべきものは此の錯亂の本源に關するものなり。

然かもこは吾人既に之れを答へたり。吾人は物質を以て自足的のものとなし次に之れに供するに種々なる勢力を以てせり。かくして宇宙の實在と原因とは具備せられたりと。吾人は次に法則といふ總念の中に秩序と原理とを發見したれば、此の上は何物をも要せざるが如し。概括誤謬によりて、吾人は宇宙の體系を甚だ低く且つ單純なる言葉の中に縮少せしめ、始めより全體の問題に關せざるものゝ如くなし。後には進化といふ文字をして、自由に其の威力を振はしめて、以て宇宙の體系をして進化によりて秩序あるものとなるに至れりとなす。かくして物質、勢力、及び法則の支配は、心の支配の對句とせられ、前者の領分は益々擴張しつゝあるものなり。心とは明確なる實有、物質と勢力とが尙ほ解決し得ざるところのものを説明するに便せる一時の假定説位のものといふが上々なりとせらる。而して物質と勢力とが日々その解明の歩武を進むるに従ひ心は漸次その必要を

感ぜられざるに至るなりと。此の運動は物質と勢力とを以て自足的のものとなさざれば止まざるなり。かくして科學は終にコントの預言を成就せしめ神を國境に連れ出だして、其の暫時の勤勞を謝したる上之れを國外に追放するが如きものとなす。以上は普通無神論の歴史なり。

有限なる睿智に基く推論

世界の原由が睿智を有することを立證する第三の歸納的推論は、有限なる睿智の存在即ち人間の睿智に基くものなり。人間の睿智は吾人のために更に問題を増加するものにて宇宙的睿智の存在を信ずるにあらざれば決して之れを解決すること能はざるべし。

由來無神論者は概して此の問題を看過したるもの、若しくは少くともその深廣なる意義を悟るゝと能はざりしものなり。斯かる思索家は己の思想を物理的の世界に集中して、全く己自身を忘るゝものなり。彼は自ら宇宙に於ける智力を専有すと假定す。然かも此の稀有特殊なる資質は其の根柢を宇宙の中に存せざるべからざること忘れたり。何となれば人と心とは宇宙の一部分と其結果として之れを顧みざる説明は、蓋し其の最大奇觀の一を忘失せるものなればなり。かくして問題は生ず。如何に吾人は意識ある者を意識なきものより、睿智あるものを睿智なきものより、目的を有するものを目的なきものより、自由を必然より引き出し得るか。心理學は斯かる問題の解決

を以て望なきものとなす。蓋し之れを解明するの道は天下に存せざるべし。たゞこれありとするは蓋し文字上の細工に過ぎざるなり。無意識なるもの又は無意識の作用を解剖したりとて、其の紛糾錯雜の如何なる點に於ても、意識と思想との現出せざるべからざることを示し得ること能はざるべし。之れに反して吾人は物理的の事物或は作用を明確に認識すればするほど、無意識のものより有意識のものに移り行くことの、到底不可能なることを明にするものなり。此の理を明にしたるが爲めに近代の學者は兩面の^{サブスタンス}本體といふものを案出するに至れり。此の見地は未だ獨立せる創造的睿智を有する者の存在を肯定するに至らずと雖も、睿智を以て世界原由の原始要素の一たることを主張するものたるは疑なし。此の見解の形而上學的立場と論理とは吾人聊か疑なき能はずと雖も然かも睿智なきものより睿智あるものゝ存在を解釋することの不可能なることを結論する點は、蓋し正當の事なりといふべし。之れを解し得となすものは唯だ文字の上に止まるのみ。

而してこは困難の始めたるに過ぎず。よしや物質的機制と心性との間に存する性質上の間隔は之れを打ち越えたりとするも吾人は尙ほ知識と其の複雑なる作用とを解釋せざるべからざるなり。

吾人は單に心意の状態の依つて以つて生ずる原因を解せざるべからざるのみならず、又た眞の思想、換言すれば物理的の環象を眞實に再現せしむるところの思想の起原を解せざるべからず。これに加ふるに又た誤謬といふ問題をも解決せざるべからざるなり。無神論理論家の此の問題に接する

や、概ね物質界に於ける感覺性に對しては或る根柢の存在を肯定し、其の他に向つては感覺論に助を籍るを以て足れりとしたりき、されどもこは折れたる葦の助にも劣るものなり。何となれば認識論は感覺論がその期待せられたる働に不適當なるものにして、全く無神論の物理的根柢を破壊するものなることを示すものなればなり。さはれ今暫くは此等の難點を切論することを見合せこととせん。

心理學が此の點に於て啓示するが如く所謂原因と結果との間に通じ難き溝渠の存する外、特別なる論理的困難は、原因を結果に、若しくは結果を原因に同化せしむる機制的系統に於ける必然といふ點より發出するなり。而して以上何れの場合によるも其の教理は落ち付き悪きものなり、何となれば凡て事物が機制的に解釋せられざるべからざるものとすれば人の生命、思想及び行爲は、悉く一切を包有するところの必然なるものの諸種の様態たらざるべからざればなり。されども人は自から色々の目的を立て、之れに準じて決定し得るものなり。されば少くとも人生の部に於ては宇宙の機制も亦た目的を作り、又た之れを實行するものなりといはざるべからず。かく意匠は茲に實際眞實にして又た指導的のものゝ如く見ゆるなり。故に人間を包有するの必要に迫られ、吾人は宇宙的機制は目的と必ずしも相容れざるものにあらざることを許さざるべからず。人類界に目的的行動が行はるゝものとすれば、若し事實がかく斷定するの要あるとき、物理界に於ても亦た目的的に遊動すと稱すと雖も、何等理論上の反對を見出し能はざるべし。此の斷定を避くる唯一の道は、唯

だ目的は吾人が心理的生活を左右すといふ意識の存在を否定するにあるのみ。されども吾人若しその存在を承認する以上は、かの所謂宇宙的機制は計畫を立て、之れを決行するものと見ざるべからず。然り、然らば之れは即ち吾人の心と稱するものと同一のものたらざるべからざるなり。之れに代ふる見解は、吾人が他所に論ずるが如く、吾人の知識を破壊し吾人を懷疑の淵に沈ましむるものなり。

秩序の問題と目的論とは到底無神論の立場より之れを解決すること能はず。有限なる睿智の問題も亦た均しく無神論によりて解決すること能はずは吾人の現に發見したるところなり。

有神論に對する普通の思想は、吾人の既に之れを論じたる如く、歸納的にして又た一般に説明の目的を有するものなり。換言すれば吾人が心の満足する事物の合理的説明を試みんとするものなり。普通の有神論は經驗の事實は、世界の原由を以て睿智あるものと斷定するにあらずんば、到底解明し難きものなりとするものなり。之れに反して普通の無神論者は事實はかく斷定することなくして説明し得るものなりとなす。されども後者の説は根柢を有せざるなり。そは文字上の妄想と論理學上の原理及び解決せんとする問題に對する無識とに基くものなり。問題の真相を解明するときは無神論的の議論は自ら消散したるものなり。されば世界の事物を説明せんと試むるとき、吾人は實に有神論に賛せざるべからず。

認識論に基く推論

如上論じ來りたる推論は、常識實在論に基けるものなり。知識の存在は假定せられ、物質世界の本体の存在は無神論のことと承認せられたり。而して認識論の合理的關係の存することを知らず、無神論の依つて以て立論するところの、事物其の物の存在に對して、形而上學が挟む疑念なるものにも氣付かざるなり。普通人の思想は此の種の研究に近づく事能はざれば、吾人が今までの推論は寧ろ通俗的といふべきなり。然れども論理學の見地より之を見れば、最も有効なる有神論の推論は此の抽象的思索の方面に存するものなり。吾人は漸次これを論ぜんとす。

吾人は先づ此の問題の消極的側面に注意を促さんとす。即ち無神論は智識の問題に對し自殺を行ふものなることを覺るに至らんことを欲するものなり。無神論と一切の必然論とは、凡て思索の基礎たるべき理性の信頼性を破壊するものにして、結局自害的のものたるなり。吾人は次の如く論ぜんとす。

凡て信念は二點より之を觀察するを得べし。即ち原因によりて生出せらるるもの、若しくは理由より演繹せらるるもの是れなり、之れを換言すれば信念は單に或る心理學上の前件に歸すべき心意の出來事たるに留まるか、若しくは論理學上の理由に基ける論理的確信なるかにあり。合理的信念

と背理的信念との異なる點は、前者はこれを正當とするところの理由を有し、後者は慣習、僻見、傳説、我儘等の結果たるにあり、後者の如きは心理的原因は十分なれどを、論理上の理由とすべきものなし。凡て必然と唱ふる説は此の區別を打ち消すものなり。そは信念の原因を與ふるも理由を棄つるものあり其の證は左の如し。

心を機制的に解する説によれば心理的動作といふものあることなし。唯だ心理學上の出來事の存するのみ。結論を引き出す事すらも、心の作用にあらずして、唯だ心に於ける出來事たるのみ。結論は其の前件の理由によりて是認せられず、たゞ其の心理學上の前件によりて強ひらるゝのみ。吾人若し心の本體なるを否定するときは、結論は單に物理的機制的の或る形狀に對する心理上の表號に過ぎざるべし。心を本體的なりとするもなほ必然の勢力に依存するものと見做すときは結論は前に生じたる心理的形狀の結果に過ぎざるべし。何れの場合に於ても理性の自由、自決なる活動に代ふるに、凡て吾人の觀念と其の接續とを決定する物理的若しくは心理的機制的を以てせざるべからず。此の決定は人の意識に於て反省、推論、結論の外形を備ふれども、畢竟するに此等は其の下に存する機制的作用の妄想的表號が、意識に現はれたるに外ならず。されば何物もみな理性によるものなく、悉く物理上若しくは心意上の状態によるのみ。而して此等物理上若しくは心意上の状態は其の結論の變化に伴ひ如何に變化するやも知るべからず。然れども其の結論も亦た如何に變化す

るか測るべからざるなり。

然れども斯かる見解は懷疑説の最も極端なるものなり。凡ての信念は悉く皆な結果となり下りて其の繼續する間は、何れの信念をも問はず凡て皆是なりといはざるべからず。信念の入ると出づるとはその合理性の如何に關せず、唯だ之れが前件の相對的勢力によるものとす。然れどもこの勢力は一の事實にして一種の眞理にあらず。化學的化合物に於て一の元素が他の元素に化するときは、前者必ず後者よりも更に眞なるが故にあらず、唯だその力の勝れるが爲めのみ。心意的の結合に於て心理的の一元素他の一元素に代るときも亦た然り。是れ眞理の問題にあらずして勢力の問題なり。原因結果の關係となれば眞理、誤謬は無意義の區別と成り了るなり。妥當なる合理性は唯だ自由なるものに於てのみ之れを求め得べし。自由に於て始めて眞理、誤謬の意義生じ得べし。合理的の心は其の状態によりて制せられず却つて之れを制すべきものなり。合理的の心は其の自ら形成する觀念を離れて立ち、以て其の觀念の是非を試験し得べきものたらざるべからず。又た慣習聯想の感化に抵抗して、不法なる風俗の惑溺を拒絶するの力を有せざるべからず。そは又た再考するの力及び道理の徹底するまでは結論を差し控ふるの自由を有せざるべからず。之れを爲すこと能はずんば凡ての信念は結果になり下りて合理、非合理、誤謬の區別は自から消失するに至らん。

吾人は他の立脚點より同一の結論に達することを得。必然を基とするの議論は眞理と誤謬とを判

別するの標準を有せず。若し凡ての信念にして真ならず、又た互に矛盾するが故に共に真なることを得ずとせば、誤謬といふものゝ存在するは事實なりとせざるべからず。されども眞理を打ち消さずして、如何にして誤謬の誤謬たることを知り得ん。一方に於ては吾人は心の官能フアカルチが眞理の爲めに作られしこと及び眞理は吾人の意志によりて之れを改變すること能はざるを許さざるを得ず。又た他方に於て吾人は必然的に誤謬中に閉塞せられたるものなりとの説を容るゝこと能はざるべし。何となればかくては吾人の官能は本來信賴し難きものとなればなり。此の困難はたゞ自由といふ總念によりてのみ解釋せらるゝを得べし。吾人若し誠實なる官能を有すとすれば然かも不注意に之を用ひ若しくは故意に之れを亂用することを得る官能とすれば眞理を傷けずして誤謬の存在を説明するを得べし。然らざれば決して之れを説明すること能はざるなり。眞理も誤謬も等しく必然なりとせば、眞理を測る標準自から減ぶるに至るべし。若し多數を以て標準となさんか、何によりて此の多數の正しきを知り得んや。又た誰か多數が常に同一の見解を持すべきを知らんや。種々なる説は過去に於て變化せり。何故に將來に於て變化せざらんや。己に合理的の標準を残さず。よしやこれありとするも之れを用ふるの能力なきものとす。吾人は自己の思想を自から決定する能はず、唯だ獨立の必然之れを決するによりて思想の出入するを見る。されば理性にして多少残るところありとするも知識の成立は全然不可能の事にして甚だしき懷疑説之れに代らざるべからずとの結論に達せざるべからざるなり。

かゝる考へと有神論との關係は明なり。凡て必然説を主張する議論には、合理性を欠ぎ従つて又た知識あることを得ず。無神論はかゝる必然を主張する議論なり。故に自ら自殺的の説たらざるを得ず。

無神論は意識を輕んじ理性を疑ひ、凡て思想及び生活の構造を全く破壊し盡すにあらずんば止まざるものなり。吾人の合理性は有限なる有智者に自由の存するを要求す。然るに此の自由は世界の原由を必然的と見做すところの見解と兩立し難きものなり。

此自由とは其の結論を強ひ付ける力の心に存在すといふにあらず、唯だ豫思したる標準に従つて自己を支配する力ありとの意を含むものゝみ。純然たる氣儘と純然たる必然とは共に理性と一致せざるものなり。意志も之を變更すること能はざる理性の法則人の心に存せざるべからず。又た之れに準じて自己を限定するところの力も存せざるべからず。此兩者は互に離るゝことを得ず。理性の法則は服従を強ふるものにあらず。果して之れを強ふるものとせんか、誤謬の發すべき理由なかるべし。心此の法則を容れ之れに準じて自からを決定するに至らば、吾人は始めて合理的の状態に達したるものなり。

かく觀じ來れば無神論は心の法外人フアクトたるものゝ如し。そはよく人の想像する如く理性と科學との

最後至高の結果にあらずして、寧ろ理性と科學とを破壊するものなり。吾人は之れより認識論に基く議論の積極的方面に移ることゝせん。

前章に於て吾人は凡て客觀的實有の研究は法則及び體系の事實を假定するもの、即ち共通なる秩序の方案の中において各自が全體に對して一般によく齊整せりとの假定に基くものなることを指示したりき。

吾人は次に凡ての研究は此の體系の理會すべく、又合理的なるを假定するものなることを示さんとす。客觀的認識の成立は、世界が合理的のものなりと假定するが故なり。吾人は今此の事實の關係を明にせんと欲するものなり。

人の常識は物質の世界は時間と空間との間に存在し、睿智を全く離るゝものなりとの想像より出發し始むるなり。若し批評を以て之れが判別を下すにあらざれば、如上の見解は自明の眞理にして之れを疑ふものは人智を侮るもの、又た心の輕浮なる者なりとせらる。此の見解は皮相的の考察を爲すに止まるものには、容易に無神論的の推論法に至らしむるものなり。人の思想此の程度にあるときは、世界若しくは自然界は、常にその獨立を宣言せんと欲するものなり。さりながら此の物と勢力との心外なる世界は之れを精査深究するに従ひ全然たる矛盾にあらずんば、極めて疑はしき假説たることを發見するに至るものなり。

思想一たび批評的となるときは、知識に於て根本的に確實なるものは、物質的機制的なる物の本體的存在にあらずして、寧ろ人格の共存、睿智の集團、共通なる經驗の體系なりとす。而して此は思索的演繹の結果にあらずして、動かすべからざる實際的の確實なり。吾人若し自己以外に他の人々の存在するを認むるにあらずんば、又た睿智の法則は凡てに對して等しく確實にして、凡てものは經驗に於て一般に同様なる對象を有するものなりと假定するにあらざれば、吾人は智的生活を送ること能はざるなり。

唯我論は狂暴を極むる背理説なり。凡ての人に對し、同一なる睿智の法則行はるゝことは、人々相互が理解し得る至上の條件なり。而して又た集團の者が經驗を同じうすといふことも、亦た心理的生活に必要なことなり。此等の事は最も深玄なる事實と豫想とにして、深奥なる秘義を含むものなり。若し之れを疑はんか忽ち實際的背理に陥るものなり。

こは又た曾て疑はれたることなし。懷疑家も獨斷家も唯心論者も、又た唯物論者も、實際等しく此等の事實と公準とに一致するものなり。如何なるものが此等以上に存するかとは、蓋し思索の領分にして經驗の與件にあらざるなり。かく共通なる經驗の體系が空間と時間とに於ける物質的機制的形體の體系によりて説明すべきや否やは、思索的問題にして之れを解決せんと欲せば、自然、哲學的思索に訴へざるべからざるなり。されば無神論の起點とする否定することを得ざる確實なる

ものは形而上學的の假説中に求めざるべからず。又た之れによりて試験せられざるべからず。一度此の點を省察するときは無神論の推論に尤もらしく見ゆる幻想的の形狀を除去するに力あるものなり。そは又た數學的機制的抽象をして無上の實有となさしめ、かくして經驗の一切の實有をば悉くこれを否定しよしや之れが實有を許すとすも、そは單に眞實なる實有の「隨伴的現象」たるに過ぎざるものなりとする自然論の朴素的性質のものたるを示すものなり。哲學的思想の歴史は之れに勝る著しき攻撃を示さざるべし、然れども經驗は第一にして法則を與ふるものなれば、經驗を度外視する理論は拋棄せらるべきことを覺るによりて、此の惑を解くを得べし。

又た常識は知識も物と同じく存在すと假定してかゝるものなり。心的發達の初步に於ては知識の事は問題とならず。物は面前に見ゆ。心は當然の事として考ふるものなり。認識の複雑にして不可解の作用及び公準等に就いては思想に凝らざる人にとりては何等の疑ともならざるなり。無神論も此の點に於ては同様にして意識せざる爲めにその最も困難なる點の幾部を免るゝなり。然れども認識論は吾人に示すに物の存在は決して其の物の知識と同一なるものにあらざるを以てす。認識論は物は正しくそが見ゆるが如く存在すとなさんか、其の物の知識は唯だ心がそれ自らの作用によりて、物の内容を思想の上に再現するによつて起るものなることを示すものなり。知識は受動的の心に外より作り上げられて輸入せらるゝものにあらず。心は能動的に自ら内に知識を構成せざるべからざるなり。會話に於て思想は人より人に通過するものにあらず。各自の心は自ら他人の思想を己の爲に構成するものなり。さればこそ其の思想を領解し得るものなれ、固より知識は客觀的に制約せらるゝものなれども、各自の心は自らのために之を構成せざるべからず、かゝる人格と人格との相互の交通を能くし得るには、兩者の心が同型に作られ、同一の法則に支配せられ居ることを豫想せしむるは無論の事なり。一方が他より何物かを得といふは單に形容の言葉に過ぎず。實は各自らの爲めに動作せざるべからざるなり。

こは凡て知識することに就いての事實を示すものなり。物を識るとは其れを考ふることなり。換言すれば物の内容と意義とを眞實に、會得する思想を形成することなり。思想は出來合のまゝ心に入り來るものにあらず。思想は決して心の中に入り得るものにあらざればなり。或る作用を心に起すとき、心は自ら内に世界の理觀と知識とを展開するものなり。此の作用は生理學者の言によれば、何等の型なくして行はれ唯だ或る神經の變動によりて起るものなり。然かも心は直接此の變動を知らず、又た普通何物をも知らざるものなりと。果して然りとせんか、知識を以て受動的の心に印象せられたるもの、若しくは出來合のまゝ心中に入れらるゝものと思ふことの實に愚なることを知るものなり。知識は内より發生するものなり。知識の法則と形式とは主として思想そのものゝ法則と形式たらざるべからず。眞實の意義に於て、心が物を知るには、そは單に心の法則と形式とを、

其の經驗中に又た其の上に置くといふに過ぎざるなり

然れども知識をして眞實ならしめんとせば、思想と物とは同一の法則に支配せられざるべからず、然らずんば心の築き立てたる思想と心外に存在すると想像せられたる物との間に、差錯の存するものあらん。思想は思想自らの言語を語り得るのみ。物も亦た思想の用ふる言語を語るにあらずんば、換言すれば物も思想の形式と型とに投ぜらるゝにあらずんば、吾人に取りて永久に不可解のものたらざるべからず。かゝる場合人類の見地よりすれば、二元論と無神論の説明し得ざる知識の中に含意せられたる調和とを有するものなり。吾人若し物の世界は、事實思想の世界、即ち思想に根ざし思想を表示する世界たることを假定するにあらずんば、吾人は全く不可解の難關に遭遇したるものなり。物は己が像に似せて思想を生じたりとの説は、考究の價値を有せず。何となれば形而上學は其の方面には何等の通ずべき道なきことを示したればなり。

物の世界は思想の世界なりとの結論はよしや吾人は何等の變化なく、單に感官知覺によりて、物を領解するものなりと想像するも、動かすこと能はざるものなり。然れども吾人が客觀的に知ることの多くは、出來上り居るものを受け入るゝにあらずして、寧ろ物の解釋なりとす。感覺に映ずる世界と、思想に顯はるゝ世界とは大に異なるものなり。繪畫を見るに色彩の表面と輪廓とは、感覺にうつると雖も其の意義を解するは思想にあり、書籍を讀むに活字のページは感覺に顯

はる、然かもその意義は思想の上に顯はる。然り獨り思想によりて解せらる。讀書の道を解せざる者は意義を書中に求むるの愚をなすべし。然かも亦た書中に之れを發見すること能はざるによりて眼鏡を用ふるの愚をも演ずべけん。言語も自ら意義を附するにあらずんば何等の意義を有せざるなり。

吾人が世界の知識も亦た然り、感覺に映ずるものと思想に顯はるゝものとは、大なる差を有す。感覺の世界は轉移し、飛走し、連鎖なきものなり。感覺の世界は、思想が合理的原理を携へ來りて之を整へ、解釋するまでは全く不明にして、幻像的の流動か若しくは消散する景色の如きものなり。感覺界も既に明かなるものとなり若しくは吾人が話題となり得るに至らんか、それは既に思想界となりたるものなり。その恒久なるもの、同一なるものといふは思想の産物なり。感覺界が依つて以て定義せられ、鮮明せられたる、複雑なる關係の體系は、思想の産物にして、決して感覺の所爲にあらざるなり。吾人が世界に對する偶發の思想が、依りて以て大に變化せらるゝ科學の深玄なる推度法は、眼や耳のために存するものにあらずして、それは獨り思想の爲めに存するものなり。感覺の世界は常に變ることなし、然れども思想の世界は漸次成長するものなり。科學の世界が甚だしく感覺の世界と異なるところは、天文學者の概念が彼の概念を表示せんとする代數的記號と異なるが如し、かく吾人は複雑なる思想の活動が、知識の中に含まれ居ることを知るものなり。

若し物の世界がそれ自らにより完備せるものとせんか、然らば知識は物界の寫しとも稱すべく、吾人の爲めに之れを正しく再現するところの思想界を築成するものなり。而して此の思想界は合理性の發現として思想自らの中に展開せざるべからざるなり。

されば人の知識の問題は次のものを含むものなり (一) 知り得べき即ち合理的の宇宙 (二) 知るところの人心、(三) 人の思想の範疇と宇宙的實在の諸原理と同一なること (四) 内的と外的とは互に相ひ調整して、心は外的刺撃に對し、其れ自からの性質に準じて反動し、眞に客觀的事實を再現するところの思想を自ら生ずること (五) 人々に於ける合理性の同一たること等是れなり。人の理性は多種にして同一ならずとせんか思想は成立せざるべし。

此等の含意は知識の構成に於て必ず含まざるべからざるものにして、吾人は其等の意義を思考することなくして之れを承認するものなり。然ればそは實に驚嘆の外なきことなり。

茲に何人にとりても驚異すべき事實あり。特に無神論の思索家にとりて然りとす。即ち知らるべきものは、可知的即ち合理的、秩序及び關係の中に存在せざるべからずといふことなり。吾人の理解する世界は思想關係の世界なり。何となれば思想は思想外のものを理解すること能はざればなり。

若しそれ現實の世界が思想の發顯なりとせんか、こは全然可知的のものたるべし。外の世界は内

なる心に類似したる心を通じて存在す。かく物の世界と思想の世界とは並び量らるゝものにして、共に理性の上に建てらるゝものなり。然れども無神論的理想によれば物の世界は何等の思想を有すべきものにあらず、そは凡ての思想を離れ又た凡ての思想を否定し、唯だその機制的の方法によりて存在するのみ。かゝる場合には全然思想を發見するの道もなく、又た智識の設備に至りては更にこれを發見すること難かるべし。明瞭ならざる音響より成る談話はこれを理解すること能はざるべし、何となれば此の中に理解し得べき思想存せざればなり。此の如く此の世界も知る人間が理解し得る思想此の中に存せざらんか、之れを理解すること能はざるべし。物は極めて微少にして又た極めて多數のものなれば或る不可思議なる方法により極めて迅速なる運動を以て知識を生じ自ら知らるゝに至るとの唯物的妄想は、心理學形而上學の初步を解するものゝ容易に之れを斥くところなり。されば物は最も實在的狀態に於て存在せるものにして、吾人は唯だ彼處に存在するものを解し去るのみとの想像に基くときは、物を以て思想の發顯なりとする有神論を以て之れを解釋するにあざれば精密なる二元論と、又た人の思想と、不可思議なる秘密として存すべき宇宙の物との並行論を肯定せざるべからざるなり。思想を物に同化することは心理學も認識論も全然反對するところなり。そは唯だ思想の所産若しくは發現として思想に同化するの道存するのみ。

吾人若し知識の幾許が解釋にして感受レセフシオンにあざるかを記憶するときは、問題は自ら複雑を増すに

至るべし。感覺の事實と思想の事實とを混同する間は、感覺の事實は思想によりて、受動的に反射せられ得るものと、妄想の眞らしき感を抱かしめらるゝものなり。然れども吾人一度感覺中に存するものと、思想中に存するものと並行し難きを知るときは、此の總念は直ちに消失するものなり。再び言語に依るの説明を用ひんか。意味なき談話は單に音響に過ぎず。音響に意義を附するときは始めて談話となるものなり。然れども意義は客觀的音響に存するものにあらず。音聲は單に兩者の心中にのみ存する意義を運搬する媒介物たるに過ぎざるものなり。言語は之れを思想に終らしめんとすれば、思想を以て始めざるべからざるなり。誰にても音響を理解するの不可能なると、又た音響が理解力を生ぜしむるの不可能なることを解するに苦しまざるべし。客觀的の知識をいふも同様の困難存す。

意義は決して感覺の事實に存せざるなり。空間と時間の事實とはそれ自らにては何等の意義を有せず。そは單に意義を言ひ顯はす媒介物に過ぎざるのみ。自然界の知識も亦た言語に於けるが如し。

若し兩端に思想者存せざらんか、自然の作用は解釋すること能はざるべし。自然界は言語にして存在物にあらず。若し自然界がそを超えて存在する思想者の思想を表出するものとせんか吾人は自然界の中に思想を發見し得べきを信じ得べきなり。若しそれ然らずとせんか、凡ての事は朦朧暗黒

たるのみ。

吾人は何等の意義を有せざる音響を解せんと試むるものゝ如きものなり。

形而上學に基ける推論

吾人は本章に於て屢々凡ての思想より離れて、自ら存在とする世界の實在的總念は無神的妄想を生ずる富源なることに言及したりき。吾人は今此の總念の極めて疑はしきものなることを論證せんと欲するものなり。形而上學は認識論に基ける推論を取りて之れを完成するものなり。即ち無神論の依りて以て推論する自存の機制的世界といふ觀念を以て皮相的の思想となし吾人は之れを以て世界も其の問題も了解すること能はざるものなるを示すものなり。

吾人は時間と空間とを以て、或る種の實在なる存在なりとするも、思想の作用なくして理解し得べき世界は。決して此の時空中に存在すること能はずとなす。吾人の既に言ひし如く理解し得べき世界は思想關係と關係を有する物との世界なり。而してかゝるものとして、そのかくあるべき條件として、知識を含むものなり。感覺の世界にては形質は獨り感覺性に於て、又た感覺性の爲めに存在するが如く、諸の關係と關係ある物の世界は單に思想に於て又た思想の爲めに存在するものにして、時間と空間との中のみ存するものにあざるなり。換言すれば理解し得る世界は、意義と思

想内容との世界なり、而してこは世界に睿智の存在せざる時は不可能の事なり。

無教育の人にとりては如上の説は、或は自然の夢想によれる唯心的の調なりとすることあらん。知識は客觀的確實性を有すとは、普通人の思想には正しく確信せらるゝものなり。然れども彼等は此の確信と心外の時空中に於ける塊の如き物の存在とを混同するものなり。これ物の實有を解する他の道を知らざればなり。されども認識論は吾人に示すに、客觀性の究極的意義は吾人の共通なる經驗に於ける物の普遍性若しくは共通の經驗に對する吾人が概念の妥當性にありとなす。かゝる物と概念とは實在にして又た客觀的なり。そは特殊の人に屬して誤謬たるを免れざる個人的の妄想にあらざるなり。然れども此の普遍性は主として經驗中に存するものにして、決して之れを他に求むべからざるは、少しく思考を運らすものゝ明にするところなり。問題は此の經驗の確實なるか眞理なるかにあらずして、寧ろその經驗の内容と位置とにありとなす。此等の諸點を心に留めんか理解し得べき世界は、時間と空間との中に存在すること能はずとの吾人の言は、決して奇とするに足らざるなり。

説明の法少からず、例へば言語の場合の如し。時空中に存する凡ては、時間空間を通じて順次自らを傳播する音響あるのみ。然れども音響は言語にあらず。意義のみ獨り言語たるのみ。而して意義は時空中中に存せず。之れを見、之れを證すること能はず。意義は單に心のために又た心を通じて

存するのみ。又た和樂は何處に存するや。そは時空中に存するものにあらずして、唯だ心の中に存するものなるのみ。感覺性により波動をして音響に變ぜしむるの外、和樂は意識の統一を爲し關係を結ぶ活動によりてのみ存在し得るのみ。此の種の活動なかりせば音響の各側面は各々自らの時空中にありて、結束なく、關係を有せず、決して共通の意識中に結合せらるゝことなかるべし。されば和樂は何處にも存在せざるべし。最も實在的の時空中に發生するものは、和樂を思想より行爲に若しくは一方の心より他方の心に通譯する方法あるのみ。然れども和樂が人々に理解せらるゝものとして存することは、獨り思想に於て、又た思想を通じてのみ然るものなり。音樂の在所は心中にあり。音樂が時空中に存するものと思ふことは不可能の事なり。文學も議論も政府も悉く然らざるはなし。此等のもの一として時空中に即ち心外に存在するものあることなし。議論は單に或は主として耳にのみ屬するものにあらず。そは寧ろ思想の事なりとす。政治の本質たる道義的存在者の執意的相互作用は決して空間中に顯はされ得るものにあらず。されば己の肉眼を以て政治を見んとする人あらんか、他の笑を招くべきものなり。文學も亦た圖書館に存するものにあらず。そは唯だ人の心の中に又た心の爲めに存するものゝみ。或は實證論的の傾向を有するものありて、意義餘りに微弱にして不明なれば、科學の主題となすに足らずと決定し、文字と其の配合が文學の本質なりと主張するものもあらん。斯かる考に左右せられて、彼は文字の種々なる形態と其の共存と繼起と

又た紙質表装等を精細に研究することあらん。而してこは實に文學研究の科學的方法なりと稱するものもやあらん。然れども文學は文學なり紙や表装にあらざるなり。此の如く理解し得る世界は、獨り思想のために又た思想を通じて存在するのみ。時間若しくは空間中に發生し得るものは、其の最善なるものも唯だ思想を轉じて行爲となし又た之れをして有限なる人心に理解せしめ得る運動に過ぎざるのみ。然れども時空的の事實はそれ自らと、又た此の目的の官能とを離れては、決して理解すること能はざるべし。

吾人は又た他の道より同一の結論に達し得ん。

認識論は吾人に示すに、固定したる永遠の思想を通ずるにあらざれば何等のものも心に向つて存在すること能はざるを以てす。何物も一たび發生すれば、夫々の時を経て過ぎ去り、又た起るの望なし。一時的の流出は間斷なく又た無限に分別せられ得るものなり。されば各の出來事は一時的の區分に相當する無限數の出來事に分裂し得べし。而して各極微の増加物も時を経て消失し再び發生することなし。若しこれのみに限らんか、思想も存在も亦た不可能の事たるべけん。而して時間の神は己と己の子孫とを食ひ盡すに至らん。されども心は永遠の思想によりて一時的の流出物を了解し、之れに永久不變の意義を附し、一時的の運動を以て、唯だ其の永在なる思想の表現となすものなり。此の外如何なる説によるとするも吾人はヘラクライトスの流轉説と、知識の全き破滅を免るゝ

こと能はざるべし。然れども此等時間を有せざる觀念は時間的存在に適し難し。そは意義及び合理的内容を表示す。然れどもそは純然たる理想の世界なり。而してこは又た吾人の解釋を要する問題なり。吾人或は觀念は吾人自らの氣儘なる附加物にして、實有と何等至要の關係を有せずといひ得ん。然かもかゝる見解は長く人の承認を續くること能はざるべし。そは恰も吾人は他人の言語若しくは文書に關して觀念を有すと雖も、其の人が觀念を有せしとなす理由を有せずといふに同じ。觀念が自ら必然の關係を有せざる事物の言ひ表はしと、その理會とに向ひて、思想の必要なるべきを言ふは不可能なるべく、又た觀念と必然的の關係を有せざる物が觀念によりて了解せられ得べくもあらざるなり。此等の不可能なる見解に代はるべき唯一の見解は、時空の世界は觀念によれる運動なりとなし、運動の裏面若しくは其の内に觀念の存在すと信ずるにあり。世界はかゝる觀念の権化なりとしてのみ理解し得べく、又た可能なることなり。然れども思想を離れそれ自らとしては決して理解し得べきものにあらざり、又た可能の事にあらざるなり。

かく吾人は又た此の理解し得べき世界は、思想の世界にして、獨り思想によりて、又た思想を通じてのみ存在するものなることを解し得るなり。そは時間と空間との形態によりて顯はれ得ん。然かもそは心外の實有として時空中に存在し能はざるは恰も音樂、文學、言語等と異なることなし。

吾人は一步を觀念論の方面に進めて、時間と空間と、心を離れて適當に存在するものにあらずし

て。單に經驗の形式に過ぎざることを摘示せん。時空は其の間に物が存在し、若しくは要件が発生する實有の何らかにあらずして、單に經驗の一般的形式に過ぎざるのみ。形而上學は吾人に示すに時空を若しこれ以上のものとなさんか、それは背理となり、存在そのものも亦た不可能となることを以てせり。かく空間の果しなく區分せられべきこと、其の凡ての部分の相互の外的關係とは、何物も空間中には本體的の實有として存在することを不可能ならしむ。凡ての物は分裂して其數また定む可らず、凡ての統一と又た凡ての實有は消失し了らん。繼續する瞬間の相互の外的關係は同一の結果を時間の上に来たすものなり。現に繼續して存在するものは、決して存在し得ざるなり。時間その物も存在し得ざるなり。何となれば存在し得るものは單に現在のみにして、然かも其の現在は唯だ過去と將來との分界面たるに過ぎざるなり。されば時間をして本體なりとするも何物も存在すること能はざるべし。此の種の考察は空間と時間とをして、單に經驗の形式となし了らしむることは、形而上學の示すところなり。物は空間と時間との中にあらず。されども經驗は時空の形式を有するものなり。時空の法則は經驗に對しては確實なるもの、然かも之れを経験より抽出して獨立したる存在となさんか、それは背理と不可能となるものなり。

かく時空中に存在する凡てのものは、時空と共に單に現象的存在、即ち唯だ知識のため又た知識を通じて存するのみと解せざるべからざるなり。

眞の存在は時空の形式若しくは意識ある睿智の形式によりて思考せられざるべからず。此の二者の外他の道を有せざるなり、然れども凡ての時空的實在も之れを解剖せんか、現象的存在たるを見るものなり。空間的としてはそれは統一を有すること能はず。時間的としてはそれは統一、同一、恒久性をも有すること能はざるなり。そが有するが如く見ゆる統一、同一、恒久は全く之れを生じ若しくは之れを領會する智力の作用たるに過ぎず。そは時空の尺度が有し得るが如き統一を有す。此の統一は純然たる形式的のものにして心の作用たるものなり。一分若しくは一哩若しくは圓の一度の統一とは何ぞや。空間的ならざる、時間的ならざる物の存在せざる限り、何物も存在すること能はざるべし。睿智は獨り此の要求に應じ得るものなり。形而上學は吾人に示すに能動的睿智のみ獨り實在、統一、因果の眞總念を充すものなるを以てせり。無人格と機制的觀念とによるときは此等の範疇は悉く消失するか、若しくは互に相矛盾するに至るべし。空間的時間的のものは漸次雲散霧消して、無人格的因果も無限に遡源して、終に自ら止るところを知らざるに至るべし。

加ふるに時間中の因果は、原因といふ總念を消失したる、單なる繼到なるものとなりたるか、若しくは過去と現在との分離を防ぐ將成態の總念となり終るべけん。若し此等の間に動的關係存せざらんか、吾人は原由なき生成を信ぜざるべからざるに至り、全く理性を失ふに到るべきなり。論理學も亦た現在を説明すべき過去は、如何にかして現在を包容せざるべからざることを要求する

ものなり。然れども吾人は現在を實際其の儘に過去に持ち運び行く事能はず。これ一切の區別を混淆するものなればなり。されば茲に將成態といふ總念生ずるものなり。現在は過去の中に將成態として存したりしなり。然れども此の總念は無人格的の見地よりすれば、無意義のものたらざるべからず。形而上的現實と區別すべき形而上的將成態が如何なるものなるかは、吾人之れを知ることが能はざるなり。人格存在の見地を取らんか、それは自由なる睿智の可能的決定力と見るべきなり。かくして意義自ら生じ來るべし。然れども無人格的の見地に立たんか、それは單に言辭上の解釋を與ふるに過ぎざる問題の承認に止まるのみ。眞實の解釋は自由なる睿智の存在に求めざるべからず。以上は一時的の條件によりて思考するとき、自ら發出する難點の一二なりとす。

かくして無神論の依りて以て立てる、感覺思想の形而上學の見解は自ら消失すべきなり。その根柢と稱するところのものも、凡て皆心を含むことを假定するか、若しくは活ける睿智の形態の下に於てのみ存在し得べきことを知るに至るべし。固より感覺思想の使用する範疇は、凡て皆形式的に必要なるものなり。然れども其の範疇が感覺の形式に於て現實となり得と考ふるは過たりといふべし。實有、統一、一樣、因果の存せざるべからずとする確信は可なり。然れども此の確信は、以上のものが如何なる形態によりて、成立するかを決するものにあらざるなり。徐に考へんか吾人は以上のものは、獨り睿智の形態によりて、若しくは睿智と關係してのみ存在し得ることを知り得るな

り。吾人若し此の世界を理解し得べき意義を有するものと考へんか、吾人は無上の睿智を以て、獨り世界の原由となすのみならず若し此の睿智なかりせば、世界は不可能なるのみならず、それは全く背理、無意義のものとなり了るべしと爲さざるべからず。意義を有する世界は、心の存在を豫想せしむ。關係の存する體系は睿智が其の發生の源として存在することを含意するものなり。吾人若し世界の原由を考察せんか、吾人は世界が依つて以て存在し、又た其れによりて永久に進み出づる能動的睿智の存在を信ぜざるべからず。世界は神の思想にありて、其の形態と意義とを有し、神の意志にありて其の實有を保つものなり。

吾人が既に説明せし如く、知識の根本的に確實なるものは物質的、機制的事物の本體的存在にあらずして、寧ろ人格の共存、睿智あるものの集團、共通經驗の體系なりとなす。吾人は今此の事實を更に明に會得し得るものなり。吾人の凡てに向つて存する此經驗の體系は取りも直さず睿智の作用にして決して心以外の事實にあらざるなり。此の經驗の體系と、經驗に與かる共存の心とを解釋せんとするもの、これ哲學の本務なり。經驗に於ても亦たその解釋に於ても思想は睿智の範圍に止まるものなり。

思想は思想外に存するもの、又たは思想と無關係なるものを考へ、若しくは之れを用ひること能はざるものなり。吾人若しかゝる物を考へ得るが如く思ふか、蓋し經驗に於て凡ての人に共通なる

ものを、睿智に關係なき事實と誤解するか、若しくは經驗によりて範疇も始めて其の意義を示すものなるに、其の範疇を経験より抽出して、之れを心外の事實なりとなすかに因るものなり。少しく思考を運らさんか、かゝる事は直ちに矛盾に終るべきを覺るべけん。而して實在論の二律背反は續々發生すべきなり。

之れに反して吾人若し理解し得る經驗と、智力ある心靈とを以て、之れが根源を睿智に歸すとせんか、吾人が思想の體系は、全く終始統一を保ち、無人格機制的なる各種の實在論的の體系に、必然相伴へる慢性的矛盾を避け得るものなり。實在論は經驗にあらざりして、經驗の解釋なりとするときは、之れを擁護することの難きを明にするものなり。

出來得る限り誤謬を避けんがために、吾人は再び議論の概略を示さんと欲す。勿論こは性來の人は自然の有神論者には喜ばれざるところなり。何となれば種々なる誤解容易に生じ來ればなり。

兩者とも彼等の認識する事實の世界は、彼等自らの睿智と、又た彼等が隣人の睿智とに關せずして、存在するものなることを確信するものなり。此の世界は彼等が始めて之れを覺りたる時に始まりしものにあらず、又た彼等の發達する知識と共に發達するものにもあらず、又た彼等が消失したりとの意識と共に消失するものにもあらざるなり。こは漫に奇を衒ひ、逆説を喜ぶ、輕浮なる人々

を除くの外、此の事實は萬人の承認するところなり。然かも性來の人は此の事實を以て吾人の睿智に關せずして存在する宇宙は、凡ての睿智に關せずして存在することを示すものなりと想像するものなり。固より性來の有神論者は宇宙は智力によりて始まりしことを主張す。然れども亦た宇宙は今凡ての智力の外に存在することを主張す。無神論者は宇宙は今も以前も常に睿智の外に存在することを主張するものなり。兩者とも等しく此の外界の意味は明瞭火を見るが如く、又たその實有も自明なりと確信するものなり。

されども吾人の睿智を離れて存在すといふと、凡ての睿智を離れて存在すといふとは、二者その間に大なる差の存するものあり。感官的性質の世界は、甲若しくは乙の感覺性を離れて存在し得ん。然かもそは凡ての感覺性を離れて存在し得ざるなり。文學の世界はまた僅少の者、若しくは多數の人の睿智を離れて存在し得ん。然かもそは唯だ睿智の爲めに、又た睿智にありてのみ存在し得べし。扱て吾人の知るが如き宇宙は、眞に知能の種々なる範疇によれる宏大なる關係の體系なり。かゝる宇宙は睿智を離れて意義をなす能はず又た存在すること能はざるべし。此の關係の外に關係を有する實在のものありといふとも、此の結論に反するの効なかるべし。何となれば此等の物自らが其の關係によりて定限せられ、又た構成せられ、其の存在は構成的睿智を離れては背理となるものなればなり。吾人若しロックと共に關係は心の作用なりと主張しながら、心を離れて存在し得る

物の中に、或る關係の存せざる實有を發見せんと試みんか、吾人が努力は無益にして望なきものとなるを知るに至らん。かゝる場合には吾人は實有的なるもの其自身は知るべからざるもの。然かも知られ得る實有的なるものは、唯だ睿智にありて、又た睿智のために存するものなるを承認せざるべからざるなり。然れども此の宇宙がそれにより、又たその爲めに存在する睿智は、吾人の睿智にあらざるが故に、宇宙の永久の條件として宇宙的睿智存せざるべからず。かく論じてこそ始めて宇宙の肯定が意義を有するに至るものなれ。

カント以來苟も彼の著書を評價し得る者は、吾人は思想の範圍以外のものを知り得ること能はざるとを明にせり。心と心の所産とが可知的範圍の全體なり。カントは之れを明にして、又疑ふところなからしむ。知識の範圍内にあるものは、如何なるものと雖も、必ず心若しくは心の産物たらざるべからず。然れどもカントは全く批評的ならざる實在論の假定より脱すること能はず。思想の範圍以上の實在を認め之れを適當にも不可知的と稱したり。此の心外の實在は不可知的なるが如く、又た肯定し難き物なることを示すは後の哲學者の務なりき。その肯定が既に空虚なること明にせられたれば、従つて何物をも肯定することなし。かくして凡ての可能的知識と肯定とは、再び思想の範圍に復歸するものなり。

カントは二種の點を明にするの必要を感じたり。第一は知識に於ける心の構成的作用は是れなり。

されば知識は物の表示といはんよりも主として心性の表示なりとするものなり。第二は我等と我等の思考とに相關せざる或る物の客觀的實有是れなり。

此の二點はカント之れを相互によく調整すること能はざりき。彼が知識に含まれたる構成的心意の活動を考へしとき彼は一切の物をして單に我等の中にある再現、即ち個人的と云ふを得ざれども、純然たる主觀的人的に過ぎざるものとするの傾向あり。彼が獨立したる實有を考へしときは、超絶したる或る物の存在を主張するものにして、然かもそは思想の範圍外にありて、吾人は之れを知り又た考ふること能はずとなすものなり。さればカントの解釋は始終斷えざる矛盾の生ずるものあり。此の矛盾を免れて此の體系の眞理を維持せんと欲せば、全然心外の物といふ考へを棄て、物の世界をして、物の裏面若しくは物の内に存する思想界の表現となさしめざるべからず。然かも此の思想界は、又た物の世界をも有限の靈なる人間界をも作り、又た之れを併列せしむる無上睿智の表現たるものなり。かくして物は吾人の思想より獨立すると、同時に又た思想に適應するものなり。物は個人の幻像にあらず、されども思想の生産表現として思想の範圍内に存するものなり。是れによりて吾人は淺薄なる實在論の不可能と、又た知るべからざる物それ自身といふ智的の誹謗とより免るゝことを得るものなり。こは獨り唯心的有神論の立場によりて免がれ得るものなり。吾人々類が宇宙と物とを知る二元性は有限の靈と宇宙的秩序との源泉たる無限者の一元説によりて起り又た

超越せらるゝものなり。

かく言へばとて此の世界は實有なき概念に過ぎずといふ意にあらず。世界は單に概念のみにあらず。そは又た事業なり。世界内容は觀念によりて示さる。然れども世界の現實となるは唯だそが行爲となるによりてなり。そは單に神的理解による一概念に止まらずして、そは神的活動の一形態たるものなり。此の兩要素は世界に關する吾人の十分なる確信を表白するに必要なりとす。そは思想と固有の關係を離れたる塊の如き存在にあらず。そは實に思想の具體的となれるものなり。そは活動なき心の受動的觀念にもあらずして、寧ろ合理的觀念によれる活力の發出したるものなり。かるが故にそは實在にして又た同時に合理的なり。睿智の作爲なるが故に常に睿智によりて了解せらるゝものなり。吾人が世界の思想は兩極を有す。意義の見地よりして世界を見れば、神的觀念に達すべし。原因性の見地より考ふれば、神的意志に至るべきなり。

認識論と形而上學とは如上の結果に到達せざるべからず。然り此の結果に近づきつゝあるものなり。認識論・形而上學共に自己の本性を解するとき、有神のたらざるべからず。理性の信憑すべきこと、知識の妥當性とは、獨り有神論に基きてこそ主張し得るものなれ。機制的必然論は如何に論ずるも、誤謬の問題を解釋すること能はず。又たかゝる説は確實なる知識を演繹若しくは開發するの道を有せざるなり。自由なる睿智、世界の原由と有限なる知識者との中に存在するを信じ始

めて此の問題の解決らしき解決をなし得るものなり。理性の信憑すべきと、知識の妥當性とは科學及び哲學の假定なるが故に吾人は自由にして睿智ある神を以て、科學と哲學との公準なりと言はざるべからざるなり。兩者の可能なるは獨り有神の基礎の上に立ちて然るものとす。

吾人は本章の始めに於て宇宙に目的の存することを肯定するために、歸納的の推論を用ひたり。吾人は今更に廣濶なる理論的思索的推論の用ふべきを知るに至れり。吾人は心自らの自己實現と自己保存とに關したる、吾人の根本的公準が、目的的性質を有するを論じたりき。吾人は又た目的觀を望むは世人の常に於て、無人格機制説を以ては、到底人心を満足せしめ難きことを知るに至れり。吾人は更に理性は實在の無上の範疇として、睿智あり目的を有する原因といふ觀念に達するにあらずば、認識論及び形而上學上に於ける平稱態に到達すること能はざることをも理解するに至りたりき。無人格の立場に於ては思想は自ら不安定の地にありて、必ずや自家撞着に陥るものなり。

諸種の範疇は自ら消失し、若しくは自から抹殺するに至るべし。然れどもかゝる議論を了解するに幾分の智力と撓性とを要するものなり。然かも之れを了解するとき最善の議論たるを失はざるなり。歸納的の議論はその最善なるものもなほ選擇したる事實によるの不利を有す。然かも多數の事實はよし之れに反對することなしとするもなほ中立の狀にあるもの多きが如し。然れば目的は常に單に僅少なるものに適用せらるゝものにして、そは決して如何なるものにも適用し得らるゝもの

にあらずとの推察は、過たざるべしとの印象を與ふるものなり。かゝる議論は證據といはんよりも寧ろ解明として有効なるものなり。然れども此の議論も智的作用の固有なる形式たる目的が、理性と知識との構造中に入るものとして見るときは全く異なる形状を呈するものなり。かくして目的論の必要は理論的に確定せられ、經驗は單に之が由來を尋ね説明するの用をなすのみとなるものなり。固より此の認識論的、形而上學的議論は極めて抽象的にして、思索に従ふ人々を除く外決して衆人の喜ぶところにあらざるなり。そは有神論若しくは宇宙的睿智の存在は、思想及び知識に於て必然に含有せらるゝものなることを示すの價值あるものなり。此の見地よりして無神論は未だ十分に自からを領解し得ざる心の未熟なる誤解に基くものと思はるゝなり。そは寧ろ感覺と其の自然の解見とに捕へられ、救ふべからざる窮状にあるものなるべし。若し知識の一般的問題と關係せしめらるゝときは、直ちに雲散霧消するの説たるを免がれざるなり。其の淺薄と自滅性とは自ら明瞭となるものなり。無神論は蓋し哲學的無智なりと謂ふべし。

此の如く歸納、認識論及び形而上學に基く推論は悉く有神論を強むるものなり。宇宙は睿智に基くべしと假定せんか、吾人は大體に於て事實の之れに合するを見る。天地は理會すべき目的のために、合理的の方法に従つて營まれたる合理的の事業なり、固より吾人の知識は限局せられたりと雖も吾人の理解し得る限りに於ては、宇宙に超越的睿智の存在する痕跡を見るべし。此の如き場合に

於て知識愈々進めば、此の痕跡の益々明ならんことを信ずること難きにあらず。これ吾人が洞察の深微なるに従ひ一見亂雜にして法則なきが如き境域にも法則の行はるゝことを發見するならんと思はずに同じ。

次に吾人若し宇宙は睿智なきものに基くとの反對なる説を假定せんか、此の假定よりすれば、吾人は吾人の豫期する何事をも見出さざるべし。萬物は案外なりと言はざるべからず。何となれば無理性の力、理性の事業をなし、無意識、意識を生じ、睿智なきもの、睿智を出だし、必然より自由を生じ、而して目的なきもの目的あるが如くに作用す。此の如く萬事意外なりといはざるべからず。此の如きは無神論の物を解する方法なり。此の中にある光明と稱するものは實は暗黒なりといはざるべからず。

最早此等の議論を續くるの必要なかるべし。萬物の自由にして睿智ある原由を信ずることは、凡て他の客觀的信念と同じく理由の堅固なるものであること、此の信念は吾人が心的生活に密接なる關係を有するものにして、哲學も科學も亦た理論すら之れと存亡を共にするものとなることも既に明にせられたり。此等の理由によりて吾人は此の宇宙は實に睿智に基すと論斷するものなり。必然なる機制的作用を根本とするの概念は萬物の真相を解せしむること能はず。唯だ自由なる合理的の作用といふ觀念のみ、吾人に光明を與ふべし。又た之れを根本的實在と見做すも自らを愚とするもの

にあらざるべし。

凡て此等の理由あるを以て吾人は睿智が宇宙の原由なることを肯定するものなり。

第三章 世界的の原由は人格なり

世界の原由が睿智を有することを證する直接の議論は動かすべからず。然れば反對の議論出づるにあらざれば、此の結論は變ずることなかるべし。然れど反對の議論ありて假令有神論的結論を覆へす程にあらざるも、大に之れを弱むる力ありとは、思索家一般の間に行はるゝ説なるが如し。殊に人格隨て睿智は絶對者、無限者と相容るべからざるが故に、之れを世界の原由、絶對者、無限者に歸すべからずと論ずるものあり。此の如くなれば吾人は一方に於て睿智あり、隨て人格的なる世界の原由を信ずる理由ありと雖ども、又た他方に於ては其の概念の自家撞着なるが如く見ゆる事によりて惑はざるを得ざるなり。之れを有神論の二律背反とも稱すべけんか。

然れば有神論を賛する斷定に對しても尙ほ之れを論議するの要を見るものなり。

議論の點は無神論を助くる理由にあらず、寧ろ有神論に對する反論なりとす。而して其の態度は無神論的といはんよりは、寧ろ不可知論的なりと謂ふべけん。無神論が合理的根據を有せざることは明なり。然かも有神論も亦た精密に之れを考察するときは、果して多く無神論に優るところあるべきか。有神論に利ありと思はるゝは皮相の考にして、一度之れを深思熟考するときは、非常なる難點生じ來りて、遂に之れを否定するの止むなきに至るべしと。

論者の言には多少の信すべき點あり。通俗の有神思想は其の概念の粗笨なると共に其の言ひ表はし方は更に粗笨なるものなり。その擬人觀は容易に批評を惹起せしむ。有限者に屬する制限は、無分別にも無限者に移し入れられたり。神の目的に對する早急過信の解釋は、反つて注意深き思想家を辱かしむる風あるものなり。斯かる事實は多く眞しやかなる反對論を生ずるに至らしめたり。吾人は茲に之れを考究せんと欲するものなり。

吾人は既に睿智の存在を認むるにあらざれば、宇宙の秩序を解明すること能はざるべきを論じたり。然かも睿智を以て之れを解明すること能はじと難ずるものあり。

宇宙的秩序の法外なる複雑を述べて、こゝに疑問を發するものあり。曰く「こは果して凡て皆睿智の作用なるべきか」と。此の反對はよしや大哲學者なりと稱せらるゝ人によりて主張せらるゝとも、畢竟するに吾人の微弱なる想像力に訴ふるに過ぎざるなり。固より吾人は宇宙の過程を詳細に書くこと能はず。又た如何に無限者の心が斷えず無限に複雑なる自然の過程を指導して、嘗て倦むことなく、又た亂るゝ事なきかを寫し出すこと能はざるや明かなり。之れを爲さん爲めには吾人も亦たこの宇宙の指導者と等しからざるべからざるなり。然れども睿智が之れを爲し得ることを解するの難きは、睿智なきものゝ之れを爲し得ることを解するの難きに同じ。吾人は兩者の何れかを擇ばざるべからず。然かも利は後者にあらずして、寧ろ前者に存す。何となれば吾人若し世界の原由

に附するに全能と全知とを以てせんか。是れ少くとも形式的設備を此の論件に與へたるものなり。此の如き實在者が、かゝる事業を爲すに適すべきは明かなることにして、吾人は彼が如何に行動するかを語る義務なきものなり。そは畢竟彼の自由行動なればなり。然れども世界の原由を以て睿智なきものとなす時は、吾人は此の形式的設備を附すること能はず。事實は朦朧不可解たるを免るゝこと能はざるべし、かゝる結論は睿智存せずんば事實自らも成立すること能はざるのみならず、又た不可能なりとする認識論の立場を離れて然るものなり。

さりながら更に疑問は發せられたり。曰く宇宙の機制的説明は、論理上空想なりとの反對は又た等しく睿智の存在に對する反對ともならざるかと。吾人は凡ての結果を機制的原因に附すべからざるが如く、睿智の原因にも附すべからざらん。而して結果は何れにしても等しく複説に過ぎざるなきかと。若し睿智を機制的に考へ充足理由の無人格的原理と見做すときは此の説實に然らん。此の見解によるときは、睿智自らが宇宙的機制の一部ともなりて、思想は爲めに崩潰するに至らん。然れば吾人は睿智の中に測知すべからざる副意識的機制を確定せざるべからざるに至る。而して無限に遡源逆行して終に吾人は行くところを知らざるに至らん。然れども實は睿智は自由なるとき始めて睿智たるなり。而して根本的な解釋は事實を睿智の作業となす所にあり。吾人は空間的若しくは動的意義に於て、事實を睿智の中に運び入れざるなり。吾人はたゞ睿智を以て事實の根

源といふのみ、吾人かくいひ若しくは睿智の事實に顯はるゝを見ると稱する時は、事實は説明せられ、吾人は實に満足し得るものなり。吾人はこゝに他の言葉によりて言ひ顯はすこと能はず、たゞ經驗によりてのみ知り得る關係を有す。他の意義に於て事實を睿智の中に尋求せんとする企ては、第一了解すべからざると共に終には無限に遡源逆行して止まるところを知らざるに至るべきなり。自由の睿智を認むることのみ、獨り事物に對し眞の説明を與ふるものにして其の説明といふ點は全く事實を睿智の作業と見做すことにありとす。然れども睿智自からは説明し得べからず、そは寧ろ凡ての解釋の原理たればなり。そは他の物を説明するも自らをば唯だ承認するに過ぎざればなり。その自らを知るは更に究極なる或る物より演繹して然るにあらず。又た更に究極なる或る物に還元して然るにもあらず。自らの活ける經驗によりて然るなり。經驗は實有と可能性とを解する唯一の試金石なり。物の可能なるは事實なるが故なり。心は如何に此の睿智に存し且つ作用を爲すかは、之れを語るに能はず、然かも其の存在の單純十分なる理由によりて其の如何にを問ふを要せざるなり。究極の事實は如何なるものも單に存在することなり。吾人若し之れを他の或る物と關係せしめんと試むるときは、矛盾に陥らざることを得ざるなり。然れども心は存在し作用するものにして、物の理解し得べき秩序は之れが結果として生ずるものなり。吾人若し出來事を機制的運動の形像と見るよりも、寧ろ之れが起原を活ける睿智に歸せしむるときは、其の出來事の性質及び發生を

明解し得るや否やは、單に事實の問題にして疑を容るゝの餘地なし。

吾人は又た世界の原由は睿智のか若しくは無睿智のかなりと稱したり。こも亦た疑問とせられたり。其の理由とするところは睿智と無睿智とは、全然區別され、分裂したるものにあらず、此の兩者の何れよりも優りて更に高さもの、若しくは兩者を超越したる第三者の存在するやも未だ知るべからず。睿智が機制に優るが如く、宇宙に優りたる或る物の存在もまた可能ならずとせんや。吾人の微少なると生命の短かきとを思へば或はそは蓋然なりといふべからざるかと。

此の説は特に深奥なる説として、又た有神、無神の兩説を破るものとして、屢々唱導せられたるものなり。宇宙の眞實の解釋は、睿智にも亦た無睿智にも發見せられず。そは測知すべからざる超絶的のものに求むべきなりと。此は卓説の如しと雖ども實は最も内容の缺けたる空論たるに過ぎず。思索的空想は之れを言ひ顯はす言語を作成することに豊富なり。然かもそは純然たる論理上の音響に止まり狂暴の沙汰と稱するの外なく何等の意義を有せざるものなり。何となれば此の超絶的の或る物は思想にあらずして唯だ言葉なり。そは何等の意義をも有せずして、單に喋々するに過ぎざる、不幸なる性質を有する言語といふものゝ存在する事によりてのみ存在するに過ぎざるなり。されば之れに訴ふるは説明を求むるにあらずして、寧ろ説明を拋棄するものなり。説明は常に理解すべき言葉に於て爲さるべからず。吾人の思想によれば睿智的、無睿智的のものが、凡ての

存在物を包含するが故に、眞實の説明は兩者の何れかによりて試みられざるべからず。XYZ等は不可測の境域に於ては極めて深玄なる眞理たらん。然かも睿智の範圍に於ては單に意味なき文字の一例に過ぎざるものなり。

此の例によりて見るに、其の反對は曖昧なるところありて幾分の意味を生ぜしむるものあり。然かもその反對をして平凡のものたらしむる程の意味たるに過ぎず。吾人の思想は二つの要素を含む。ある合理的内容若しくは見解と此の見解に達する複雑なる過程と是れなり。前者は思想の一般的、客觀的要素にして、後者は吾人にとりて形式的、相對的のものならん。かく幾何學に於ても一般的要素は凡ての睿智に對して眞實なる命題より成るものなり。形式的要素は證明の形式と問題解釋の方法となり。此の要素は吾人に取りては相對的のものにして、一般的のものと稱することを得ざるものなり。夫れ睿智を以て吾人が解釋の方法、吾人が推論的理性の考案、吾人が不完全なる見解の方策なりとするときは、睿智より優れる或る物の或ひは存在するやも知るべからず。睿智若しくは理性の普有性と一般性とは、方法若しくは過程に存するものにあらずして、寧ろ合理的内容に存するものなり。然れどもこの概念は睿智以上の何物かを以て合理的見解の能力となすものにあらず。たゞ睿智の人的制限を越ゆとなすに過ぎず。此の説は決して新奇なるものにあらず長く有神論者の唱へたりし所のものなり。最高理性は一般に人の理性の推論的なるに反して直覺的なりとせら

れたり。

世界の原由を以て睿智なりと許すも、必ずしもそが人格的なりと稱し難しと爲すものあり。世界の原由は睿智的、合理的のものとなすも、然かも人格的にあらずとなす者多し。此の説は汎神論の詩的、更に適當にいへば想像的なる言論に顯はれたり。此等は人の想像を喜ばしむるものありと雖ども概して理性を満足せしむる議論にあらず。此の説に採るべきものありとせばそは一部通俗の擬人觀と、一部誤解せられたる思索的原理より來るものなりとす。

或は説をなして曰く、世界の原由は二重側面を有する本體にして、一方には廣さと形とを有し、他方に於ては生命と理性とを有てり、而して此等兩側面は各外界及び内界の實有を組織するものなりと。かゝる説の眞意は思想の世界と物の世界とを、一の本體の様態として結び附け、粗笨なる實在論的思想の二元説を免れんとする考へに出づ。

此の説はスピノーザ、其の他近代の一元論を主張する説に表はれたり。然かも悉く失敗に終りたり。其の基礎は本體を廣さあるものゝ如くに考へたる陳腐の見解と、虛妄架空なる「思想」といふ抽象物とに存す。何人も二重側面の本體とは如何なるものを意味するかを概念し得るものなし。固より想像は難なく此の問題を解釋せざるにあらず。然かも物は二重の側面を有し、其の一面は思想なりといふが如き考は、到底満足を與へべきものにあらざるなり。又た物理的・心理的なる二面相互

の関係は、未だ解釋せられざる問題なり。若し二者をして全く相互獨立のものたらしめば、一方に於ては思想を暗示するもの一として物質界に存在せざるべく、他方に於ては物質界を暗示する、何物も思想中に存せざるべきなり。かくて全然物質界を否定する結果直ちに起らんとす。又た二側面なる思想と延長と、其の下に包攝せられたる諸種の思想と延長したる諸物との関係も亦た不明なり。一般の思想と延長とよりして、特殊なる思想と物とに通達するの道は、全一と云ふ誤謬に依るの外又た道あらざるなり。略言すれば此は思想と延長との上に超越したるものありとの説に籠居せざるを得ざるべし。然れども此の如きは、吾人が其の言葉を熟知するにも拘らず、之れに對合する所の觀念は得て求むべからざるなり。そは理解力より來る概念といはんよりも、寧ろ想像の繪畫と云はん方當れりとなす。

超越的なるXの説甚だ空虚にして又た唯物的の存在を主として説き立つることも不可能なるにより、多くの論者は其の非有神的思想をば他の形式を以て説明せり。彼等は世界の原由を純正意志、無意識的睿智、無人格的理性、無人格的心靈、宇宙生命と名づけたり。然れども此等は不法なる抽象によりて形成せられたる空虚なる文字たるに過ぎず。ショーペンハウエルの説によれば、世界の原由は知識なく人格なき純正意志なりと。然れども純正意志とは空言に過ぎざるべし。意志は之れを意識あり智力ある心靈の官能と見るにあらざれば、無意味なる言葉たるを免れず。目的を意識的

に認識し又た此等目的に隨て自己を意識的に決定することなくば、これを以て意志と稱するに價ひするもの存せざるべきなり。吾人は言葉を以て己れを惑はすことあらん。されど其の實唯だ盲目必然なる勢力といふ概念のみ残るに過ぎざるを知らん。かゝる心理學的用語を使用する唯一の利益は聯想の便によりて、此の説の純然たる機制的性質を看過して、吾人が機制を超越し得たりと空想するの易きにあるとす。

無意識なる睿智とは、哲學の思索に於て屢々發せらるゝところの總念なり。假へばプラトニ派物理學にいふところの宇宙生命、カドウォースの陶冶的原理の如し、此の概念は第一に生命の世界に於て微分子的機制よりも更に高尚なるものゝ存することを認識せんと欲し、第二に神をして宇宙の鎖細なる事物を處理するの煩雜を免れしめんとする希望より屢々有神論の中に發見せられたり、カドウォースの所謂「陶冶的勢力は、『眠むさうなる醒めざる若しくは驚ける思慮』を有す。『技術家は屢々己の工作を尋求し、又た忘失す。されば又た相圖り、熟慮し、再考して前の工作を改修す。然かも自然は之れに反して決して其の爲すべきことを尋求することなく、又た靜止することなく。そは相圖ることなく熟慮することなく。悔ゆることもなく、又た再考して前業を改むといふこともなし。』然かも此の自然は神の敵手にあらず、之れに従屬するものにして、神の命ずるところを執行するの任に當るものなり。

ハルトマンは其の著「無意識哲學」に於て、此の總念を擴張して世界の原由其の物にまで及ぼせり。彼は無神論に反對して世界原由の睿智を肯定し、有神論に反對して其の無意識を唱ふ。意識の缺けたるは利益なりとせらる。絶對は過失なく其の無意識の目的に向つて行進するが故に、其の「洞觀」に關して語らるゝこと多し。然れどもこは單に修辭上の曖昧なる言葉に過ぎざるべし。意識は普通困却窘迫と同様なる意味に使用せらる。日常の活動に於て吾人は屢無意識的なりと云ふ。其の意味は吾人が作業を爲すとき、格別分解的反省を要せずして之を爲すといふことなり。又たかゝる反省は多く妨害となるものならんと。されどこは無意識の對句たる心理學的言辭の使用法を誤てるものなり。此の意味に於ては無意識の睿智とは自家撞着の言なり。此の言葉に附着すべき唯一の明白なる思想あり。即ち自から知識を有せざる盲目的勢力が、理解せらるべき結果を生ずとの思想是れなり。

無人格的理性なる語も亦た同様の批評を免れざるべし。如何となれば理性とは純然たる抽象名詞にして、唯だ意識ある心靈に於てのみ實在するものなればなり。之れを意識ある人格の性質より離れしめて考ふる時には、意味空漠として解すべからざるなり。又た無人格的理性とは、理性にあらざる盲目の勢力にして、唯だ合理的結果を生ずる様配合せられたるものなりとも考へ得ん。此の意味に於ては凡ての機械は人格的理性を有するものなり。

シヨールペンハウエルの唱ふる純正意志と等しく、無意識の睿智と無人格的理性とは、單に吾人をして、機制的無神論以上に超出したりと想像せしむる聯想を有する。心理學的言辭の使用に過ぎざるなり。

無意識の睿智及び無人格的理性の例證として常に提出せらるゝものは本能なり。然れどもこは例證とすべからず。何となれば第一に誰も本能の如何なるものなるかを知るものなければなり。そは決して積極的の概念にあらず寧ろ二個の否定の結合なり。そは一方に於ては意識的睿智にもあらず、他方に於ては純然たる機制にも非ざればなり。さればそは如何なるものなるか。吾人は之れに答ふるを得ざるなり。吾人は其の存在の證據存するや否やを問ふものありとも、亦た答ふるを得ざるべし。實際の問題は下等動物の所謂本能的作用を説明するにあり。然かも其の作用を吾人が全然何物とも知り得ざるものに關係せしむるも、そは説明となすに足らざるなり。されば之れに對しても他の例と等しく、其の事實を解明する道は唯だ二原理の一を擇ぶべきのみ、即ち睿智か機制かの何れかを擇ばざるべからざるなり。若し本能的作用は、目的及び意識を以て爲さるゝものにあらずとせば、そは全く睿智の結果にあらずして、唯だ睿智を模倣せる、機制的必然の結果たるものなり。此の必然は本能を有するものゝ組織内、若しくは其の物理的構造、若しくは前二者と周圍との關係に存するやも知るべからず。然れども何れにしても、此の必然其物の由來する造物者の睿智の